天路歷程

ジョン・バニヤン
藤遥　制作

著者の弁明

はじめて筆を手に取り
こうして書き始めたとき、私は思いもしなかった
このような形の小さな本を
自分が書くことになろうとは。いや、私は
別の本に取りかかっていたのだ。それがほぼ書き上がったころ
気づかぬうちに、私はこれを書き始めていた。
いきさつはこうだ。この福音の時代の
聖徒たちが歩む道と競走について書いているうちに
私はふと、寓意に入りこんでしまった
聖徒たちの旅路と、栄光に至る道をめぐる寓意に。
書きとめたことは二十を超えた。
書き終えると、頭にはさらに二十が浮かんでいた。
それがまた増え始めた
燃える炭から飛び散る火花のように。
そこで私は思った。そんなに早く増えるのなら
お前たちは別にしておこう。さもないと、しまいには
際限がなくなって
いま取りかかっている本を食いつぶしてしまう。
そこで、そのとおりにした。けれども
このような形で書いたものを
世の人々に見せようとは思っていなかった。ただ
何とも知れないものを作ろうと思っただけだ。
これで隣人を喜ばせようとしたのでもない。いや、そうではない。
私は自分の楽しみのために書いたのだ。
この走り書きに費やしたのも
暇な時間だけだった。もくろみといえば
こうして書くことで、気をそらすことにすぎなかった
私に過ちを犯させる、よからぬ思いから。
こうして私は、喜んで紙に筆を走らせ
たちまち思いを文字にした。
書き方の糸口をつかんだので
たぐるたびに出てきた。それを書きとめていくうちに
ついには、縦にも横にも
あなたが見ているほどの大きさになった。
こうして書いたものをまとめ上げると
ほかの人々に見せて、確かめようとした
けなされるか、認められるかを。
ある人は「生かせ」と言い、ある人は「殺せ」と言った。
ある人は「ジョン、出版しろ」と言い、ほかの人は「やめておけ」と言った。
ある人は「役に立つかもしれない」と言い、ほかの人は「立たない」と言った。
さて、私は板ばさみになり
どうするのがいちばんよいのか、わからなくなった。
ついに私は思った。意見がこう分かれているのなら
出版してしまおう。こうして事は決まった。
私は考えた。見たところ、出版を望む人もいる
同じ考えに流れない人もいるけれども。
では、だれの勧めがいちばん正しかったかを確かめるため
こうして試してみるのがよいと思ったのだ。

さらに私は考えた。もしここで、出版を望む人々の
願いをかなえるのを拒んだら
その人々にとって大きな喜びとなるはずのものを
私が妨げることになるかもしれない。
出版に反対する人々には
こう言った。「気を悪くさせたくはない。
だが、あなたがたの兄弟はこれを喜んでいるのだから
もっとよく見るまで、裁くのは控えてほしい」
読みたくないのなら、放っておけばよい。
肉を好む者もいれば、骨をしゃぶるのを好む者もいる。
そうだ、彼らをもっとなだめようと
私はこうも説いてみた。
このような文体で書いてはいけないのか。
このような方法で書いて、それでいて
私のめあて、つまりあなたの益にかなうことはできないのか。なぜいけないのか。
暗い雲は雨をもたらすが、明るい雲はもたらさない。
そうだ、暗くても明るくても、銀のしずくを
降らせさえすれば、大地は作物を実らせて
どちらをもたたえ、どちらにも文句をつけない。
両方がともに実らせたものを蓄える。
そうだ、両方をすっかり混ぜ合わせるので、その実りの中で
どれがどちらのものか、だれにも見分けられない。大地は
飢えているときには両方を喜ぶ。だが満ち足りていれば
両方を吐き出し、その恵みを無にしてしまう。
漁師が魚を捕るのに
どんな手を使うか、知っているだろう。どんな仕掛けをこしらえることか。
見よ、彼はありったけの知恵を絞り
わなも、糸も、釣りざおも、釣り針も、網も使う。
それでも、釣り針でも糸でも
わなでも網でも仕掛けでも、手に入らない魚がいる。
手探りで捜し、くすぐってやらなければ
何をしても、その魚は捕れない。
鳥を捕る者は、獲物を捕らえようと
なんとさまざまな手を使うことか。とても数えきれない。
鉄砲に網、鳥もち、明かりに鈴。
はい寄り、歩き、立ち止まる。そうだ、その身構えを
だれがすべて言い尽くせるだろうか。それでも、どれひとつとして
思いのままに鳥を捕らせてはくれない。
この鳥を捕るには、笛を吹き口笛を鳴らさねばならない。
だがそうすれば、あの鳥は逃してしまう。
真珠がひきがえるの頭に宿ることもあり
かきの殻の中に見つかることもある。
何の見込みもなさそうなものの中に
金にまさるものがひそんでいるのなら、それに気づいた者で
見つけようとして、そこをのぞくのをいとう者が
いるだろうか。さて、私の小さな本は
（あれこれの人の気を引くような
飾りこそ何もないが）
派手で中身のない考えに宿るものより
すぐれたものを欠いてはいない。
「それでもまだ、すっかり納得はできない
あなたのこの本が、厳しく試されたときに持ちこたえるとは」
おや、何が問題なのか。「暗くてわかりにくい」と。それがどうしたのか。
「だが作り話だ」と。それがどうしたというのか。
私のと同じくらい暗い作り話のことばで
真理をきらめかせ、その光を輝かせる人もいる。

「だが堅実さに欠ける」と。さあ、思うところを言ってみるがよい。
「弱い者を溺れさせる。比喩は人の目をくらませる」
　たしかに、神のことを人々に書き記す者の
筆には、堅実さがふさわしい。
だが、比喩で語るからといって
私に堅実さが欠けていることになるのか。神の律法、
その福音の律法は、昔、示されたではないか
型や影や比喩によって。それでも
思慮のある人なら、それにけちをつけるのをためらう
至高の知恵に挑みかかる者と見なされないように。いや、むしろ身をかがめて
捜し求める。釘や輪によって
子牛や羊によって、若い雌牛や雄羊によって
鳥や草によって、また小羊の血によって
神が何を語っておられるのかを。さいわいなのは
それらの中にある光と恵みを
見いだす人だ。
　だから、早まって決めつけないでほしい
私に堅実さが欠けている、私が粗野だと。
堅実に見えるものが、すべて堅実なのではない。
たとえで語られるものを、すべて侮ってはならない。
さもないと、ひどく害になるものを軽々しく受け入れ
良いものを、自分の魂から奪い取ってしまう。
　私の暗くおぼろなことばは
小箱が金を納めるように、真理を納めているだけだ。
　預言者たちは、真理を示すのに
比喩をよく用いた。そうだ、キリストと
その使徒たちのことをよく考える者は、はっきりと知るだろう
真理が今日に至るまで、こうした衣をまとっていることを。
　私は恐れずに言おう。聖書は
文体でも言い回しでも、あらゆる才知をしのぐが
いたるところで、こうしたものに満ちている
暗い比喩や寓意に。それでいて、湧き出ているのだ
まさにその書物から、あの輝きが、あの光が
私たちのいちばん暗い夜を昼に変える光が。
　さあ、私にけちをつける者は、自分の生き方をよく見るがよい。
そこには、私の本の中に見つけるどんな行よりも
暗い行が見つかるだろう。そうだ、思い知るがよい
自分の最上のものの中にも、もっとひどい行があることを。
　公平な人々の前に、私たちが並んで立つことができたなら
彼の一に対して、私は十を賭けてもよい
その人々は、この詩行にこめた私の意味のほうを
銀の祠に納めた彼の偽りよりも、はるかによく受け取ってくれるだろう。
さあ、真理は、たとえ産着にくるまれていても
判断を教え、心を正すものだと私は知っている。
悟りを喜ばせ、意志を
従わせる。記憶をもまた
私たちの想像を楽しませるもので満たし
私たちの悩みを和らげてくれる。
　テモテが健全なことばを用い
愚にもつかない作り話を避けるべきことは、私も知っている。
だが、謹厳なパウロも、たとえを用いることを
彼に禁じたところはどこにもない。たとえの中には
あの金、あの真珠、あの宝石が隠されていた
掘り出す値打ちのある、それも細心の注意を払って掘るに値するものが。
　もうひとこと言わせてほしい。神の人よ
あなたは気を悪くしたのか。私が自分の書くことを
別の衣を着せて示せばよかったと思うのか。

あるいは、もっとはっきり言えばよかったと思うのか。
三つのことを述べさせてほしい。そのあとは
それがふさわしいように、私にまさる人々にゆだねよう。
　一、私はこの方法を用いることを
禁じられているとは思わない。ことばにも、事柄にも、読者にも
乱暴を加えず、象徴やたとえを扱うにも
それを当てはめるにも、粗雑にならず
できるかぎり、あれこれの道で
真理を推し進めようと努めるのなら。
禁じられている、と言ったか。いや、私には許しがある
（手本もある。それも、ことばや行いによって
今の世に息をしているだれよりも
神を喜ばせた人々の手本が）
こうして思いを言い表し、こうして
このうえなくすぐれたことを、あなたに告げる許しが。
　二、木のように高い身分の人々も
問答の形で書いている。それでも、そう書いたからといって
彼らを軽んじる者はいない。もちろん、真理を
ゆがめるのなら、彼らはのろわれるがよい。そのために用いる技も、のろわれるがよい。
だが真理には自由を与えよう。あなたや私に向かって
打って出る自由を
神のお望みになるやり方で。ご自分の計画のために
私たちの思いと筆を導くすべを、私たちに初めて耕すことを教えた方より
よく知っている者が、だれかいるだろうか。
その方は卑しいものに、神聖なものの先ぶれをさせるのだ。
　三、聖書は多くの箇所で
この方法に似たことをしている。ある事柄を
示すために、別の事柄を持ち出すのだ。
だから私もこれを用いてよいし、それで
真理の金色の光を少しもさえぎりはしない。いや、この方法によって
真理に、昼のように明るい光を放たせることができる。
さて、筆を置く前に
私の本の益を示そう。それから
あなたも本も、あの御手にゆだねよう
強い者を引きおろし、弱い者を立たせる御手に。
　この本は、あなたの目の前に描き出す
永遠の賞を求める人を。
その人がどこから来て、どこへ行くのか
何をせずにおき、何をするのかを示す。
また、その人が走りに走って
ついに栄光の門にたどり着くさまを示す。
　また、いのちを求めて勢いよく出発する人々も示す
朽ちない冠を得ようとするかのように。
ここではまた、そのわけも見ることができる
彼らが骨折りを無にし、愚か者のように死んでいくわけを。
　この本は、あなたを旅人にするだろう
その勧めに従うならば。
あなたを聖地へと導くだろう
その導きを悟るならば。
そうだ、怠け者を働き者にし
盲人にも、喜ばしいものを見せるだろう。
　あなたは、まれで益になるものを求めているか。
作り話の中に真理を見たいか。
あなたは忘れっぽいか。元日から
大みそかまで覚えていたいか。
それなら、私の空想を読むがよい。オナモミの実のようにくっついて離れず
頼る者のない人には、慰めとなるかもしれない。

この本は、気のない人々の心をも
動かすようなことばづかいで書かれている。
目新しく見えるが、その中にあるのは
健全で誠実な福音の調べばかりだ。
あなたは憂いを晴らしたいか。
楽しくありながら、愚かさからは遠くありたいか。
なぞとその解き明かしを読みたいか。
それとも、もの思いに沈みたいか。
骨の肉をつつくのが好きか。それとも
雲の中に人を見て、その人が語りかけるのを聞きたいか。
眠らずに夢の中にいたいか。
それとも、同じひとときに笑いもし泣きもしたいか。
何の害も受けずに我を忘れ
まじないなしに、また我に返りたいか。
自分自身を読み、何とも知れないものを読み
それでいて、自分が祝福されているかどうかを
同じ詩行を読んで知りたいか。ああ、それならここに来て
私の本と、あなたの頭と心とを、ひとつに合わせるがよい。

ジョン・バニヤン

（一）滅びの町からの旅立ち

私はこの世の荒野を歩いていた。ある洞窟にたどりつき、その中で横になって寝た。眠っているあいだに夢を見た。夢の中で、ぼろぼろの服を着た男が、ある場所に立っていた。彼は、顔を自分の家のほうに向けず、手に一冊の本を持っていて、背中に大きな重荷を負っていた（イザヤ六四・六、ルカ一四・三三、詩篇三八・四、ハバクク二・二、使徒一六・三〇〜三一）。見ていると、彼は本を開いて読んだ。読んでいるうちに、さめざめと涙を流し、がたがたと震えた。それから、ついにこらえきれなくなって、悲痛な叫びをあげた。

「私はどうすればよいのか！」（使徒二・三七）

彼はこうして煩悶しながら家に帰った。妻と子供に自分の苦悩を悟られまいと、できるかぎり平静をよそおった。だが、苦悩はつのるばかりで、沈黙を保っていられなくなった。それでついに、胸中を妻と子供に打ち明けた。彼はこう話し始めた。

「最愛の妻よ、私のはらわたである子たちよ。お前たちの親愛なるこの友は、この身に重くのしかかる重荷のせいで死にそうだ。そればかりか、私たちの住むこの町が、天から降る火で焼き滅ぼされてしまうことを知ってしまった。これは確かなことだ。この恐ろしい破滅によって、私も、妻よあなたも、お前たち大切な子たちも、みなみじめに滅びてしまうのだ。助かるための逃れ道が見つかれば別だが、その道はまだ私には見えない」

これを聞いて、家族はひどく驚いた。彼の話が真実だと信じたからではない。彼の頭がおかしくなったと思ったからである。それで、日も暮れかかってきたので、一晩眠ればきっと直るだろうと見込んで、せかして彼を床につかせた。だが、夜になっても、苦悶は昼間と変わらなかった。一睡もできずに、夜通しひたすらため息をつき、涙を流した。朝になると、家族は具合はどうかと尋ねた。彼は答えた。

「悪くなる一方だ」

もう一度、火の裁きの話をしようとしたが、家族は聞く耳を持たなかった。家族のほうでは、彼の病を吹き飛ばすため、強硬手段に出ようと考えた。あざ笑ってみたり、叱りつけてみたり、完全に無視したりした。それで、次第に彼は自室に引きこもりがちになった。家族が滅びないようにと涙ながらに祈り、また自分自身の惨めな境遇を嘆いた。たった一人、野に出て、読んだり祈ったりした。こうして数日が経った。

ある時、私が見ていると、彼は野を歩きながら、いつものように本を読んでいて、心の苦悩に激しくさいなまれていた。読んでいるうちに、前と同じように叫び出した。

「救われるために、私はどうしたらよいのか！」

また、私は見た。彼はあちらこちらの道を見定めていた。いかにも逃げ出したいようだったが、呆然と立ち尽くしていた。どの道に進めばよいかわからなかったからだと、私には思われた。なお見ていると、伝道者という名前の男がやってきた。

「どうしてあなたは泣いているのですか（ヨブ三三・二三）」

彼は答えた。

「先生、この手にある本を読んでいてわかったのです。私には死ぬことと、死後裁きを受けることが定められています（ヘブル九・二七）。かといって、死ぬのも嫌ですし（ヨブ一六・二一）、裁きに耐えることもできません（エゼキエル二二・一四）」

クリスチャンがこの世を去るやいなや出会うのは伝道者。伝道者は愛をこめて彼を迎えもうひとつの世の知らせを告げ、教えるこの下の世からかの世へ登るすべを。

伝道者は尋ねた。

「どうして死ぬのが嫌なのですか。この世の生は悪に満ちているではありませんか」

「この背中に載っている重荷のせいです。これが私を墓よりも低いところへと沈め、トフェテ（地獄）に落としてしまうのではないかと思うと怖いのです（イザヤ三〇・三三）。先生、牢屋に入る覚悟さえできていないのですから、裁きを受け、そこから刑の執行に向かう覚悟など、できているはずがありません。そんなことを考えて泣いているのです」

伝道者は言った。

「そんな状態なのに、どうしてじっと立ち止まっているのですか」

彼は答えた。

「どこに行けばよいのかわからないからです」

それを聞いて、伝道者は、羊皮紙の巻物を手渡した。そこにはこう書かれていた。

『やがて来る御怒りから逃れよ』（マタイ三・七）

男はそれを読み、それから伝道者をまじまじと見つめた。

「私はどこに逃げなければならないのですか」

伝道者は、広大な平野のほうを指差して、こう言った。

「向こうにある狭い門が見えますか」（マタイ七・一三〜一四）

「いいえ」

「では、あそこにある輝く光は見えますか」（詩篇一一九・一〇五、第二ペテロ一・一九）

「はい、見えると思います」

「あの光から目を離さずに、まっすぐにそちらに向かって行ってください。そうすれば、狭い門が見えてきます。その扉を叩けば、そこであなたがすべきことを教えてくれます」

私は夢の中で見ていた。男は走りだした。その場所は自分の家からそれほど離れていなかったが、妻と子供は気づき、彼に「帰ってきなさい」と大声で呼びかけた（ルカ一四・二六）。だが、彼は耳を指でふさいで、こう叫びながら走った。

「いのち！　いのち！　永遠のいのち！」

彼は後ろを振り返らなかった（創世記一九・一七）。平野の真ん中に向かって無我夢中で走っていった。

近所の人たちも彼が走っているのを見ようとぞろぞろと出てきた（エレミヤ二〇・一〇）。彼の走る姿を見て、ある者は馬鹿にして笑い、ある者は脅した。ある者は帰ってくるように呼びかけた。さて、そうした者たちの中で、二人の人が力づくで彼を戻そうと決心した。一人の名前は〈強情〉、もう一人は〈軟弱〉といった。彼は、二人からもうすっかり離れたところにいた。けれども、二人は追いかけることにした。しばらく走っていると、彼に追いついた。彼は尋ねた。

「隣人どの、何のために来られたのですか」

「一緒に戻るよう、あなたを説得しに来たのです」

だが、彼はきっぱりと断った。

「そんなことできっこありません。あなたたちが住んでいるのは〈滅びの町〉です。そこは私の生まれ故郷でもありますが、まさしく滅びの町だと私にはわかるのです。そこにいたら、遅かれ早かれ死んで、墓よりも深いところにくだることになります。そこでは火と硫黄が燃えています。隣人どの、どうか納得して、私と一緒に来てください」

強情が答えた。

「なんだって！　友も快適な生活も、後に残して捨てて行けとおっしゃるのか」

クリスチャン（それが彼の名前である）は言った。

「そうです。あなたが捨てるものは（第二コリント四・一八）、私が探し求めている楽しみのほんの一部とさえ比べものになりません。私と一緒に来て、それをしっかりと握って離さなければ、私と同じものにあずかれます。私が行こうとしている場所には、あり余るほど十分にあるのです（ルカ一五・一七）。さあ、来てください。私の言っていることが間違いないとわかるはずです」

強情「いったい何を探し求めているのですか。それを見つけるために、この世のすべてを置いて行くほどのものですか」

クリスチャン「私が探し求めているのは、朽ちず汚れず、しぼむことのない資産です（第一ペテロ一・四）。それは天にたくわえてあり、かたく保たれています（ヘブル一一・一六）。真摯に求める者には、定められた時に、それが与えられます。よろしければ、私の本でそのとおり読んでみてください」

強情「フン！　そんな本は捨ててしまえ。俺たちと一緒に戻るのか、それとも戻らないのか」

クリスチャン「戻りません。私はすでに手をすきにかけたものですから（ルカ九・六二）」

強情「軟弱よ、さあ戻ろう。この男は置いていこう。こういう頭のおかしな馬鹿者の連中は、いったん何かを思い込んだが最後、良く答えることのできる七人の者よりも、自分のほうが賢いと思っているんだ（箴言二六・一六）」

軟弱「いや、悪く言ってはいけないよ。この善良なクリスチャンの言っていることがもしも真実だったら、彼が求めているものは僕らの持ち物よりも素晴らしいんだから。僕の心はこの隣人と一緒に行きたがっているんだ」

強情「何だって！　お前もおかしくなったのか。俺の言うことを聞け。戻るんだ。こんな頭のおかしな奴についていったら、どうなるかわかったもんじゃない。さあ帰った帰った。よく考えろ」

クリスチャン「いいえ、軟弱さん、あなたこそ隣人の私と行きましょう。私が話したものだけでなく、さらに栄光あるものを得られます。もし私を信じられないなら、この本を読んでごらんなさい。書かれていることが真実である証拠に、ほら、すべての箇所がこれを書いた方の血によって保証されています（ヘブル九・一七～二二、一三・二〇）」

軟弱「ええと、強情さん、僕はもう腹が決まりました。この善良なお方について行って、運命を共にします。でも、クリスチャンさん、あなたはこの望みの地に行く道をご存知なのですか」

クリスチャン「伝道者という名前の方から、前方にある小さな門に急いで行くように言われました。そこで、道について教えてもらえるそうです」

軟弱「では、良い隣人さん、行きましょう」

それで、二人は共に出発した。

強情「俺は自分の居場所に戻ろう。こんな道を外した荒唐無稽な連中の仲間にはなるまい」

私は夢の中で見ていた。強情が行ってしまうと、クリスチャンと軟弱は、話をしながら平野を進んだ。二人はこんなふうに会話した。

クリスチャン「軟弱さん、よろしくお願いします。あなたが一緒に来てくださると決心してくださって嬉しいです。私はまだ見ぬものの力と恐ろしさを感じましたが、強情さんでさえ、私と同じものを感じていたなら、こんなにあっさりと背を向けて帰ることはなかったでしょうに」

軟弱「クリスチャンさん、ここにはもう私たち二人しかいませんから、もっと詳しく教えてくださいな。私たちが行く先にあるのは、どんなもので、どのように楽しめるものなのですか」

クリスチャン「うーん、私は心の中でははっきりと感じ取っていますが、うまく話せません。神のことは言い表せないものです。ですが、あなたがしきりに知りたがるものですから、本に書いてあることを読んであげましょう」

軟弱「この本が、完全に真実を語っているとお考えなのですか」

クリスチャン「はい、まったくそのとおりです。偽ることのできない方が語ったおことばですから（テトス一・二）」

軟弱「なるほど。では、どんなことが書かれているのですか」

クリスチャン「私たちの住まいとなる永遠の御国、私たちに与えられる永遠のいのちです。私たちは永遠にその御国に住まうようになります（イザヤ四五・一七、ヨハネ一〇・二八～二九）」

軟弱「そうですか。他には何がありますか」

クリスチャン「私たちに与えられる王冠と栄光です。私たちを天の大空にある太陽のように光り輝かせる衣もあります（第二テモテ四・八、黙示録三・四、マタイ一三・四三）」

軟弱「最高ですね。他にはどうですか」

クリスチャン「もはや涙も悲しみもありません。その場所の主人である方が、私たちの目から涙をことごとくぬぐいとってくださるからです（イザヤ二五・六～八、黙示録七・一七、二一・四）」

軟弱「それで、そこではどんなお仲間がいらっしゃるのですか」

クリスチャン「セラフィム、ケルビム（イザヤ六・二）、見るもまばゆい生き物が一緒にいます。そこでは、私たちよりも先にそこに行った、何千、何万もの仲間にも出会うでしょう。誰一人としていじわるな者はおらず、愛があり、聖なる者たちばかりです。誰もが、神の御目にかなって歩み、神の御前で永遠に受け入れられています（第一テサロニケ四・一六～一七、黙示録五・一一）。つまり、金の王冠をかぶった長老たちに会います（黙示録四・四）。金の竪琴を持った聖なる乙女たちに会います（黙示録一四・一～五）。主を愛するゆえに世によって切り裂かれた者、火で焼かれた者、獣の餌となった者、海に投げ込まれた者に会います（ヨハネ一二・二五）。皆すこやかで、服を着るように不死を着せられています（第二コリント五・四）」

軟弱「それを聞くだけでもう心が踊りますね。でも、それは本当に味わえるものなのでしょうか。どうしたら私たちもそれにあずかれるのでしょうか」

クリスチャン「かの御国の支配者である主が、この本に書き記してくださいました。その要点は、私たちがそれを真摯に求めるなら、主が私たちに気前よく与えてくださるということです」

軟弱「ああ、お仲間さん、それを聞いて嬉しくなりました。さあ、急ぎましょう」

クリスチャン「ですが、私は全速力では走れません。ほら、この背中にある重荷のせいで」

（二）失望の沼

私は夢で見ていた。平野の真ん中に大きな泥沼があった。会話が終わるころ、二人はそこに差し掛かった。不注意にも、二人とも泥沼にずぼりと落ちてしまった。沼の名前は〈失望〉といった。二人はしばらくの間、泥まみれになってもがいた。クリスチャンは背中の重荷のせいで沼の中に沈み始めた。

軟弱「おお、クリスチャンさん、どこにいるのですか」

クリスチャン「自分でもどこにいるかわかりません」

その時、軟弱は腹を立て始め、クリスチャンに怒鳴った。「これが道中あなたが話してくれた幸福ってやつですか。のっけからこんなひどい目にあうのなら、旅の終わりまでに何を期待できるというんですか。生きてここから抜け出せたら、その素晴らしい国にはひとりで勝手に行ってください」

そう吐き捨てると、軟弱は必死でもがいて沼から抜け出した。はい上がった沼のふちは自分の家のある側だった。すたすたと軟弱は帰って行き、クリスチャンが彼に会うことは二度となかった。

それで、クリスチャンは失望の沼にひとり取り残された。それでも、自分の家から遠いほう、狭い門に近いほうの岸をめざして、懸命にもがいた。ふちまでは来たが、背中の重荷のせいで岸からあがることができなかった。だが、私が夢の中で見ていると、一人の男がやって来た。名前は〈助力〉といった。助力はクリスチャンに尋ねた。「そこで何をしておられるのですか」

クリスチャン「伝道者という方に出会って、この道を行くようにと言われたのです。やがて来る御怒りからのがれるために、狭い門に行きなさい、と。それで向かっていたら、こうして落ちてしまいました」

助力「では、どうして踏み石を探さなかったのですか」

クリスチャン「恐ろしさにひどく追い立てられて、いちばん近い道を逃げてきたので、落ちてしまったのです」

助力「それなら、手を出してください」

クリスチャンが手を差し出すと、助力は彼を引っ張り出した（詩篇四〇・二）。彼を固い地面に立たせ、続けて道を行くようにと諭した。

夢の中で私は、クリスチャンを引き抜いた助力に歩み寄って、尋ねた。「すみません。ここは滅びの町から狭い門に続く道の途中だというのに、どうしてこの沼地を埋めないのですか。あわれな旅人がもっと安全に旅路を行けるように、工事したらよいではありませんか」

すると、助力は教えてくれた。

「この泥沼は、埋め立てられるものではありません。この窪地には、罪の自覚にともなって出る残滓と汚物が流れ込んで集まっています。それで失望の沼と呼ばれています。罪人が自分の失われた状態に目覚めるとき、その魂に恐れ、疑い、心をくじくような思い煩いが起こってきます。それらがごちゃまぜになって、この場所に溜まっています。そういう理由で、ここはひどいありさまなのです。

この場所をひどいまま放置するのは、王のみこころではありません（イザヤ三五・三〜四）。王の測量士の命により、千六百年以上もの間、この場所を埋め立てるために王の働き手が雇われています。私の知るところでは、少なくとも二万台分の荷馬車の積み荷、いや、何百万もの健全な教えがここに飲み込まれました。それらは季節を問わず、王の領土のいたるところから運ばれてきたものです。しかも、わかる人に言わせれば、この場所を良い地面にするには最高の材料だそうです。そうして沼を埋め立てようとしているのですが、あいかわらず失望の沼は変わりません。できるかぎりのことをしても、ずっとこのままでしょう。

本当は、この沼の真ん中にもしっかりとした良い踏み石が置かれています。立法者の命令で置かれたものです。ですが、天候が変わる時などに、沼が大量の汚物を吐き出すと、その踏み石はほとんど見えなくなります。見えたとしても、人は頭がくらくらして足を踏み外し、すっかり泥まみれになってしまいます。踏み

石はちゃんとあるにもかかわらずです。けれども、門を通過すればその先の大地は歩きやすくなります（第一サムエル一二・二三）」

私は夢の中で見ていた。この頃には軟弱は帰宅していた。それで、近所の者が彼のところに来た。ある者は、帰ってくるとは賢明だと言って褒めた。またある者は、クリスチャンと同行して危険な目にあったのは馬鹿だとけなした。またある者は、彼の臆病さを笑った。「せっかく思い切って旅に出たのに、ちょっとの困難で引き返すなんて、自分ならそんな見苦しいことはしないね」

軟弱は恥ずかしくなって人々の間で小さくなっていたが、そのうちに自信を取り戻した。すると皆が話の向きを変えて、陰でみじめなクリスチャンを馬鹿にして笑い始めた。軟弱については、これくらいにしておこう。

（三）世の賢者

さて、クリスチャンがひとりで歩いていると、平野の向こうから人が来るのが見えた。二人は交差路でばったりと出会った。その人の名前は〈世の賢者〉といった。〈滅びの町〉の近くにある〈肉の知恵〉という大きな町に住んでいた。彼はクリスチャンのことを噂で聞いていた。というのも、クリスチャンが滅びの町を出立したことは大きな騒ぎになったので、地元だけでなく、他の町にまで噂が広がっていたのである。クリスチャンが苦しそうに歩き、青息吐息になっているのを見て、それと察した彼は話しかけた。

世の賢者「こんにちは。そんなに大きな重荷を背負ってどちらに行かれるのですか」

クリスチャン「まったく、これほどの重荷を背負ったあわれな者はいないでしょう！　それで、どちらにと聞かれましたね。私は、あちら前方に見える狭い門に行こうとしています。そこに行けば、この重たい荷物を背中から降ろしてもらえると聞きまして」

世の賢者「あなたには、妻子はおられますか」

クリスチャン「います。ですが、この重荷があまりにもつらいので、家族と一緒にいる喜びを以前のように味わう余裕がなくなりました。まるで家族がいないかのようです」（第一コリント七・二九）

世の賢者「私の話を聞いてもらえますか。助言できると思います」

クリスチャン「良い助言でしたら聞きます。私には良い助言が必要なのです」

世の賢者「では、その重荷をはやく降ろしてしまいなさい。そうしなければ、心の平穏が訪れることはありませんし、神があなたに与えてくださった祝福を楽しむこともできません」

クリスチャン「そうしたいのはやまやまです。こんなに重たいものは降ろしたいです。ですが、自分では降ろすことができませんし、私たちの国にもこれを肩から降ろしてくれる人はいません。だから私は、お話ししたとおり、重荷を降ろすためにこの道を進んでおります」

世の賢者「この道を行くようにと誰が言ったのですか」

クリスチャン「とても立派で高貴なお方とお見受けしました。名前は確か、伝道者といいます」

世の賢者「そんな助言をするなんて、まったくひどい人ですね！　彼があなたに勧めた道ほど危険で困難な道は、この世に他にありませんよ。助言どおりに行ったら大変なことになります。お察ししますが、さっそくやっかいごとに巻き込まれたんでしょう。なにしろ、〈失望の沼〉の泥が体に付いていますからね。沼は悲しみの始まりにすぎません。このまま行くと多くの悲しみにあうことになります。

よく聞いてくださいね。私はあなたより齢を重ねています。あなたが歩いている道で待ち構えているのは、疲労困憊、痛み、飢え、危険、裸、剣、獅子、竜、闇、そして死などです。本当です。嘘じゃありません。多くの証言があります。それなのに、赤の他人の言うことを真に受けて、そんなに軽々しく身を投げ出してよいものでしょうか」

クリスチャン「お言葉ですが、私の背中にある重荷は、お話ししてくださったあらゆる患難よりも私には恐ろしく感じられるのです。この重荷から解放されるなら、この道でどんなものと出会うとしても構いません」

世の賢者「その重荷は、はじめどんなふうにして背中に載せられたのですか」

クリスチャン「この手に持っている本を読んでいるうちに、こうなりました」

世の賢者「やはりそうですか。なに、弱い人によくあることです。身の丈に合わない高尚なことに首を突っ込んで、あなたみたいにあるとき急に混乱します。その混乱のせいで、お見受けするところあなたもそうなっているように、腑抜け

になってしまうばかりでなく、自分でも何を求めているかもわからずに無茶な冒険に出るものです」

クリスチャン「私は自分で何を求めているか知っていますよ。身を押しつぶすようなこの重荷から自由になることです」

世の賢者「でも、自由を求めているのに、どうしてこんな危険の多い道を進むのですか。私なら、あなたが求めているものを得る方法を教えてあげられますよ。あなたが聞く耳を持っていればの話ですが。こんな道をわざわざ行って危険に身をさらす必要なんかありません。しかも、その手立てはすぐ近くにあります。付け加えておくと、その方法なら危険でないだけでなく、安全で仲間もいて満ち足りることができます」

クリスチャン「どうかその秘密を私にも教えてください」

世の賢者「もちろんです。あちらのほうに〈道徳〉村という村があって、そこに〈遵法〉という名前の方がいます。非常に思慮深く、非常に評判の良い方です。その方は、あなたのような人から重荷を降ろす方法を心得ていらっしゃいます。じっさい私の知るところによると、あの方は、こうして多くの人を助けてきました。それだけでなく、重荷のせいで正気を失いかけた人を治す方法もご存知です。ですから、申し上げたとおり、すぐにあの方のところで助けてもらいなさい。お宅はここから一マイルもありません。あの方がご在宅でなかったとしても、家には〈礼節〉という名前の若いご子息がおられます。お父上と引けを取らない腕前ですから大丈夫です。そこに行けば、重荷を取ってもらえます。それに、もしあなたが前に住んでいた町に戻るのがお嫌でしたら、妻子をこの村に呼びにやることもできます。私も前の町に戻るのはおすすめしません。この村にはいくつか空家があって、手頃な値段で買えます。物価も安くて良い物が手に入ります。ここは隣人もきちんとしていて正直で信頼できますから、前の暮らしよりも良くなることうけあいです」

クリスチャンはしばらく迷っていたが、決心した。もしもこの人の言ったことが真実なら、忠告に従うことが最も賢明だ。そう考えて、口を開いた。

クリスチャン「では、すみませんが、その正直な方の家へはどのように行ったらよいでしょうか」

世の賢者「向こうにある山が見えますか」

クリスチャン「はい、よく見えます」

世の賢者「あの山のほうに向かってください。そうしたら最初に行き当たる家がその方のお宅です」

こうしてクリスチャンは道を変更して、助けを求めに遵法の家に向かった。ところが、山のふもとに来ると彼は困難を感じた。山は高くそびえ立って見え、道の真横に崖がせり出していた。先に進むのは危険だと感じた。いまにも岩が頭上に落ちてきそうだった。クリスチャンは呆然と立ち尽くした。背中の重荷は、本来の道にいたときよりもずっしりと重くなっていた。山から炎も吹き出てきた（出エジプト一九・一六、一八）。クリスチャンは、身が焼かれるのではないかと怯えた。ここに来て、恐怖で汗をかき、体が震えた（ヘブル一二・二一）。世の賢者の忠告に従ったことを後悔し始めた。そうこうしていると、向こうから伝道者がやってくるのが見えた。クリスチャンは恥ずかしくなって顔を真っ赤にした。伝道者はだんだんと近づいてきた。そして、彼の目の前に来て、きびしい表情でじっと見つめ、諭し始めた。

クリスチャンが肉の人に耳を貸せば
道を外れ、高い代償を払うことになる。
世の賢者が聖徒に示せるのは
束縛と苦しみに至る道だけなのだから。

伝道者「クリスチャンさん、ここで何をしているのですか」

クリスチャンは返答に窮した。伝道者は続けた。「あなたは滅びの町の外で泣いていた方ですよね」

クリスチャン「はい、先生。それが私です」

伝道者「狭い門のところに行くようにと、私は申し上げませんでしたか」

クリスチャン「はい、先生」

伝道者「それなら、どうしてこんなにも早く道を変えたのですか。あなたはもう道から外れています」

クリスチャン「失望の沼を抜けたところで、ある人と出会いました。その人に、前方の村に行けば重荷を取ってくれる人がいると説き伏せられたのです」

伝道者「どんな人でしたか」

クリスチャン「立派な人に見えました。いろいろと話をされて、最後には私も折れてしまいました。それでここに来ました。でも、この山を見て、崖が道に大きくせり出しているものですから、頭上に落ちて来るのではないかと急に怖くなったのです」

伝道者「その人はあなたに何と言いましたか」

クリスチャン「私の行き先を尋ねてきたので、それに答えました」

伝道者「それから何か言われましたか」

クリスチャン「家族はいるか、と。それで私は、家族はいるものの、背中の重荷で押しつぶされそうなので、家族といる楽しみを感じられないと答えました」

伝道者「そうしたら彼は何と言いましたか」

クリスチャン「早く重荷を降ろしたほうがいい、と。私は、そうして楽になりたいです、と答えました。だからあちらの門に行って、解放される場所に行くための助言をそこでもらうのだ、と言いました。すると彼は、もっと良い方法、短くて簡単な方法があると言いました。先生、あなたが教えてくださった方法よりも簡単だということです。彼が言うには、こういう重荷を降ろさせてくれる力を持ったお方がいるので、その家に行きなさい、とのことでした。私はそれを信じて、行き先を変えてここに来ました。早く重荷を降ろして楽になりたかったからです。ところが、ここに来ると、こんなふうになっていて、危ないし怖いしで立ち止まりました。途方に暮れています」

伝道者は言った。

「しばらくそこに立っていなさい。神のみことばを示しましょう」

クリスチャンは震えながら立っていた。伝道者は言った。

『あなたがたは、語っておられるかたを拒むことがないように、注意しなさい。もし地上で御旨を告げた者を拒んだ人々が、罰をのがれることができなかったなら、天から告げ示すかたを退けるわたしたちは、なおさらそうなるのではないか』（ヘブル一二・二五）

『わが義人は、信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない』（ヘブル一〇・三八）

伝道者はこのことばを彼に当てはめた。

「あなたはこの悲惨な過ちに陥ろうとしています。いと高き方の警告を拒み、平和の道から踏み外そうとしています。地獄の危険はすぐそこです」

それを聞いて、クリスチャンは死んだように彼の足元に倒れて、叫んだ。「わざわいなるかな、私は滅びるばかりだ！」

伝道者は彼の右手を握って、言った。

『人には、その犯すすべての罪も神を汚す言葉も、ゆるされる』（マタイ一二・三一、マルコ三・二八）

『信じない者にならないで、信じる者になりなさい』（ヨハネ二〇・二七）

それで、クリスチャンは少し生気を取り戻して、伝道者の前に立ち上がった。まださっきのように震えていた。

伝道者「あなたにこれからお話しすることを、もっと真剣に聞いてください。今、あなたを欺いた者が誰であるのか、また彼があなたを誰のもとに行かせようとしたのかをお話しします。あなたが出会ったのは、世の賢者と呼ばれている者です。まさにふさわしい名前です。ひとつには、彼がこの世の教えだけを好むからです（第一ヨハネ四・五）。だから、彼はいつも道徳村の教会に行くのです。もうひとつには、彼がこの世の教えを何よりも愛しているからです。その教えによって十字架を免れられるからです（ガラテヤ六・一二）。そして、彼はこのように肉的な気質の者なので、私の道が正しいのに、それを曲げようとするのです。さて、この人の助言には、あなたが徹底して拒絶しなければならないことが三つあります。

一、あなたを道から外したこと

二、十字架を嫌悪させたこと

三、あなたの足を死の支配するところに向かわせたこと

第一に、あなたを道から外した彼の助言を拒絶しなければなりません。そうです、それに同意してしまったあなた自身のことも。なぜなら、世の賢者の助言に従うことは神の助言を拒むことだからです。主は言われます。

『狭い戸口からはいるように努めなさい』（ルカ一三・二四）

これが、私があなたを送り出した門です。

『命にいたる門は狭く、その道は細い。そして、それを見いだす者が少ない』（マタイ七・一四）

ところが、この悪い者は、この狭い門から、またそこに至る道から、あなたを外し、もう少しで滅びに至らせるところでした。だから、あなたを道から外した彼の助言を憎み、彼に聞き従った自分自身を忌み嫌いなさい。

第二に、十字架を嫌悪させようとした彼の働きを拒絶しなければなりません。なぜなら、エジプトの宝を前にしても、十字架をそれにまさる富と思うべきだからです（ヘブル一一・二五～二六）。それに、栄光の王はあなたにこう言われました。

『自分の命を救おうと思う者はそれを失う』（マルコ八・三五、ヨハネ一二・二五、マタイ一〇・三九）

『だれでも、父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分の命までも捨てて、わたしのもとに来るのでなければ、わたしの弟子となることはできない』（ルカ一四・二六）

真理のことばによれば、十字架なくしては永遠のいのちを得られません。それなのに彼は、その十字架こそがあなたの死になると説き伏せようとしたのです。だから、あなたはこの教えを拒絶しなければなりません。

第三に、あなたの足を死の支配するところに向かわせようとした彼の働きを憎まなければなりません。考えてご覧なさい。彼があなたを誰のところに行かせたのか、そしてその人があなたを重荷から解放するのにどれほど無力であるかを。

あなたが助けを求めに行った人は、名前を遵法といいます。彼は、奴隷の女の子供です。彼女は今も奴隷であり、その子供たちも奴隷です（ガラテヤ四・二一～二七）。そしてその女は、奥義としては、あなたが頭上に落ちてくるのではないかと恐れた、このシナイ山なのです。彼女とその子供が奴隷として束縛されているとしたら、あなたは彼らの助けによって自由になることを期待できるでしょうか。ですから、この遵法という者は、あなたを重荷から解放できません。彼によって重荷を降ろしてもらえた人は、これまで一人もいません。これからもいないでしょう。あなたがたは律法の行いによっては義とされません。律法の行いによっては、生きている人はだれひとり重荷を降ろすことができないからです。ですから、世の賢者は異邦人であり、遵法は詐欺師です。彼の息子である礼節は、作り笑顔をこさえていますが、偽善者にすぎません。あなたを助けられません。

私を信じなさい。あなたが聞かされた、これら愚かな者たちの騒がしい話には、私がお伝えした道から外させて、あなたを欺き、救いを奪おうとするたくらみしかありません」

それから、伝道者は天を見上げて、彼が話したことの確証を大声で求めた。すると、あわれなクリスチャンがそのふもとにいる山から、ことばと火が出てきた。クリスチャンは全身の毛が立つのを感じた。次のようなことばが聞こえた。

『律法の行いによる者は、皆のろいの下にある。「律法の書に書いてあるいっさいのことを守らず、これを行わない者は、皆のろわれる」と書いてあるからである』（ガラテヤ三・一〇）

クリスチャンはもはや死を待つほかないと思い、悲しみ嘆き始めた。世の賢者と出会った時を呪いさえした。彼の助言に聞き従ったことは愚か者千人分に匹敵すると思った。また、肉から出たにすぎない世の賢者の理屈に、正しい道を捨てるほどまでに動かされてしまったと思うと、非常に恥ずかしかった。それから、彼は再び伝道者に向かって、次のように語りかけた。

クリスチャン「先生、どう思われますか。希望はあるのでしょうか。立ち返って、狭い門に向かってもよろしいのでしょうか。このことのために見捨てられ、門から恥をかいて追い返されるのではないでしょうか。私は世の賢者に聞き従ったことを悔いています。私の罪はゆるされるでしょうか」

伝道者「あなたの罪は確かに大きい。二つの悪を犯したからです。あなたは、良い道を捨て、さらに禁じられた道に足を踏み入れました。しかし、門の守衛はあなたを受け入れてくれるでしょう。彼は人々に善意を持っておられるからです。ただ、二度と道を外さないように気をつけなさい。『さもないと、主は怒って、あなたを道で滅ぼされるであろう。その憤りがすみやかに燃えるからである』（詩篇二・一二）」

（四）狭い門

クリスチャンはもとの道に戻ることにした。伝道者は彼に口づけをしてほほえみ、祝福を祈った。それからクリスチャンは先を急いだ。道中、誰にも話しかけず、また誰かに話しかけられても答えなかった。まるで禁じられた地にずっと足を踏み入れている者のようで、〈世の賢者〉の助言に従うためにそれた道に再び戻るまでは、決して安心できなかった。そこからしばらく歩いて、クリスチャンは門に到着した。見上げると、こう書いてあった。

『門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう』（マタイ七・七）

入ろうとする者は、まず外に
立って門を叩かねばならない。叩く者なら
入れることを疑うには及ばない。
神は彼を愛し、その罪をゆるしてくださるのだから。

クリスチャンは門を叩いた。一度、二度、それからもう一度。

「ここに入れてもらえませんか。中におられる方は
あわれな私のために開けてくださるでしょうか。私はこれまで
入るのにふさわしくない反抗者でしたが。そうしていただけるなら
必ずやその方の永遠の賛美を高らかに歌います」

しばらくして、威厳のある人が門に来た。〈好意〉という名前だった。「どなたですか。どこからお越しになりましたか。何を求めて来られましたか」

クリスチャン「ここにいるのは、重荷を負ったあわれな罪人です。〈滅びの町〉から参りました。やがて来る御怒りから救われるため、シオンの山に向かっております。この門がそこに至る道であると聞いたものですから、私を通していただけるかどうか教えていただけませんか」

好意「そういうことでしたら喜んで」

好意は門を開けた。

クリスチャンが中に入ろうとすると、好意は彼をぐいと引き入れた。それで、クリスチャンは「どうしてそうするのですか」と尋ねた。

「この門から少し離れたところに、ベルゼバブの治める堅固な城があります。そこからベルゼバブとその手下どもが、この門に来る者を中に入る前になんとか殺そうとして、矢を射って来るのです」

クリスチャンは「嬉しくもあり、恐ろしくもあります」と言った。それから好意は「誰に教えられてここに」と尋ねた。

クリスチャン「伝道者に、ここに来て門を叩くように言われて、そのとおりにしました。あなたが私に何をすべきかを教えてくださるはずだ、とのことでした」

好意「目の前に扉が開いています。誰もそれを閉じることはできません」

クリスチャン「ようやく、危険を冒してきた分の報いを刈り入れるようになるのですね」

好意「しかし、どうしてひとりで来られたのですか」

クリスチャン「私は自分の身に迫る危険を理解しましたが、隣人たちは誰も自分の身の危険を理解しなかったからです」

好意「誰かあなたが来ることを知っていたのですか」

クリスチャン「はい、はじめに妻子が私を引き止めました。私の隣人のうち数人は、懸命に私を引き止めました。でも、私は耳を指でふさいで、自分の道を行きました」

好意「でも、あなたを戻そうと説得するために付いてくる人はいませんでしたか」

クリスチャン「〈強情〉と〈軟弱〉がいました。ですが、説き伏せることができないとわかると、強情はののしりながら帰ってしまいました。軟弱は私と一緒にしばらく行きました」

好意「でも、どうして軟弱はここまで来なかったのですか」

クリスチャン「私たちは〈失望の沼〉まで一緒に来ました。そこで二人とも突然、沼に落ちてしまいました。すると隣人の軟弱は、意気沮喪して、先に進めなくなりました。自分の家のある側に沼から這い出て、あの素晴らしい国へはあなたひとりで行くがいい、と私に言いました。それで彼はもとの道を帰り、私はこうして来ました。彼は強情のところに、私はこの門に来ました」

好意「ああ、あわれな人。天の栄光は彼にとって、少しの困難や危険を乗り越えてでも得ようとするに値しないほどのものだったのですね」

クリスチャン「そうです。軟弱に関してお話ししたことは事実です。ですが、私自身のことをお話しすると、彼と私は似たりよったりです。彼が自分の家に戻ったのは事実ですが、私も死の道に外れて行きました。世の賢者という人の肉の議論に説き伏せられて、そこに行きました」

好意「そうですか、彼と会ったのですか。彼はきっと、〈遵法〉に助けを求めて平穏を得なさいというふうに仕向けたのでしょうね！　あの二人はまったくひどい詐欺師です。それで、彼の助言を聞き入れたのですか」

クリスチャン「はい、思い切れるところまでは。遵法を探しに行ったのですが、彼の家のそばにある山が頭上に落ちてきそうに思えたので、そこで立ち止まらざるを得ませんでした」

好意「その山で大勢の人が死にました。これからも犠牲者は増えるでしょう。岩に打たれて死ぬ前に逃げられてよかった」

クリスチャン「私がそこで打ちひしがれて呆然としているときに、もしも伝道者が幸いにももう一度私のところに来てくださらなかったら、私はどうなっていたかわかりません。しかし、神の恵みですね、伝道者が私に会いに来てくださいました。そうでなければ、私はここに来ていません。私はこうして来ましたが、このような者ですから、私の主とこうしてお話しするよりも、あの山で死んでいたほうがふさわしかったかもしれません。しかし、ああ、なんという恵みでしょうか。この入り口を通ることをゆるされるとは！」

好意「ここに来る以前にどんなことを行った人であっても、私たちは拒絶しません。決して追い出されることはありません（ヨハネ六・三七）。ですから、善良なクリスチャンさん、私と一緒に少し歩きましょうか。あなたが進むべき道について教えます。前を見てください。この狭い道が見えますか。これがあなたの進むべき道です。族長が、預言者が、キリストが、キリストの使徒たちが築いた道です。定規で引いたようにまっすぐです。これがあなたの進むべき道です」

クリスチャン「しかし、初めて来た人が道に迷うような曲がり角やうねり道はありませんか」

好意「この道に通じている道はたくさんあります。それらは曲がりくねっていて広いです。しかし、あなたは正しい道と間違った道を見分けることができます。正しい道は、まっすぐで狭いのです（マタイ七・一四）」

私が夢で見ていると、クリスチャンは彼にさらに尋ねた。「この背中の重荷を取るのを手伝ってもらえないでしょうか。自分では取れないものですから。誰かの助けなしには全く取れません」

好意「あなたの重荷に関しては、解放される場所にたどり着くまでは甘受しなさい。その場所に至れば、それはひとりでに落ちます」

こうして、クリスチャンは腰の帯を締め、旅を続けることにした。好意は、「門からしばらく進むと、解釈者の家に着きます。そこで扉を叩きなさい。彼が素晴らしいことを教えてくれます」と言った。それから、クリスチャンは友のところを発ち、好意は神の祝福を祈った。

（五）解釈者の家

クリスチャンが先に進むと、解釈者の家に着いた。何度も扉を叩くと、やっとひとりの人が来て、「どなたですか」と尋ねた。

クリスチャン「旅の者です。このお屋敷の方のお知り合いから、ここでためになるお話が聞けると伺ったものですから。ご主人はいらっしゃいますか」

その人は主人を呼びに入った。しばらくして主人が来て、「どんなご用件ですか」と尋ねた。

クリスチャン「先生、私は〈滅びの町〉から来て、シオンの山に向かっております。この道の発端にある門の守衛から、ここをお訪ねすれば、旅の益になる素晴らしいことを教えていただけると伺いました」

解釈者「お入りなさい。ためになるものをお見せしましょう」

彼は従者にろうそくをともさせ、クリスチャンに後を付いてくるように言った。案内されたのはひっそりと奥まった部屋だった。従者に扉を開けさせると、威厳に満ちた男性の絵が壁にかけてあった。その様子はこうだった。目は天を見上げ、手には最高の本を持ち、真理の律法がくちびるに記され、世界が彼の背後に投げ捨てられていた。人々に懇願するかのように立ち、頭上には金の冠がかかっていた。

クリスチャン「これはどういう意味ですか」

解釈者「この絵に描かれた方は、千人に一人の者です。子をもうけ（第一コリント四・一五）、子らのために産みの苦しみをし（ガラテヤ四・一九）、生まれた子らをみずから手塩にかけて育てることができます。ご覧のとおり、目は天を見上げ、手には最高の本を持ち、真理の律法がくちびるに記されています。その意味は、隠された事柄を知り、それを罪人に解き明かすのが彼の働きであるということです。人々に懇願するかのように立っているのも、ご覧のとおりです。世界が彼の背後に投げ捨てられ、冠が頭上にかかっています。その意味は、主に仕えることを愛するがゆえに、彼は現在のものを軽んじさげすみ、やがて来る次の世で報いとして栄光を受けることを確信しているということです。この絵をはじめにご覧になっていただいたのはなぜかと申しますと、目的の地を支配しておられる主が、あなたが道中で出会うかもしれないあらゆる難所で案内者となるようにと権威をお与えになったのは、この方ただひとりだからです。ですから、お見せしたものによく注意し、ご覧になったことをしっかり心に留めておきなさい。旅の途中で、正しく導くふりをしながら、死に下っていく道へ誘う者たちに出会うかもしれませんから」

次に、解釈者はクリスチャンの手を取って、広々とした応接間に案内した。そこは掃除されておらず、ほこりが積もっていた。クリスチャンがしばらく見回していると、解釈者は従者を呼んでそこを掃かせた。ところが、掃き始めるとほこりがひどく舞ったので、クリスチャンは息が詰まりそうになった。解釈者は横にいた乙女に、水を持ってきて部屋にまくように命じた。水をまくと、部屋はきれいになり、すがすがしくなった。

クリスチャン「これはどういう意味ですか」

解釈者「この部屋は、これまで一度も福音の豊かな恵みによってきよめられたことのない人の心です。ほこりは、その人全体を汚している原罪と内なる腐敗です。初めに掃き始めた者は律法で、水を持ってきてまいた乙女は福音です。ご覧になったとおり、掃き始めるとほこりが部屋中に舞うので、その者には部屋をきよめることができず、むしろあなたは息が詰まりそうになりました。その意味は、律法はその働きによって心を罪からきよめるどころか、罪を明るみに出して禁じながらも、魂のうちで罪を生き返らせ（ローマ七・九）、罪に力を与え（第一コリント一五・五六）、罪を増し加える（ローマ五・二〇）ということです。律法には罪を抑える力を与えることができないからです。また、乙女が部屋に水をまくと部屋がきよらかになりましたが、その意味は、福音が豊かで尊い感化をもって心に来ると、乙女が床に水をまいてほこりを鎮めたように、罪は征服され

抑えられ、福音を信じる信仰によって魂がきよめられるということです。そうして、栄光の王が住まうにふさわしい部屋になるのです（ヨハネ一五・三、エペソ五・二六、使徒一五・九、ローマ一六・二五～二六、ヨハネ一五・一三）」

また私が夢で見ていると、解釈者がクリスチャンの手を取って、小部屋に連れて行った。そこには小さな子供が二人、椅子に座っていた。年上のほうは〈激情〉という名前で、年下のほうは〈忍耐〉という名前だった。激情はひどく不機嫌そうで、忍耐は静かにしていた。

クリスチャン「どうして激情は不機嫌なのですか」

解釈者「二人の主人が、最も良いものは来年の初めまで待つようにと言い付けましたが、彼は今すぐすべてのものを欲しています。けれども、忍耐は喜んで待っています」

すると、人が激情のところに宝の入った袋を持って来て、足元にあけた。激情はそれを取り上げて得意満面になり、忍耐を馬鹿にして笑った。けれども、激情はあっというまに財産を使い果たし、あとにはくずだけが残った。

クリスチャン「このことをもっと詳しく教えてください」

解釈者「この二人の子供はたとえです。激情はこの世の人を、忍耐はやがて来る世の人を表しています。ご覧のとおり、激情は今すぐすべてのものを欲しています。今年のうちに、つまりこの世にあるうちにです。この世の人も同じです。この世の人は今の世で良いものを受けなければ気が済みません。次の年まで、すなわち次の世まで、良いものの分け前を待っていられません。この世の人にとっては、やがて来る世の良いものについての神の証言のすべてよりも、『捕まえた一羽の鳥は藪の中にいる二羽にまさる』という格言のほうが権威があるのです。激情はあっというまに財産を使い果たし、後にはくずしか残っていませんが、この世の人も、世の終わりにはそのようになります」

クリスチャン「忍耐が深い知恵を持っていることがわかりました。

一、忍耐は最も良いものを待っている

二、激情にはくずしか残らないが、忍耐は栄光を受けるようになる

こういった点で知恵がありますね」

解釈者「もうひとつ付け加えると、次の世の栄光は決して衰えませんが、この世のものは突然消えてしまいます。だから、激情が最初に良いものを受けたからといって忍耐を笑う理由よりも、忍耐が最後に最も良いものを受けて激情を笑う理由のほうがずっと大きいのです。最後のものにもやがて来る時があるので、最初のものは最後のものに席を譲らなければなりませんが、最後のものは何にも席を譲りません。もうその後を継ぐものはありませんから。ですから、最初に分け前をもらった者はそれを時間とともに消費せざるを得ませんが、最後に分け前をもらう者は永遠にそれを保ちます。金持ちについてこう言われているとおりです。『あなたは生前よいものを受け、ラザロの方は悪いものを受けた。しかし今ここでは、彼は慰められ、あなたは苦しみもだえている』（ルカ一六・二五）」

クリスチャン「そうですか。現在のものを欲しがるのではなく、やがて来るものを待ち望むべきだということがわかりました」

解釈者「おっしゃるとおりです。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくからです（第二コリント四・一八）。けれどもそうであっても、現在のものと私たちの肉の欲はなじみ深い隣人同士ですし、また、やがて来るものと肉の感覚は見ず知らずの他人同士です。それゆえ、現在のものと肉の欲は非常に結びつきやすく、やがて来るものと肉の感覚はなじみません」

また、私が夢の中で見ていると、解釈者はクリスチャンの手を取って、壁際で火が燃えている場所に連れて行った。ひとりの人がその近くに立っていて、消火するために水を何度もかけていたが、火はますます強く燃え盛るばかりだった。

クリスチャン「これはどういう意味ですか」

解釈者「この火は、心の中に働く恵みのわざです。火を消そうとして水をかける者は、悪魔です。ところが、ご覧のとおり、火はますます強く燃えます。どうしてこうなるのかご覧に入れましょう」

そう言って、彼はクリスチャンに壁の裏側を見せた。そこには油の瓶を持った男がいた。彼が途絶えることなく、密やかに、油を注いでいたのである。

クリスチャン「これはどういうことですか」

解釈者「これはキリストです。キリストが、心の中に始まったみわざを維持するために、途絶えることなく恵みの油を注いでくださいます。それによって、悪

魔がいかなる邪魔をしたとしても、キリストの民の魂は恵みを保ちます（第二コリント一二・九）。そして、壁の裏側に立っていた男が火を維持していたのをご覧になりましたね。このことが教えてくれるのは、試みにあっている者にとって、恵みのわざが魂の中でどのように維持されているのかは理解しがたいということです」

解釈者はまた彼の手を取って、見るも美しい荘厳な宮殿が建っている、うるわしい場所に連れて行った。クリスチャンはそれを見て非常に喜んだ。宮殿の上のほうには、黄金の衣をまとった人たちが歩いているのが見えた。

クリスチャン「中に入ってもよろしいですか」

解釈者は彼を宮殿の入り口に連れて行った。扉の前には大勢の人が詰めかけていて、中に入りたそうにしていたが、入る勇気がなかった。少し離れたところに椅子とテーブルがあり、そこに座っている人がいた。テーブルには本とインクが置いてあり、宮殿に入る人の名前を書き留めるためのものだった。また、宮殿の入り口には鎧を着た門番がたくさんいて、中に押し入ろうとする者を攻撃しようと構えていた。

クリスチャンはそれを見て唖然としていた。しばらくすると、門に詰めかけていた人々は門番に恐れをなして退散しはじめた。ひとりの勇ましい顔つきの男がテーブルに座って書いている人に近づいて、「私の名前を書いてください」と言った。そして名前を書いてもらうと、彼は剣を抜いて、兜をかぶり、門番のところに走っていった。門番たちは殺さんばかりの勢いで彼に襲いかかった。ところが、その男は少しもひるまず、果敢に剣を振り回した。追い返そうとする門番たちと斬り合って、彼は多くの傷を負い、また負わせたが、ついに門番たちの間に道を切り開いて（使徒一四・二二）、宮殿に押し入った。すると、中から歓喜の声が聞こえてきた。宮殿の上のほうにいる人たちの声だった。

「お入りなさい。お入りなさい。
永遠の栄光をあなたは勝ち取る」

その男は中に入った。そして、上の人々と同じ黄金の衣を着せられた。クリスチャンはそれを見てほほえみ、「これがどういう意味なのか、私にもすっかりわかったと思います」と言った。

「では、もう行かせてください」とクリスチャンは言ったが、解釈者は引き止めた。「まだもう少し見せたいものがあります。そのあとで旅をお続けなさい」

彼はまたクリスチャンの手を取って、真っ暗な部屋に連れて行った。そこでは鉄格子の内側にひとりの男が座っていた。

見ると、男は陰鬱な顔をしていた。うつむいて地面を見つめ、手を組んで、胸が張り裂けんばかりにため息をついていた。クリスチャンは尋ねた。「これはどういう意味ですか」。解釈者はクリスチャンに、男と話してみるよう促した。

クリスチャンは男に尋ねた。「あなたはどなたでしょうか」

男「私は昔はこうではなかった」

クリスチャン「昔はどうだったのですか」

男「私は昔、精気あふれる信仰者だった（ルカ八・一三）。自分でもそう自負していたし、人からもそう認められていた。自分では天の都に行けるものと思い、そこにたどり着くことを思い浮かべては喜んでいた」

クリスチャン「では、今はどうなったのですか」

男「私は今、失意の人だ。この牢屋に閉じ込められているように、失意に閉じ込められている。ああ、まったく出られない！」

クリスチャン「でも、どうしてこんなふうになったのですか」

男「目を覚まして気をつけていることをやめてしまった。私は情欲の手綱をゆるめ、好き放題にさせた。私はみことばの光に対して、また神の善に対して罪を犯した。私は聖霊を悲しませたので、聖霊は去った。悪魔を誘ったので、悪魔が私のところに来た。神を怒らせたので、神は私を去った。私は心をかたくなにし、悔い改めることができなくなったのだ」

それで、クリスチャンは解釈者に言った。「ですが、このような人にはもう希望はないのでしょうか」。解釈者は「本人に尋ねてみなさい」と答えた。

クリスチャン「いいえ、先生、どうかあなたが尋ねてください」

解釈者「もう希望はないのですか。失意の牢獄から出られないのですか」

男「ああ、もう希望は残っていない」

解釈者「でも、ほむべき方の御子はとてもあわれみ深い方ですのに」

男「私は御子を、もう一度、自ら十字架につけたのだ（ヘブル六・六）。御子を軽んじた（ルカ一九・一四）。御子の義を軽んじた。御子の血を汚れたものとみなした。恵みの御霊を侮った（ヘブル一〇・二八～二九）。だから、私は自分をすべての約束から閉め出した。今、私に残されているものはおどしだけだ。恐ろしい、身の毛のよだつおどしだ。必ず来る裁きと燃える御怒りが、逆らう者として私を焼き尽くすというおどしだけなのだ」

解釈者「どうしてそんなふうになったのですか」

男「この世の情欲、享楽、利益だ。そういうものにどっぷりとつかって、大いに楽しめるだろうと思った。だが今や、それらのものがひとつ残らず、燃える虫のように私をかみ、かじり食っている」

解釈者「でも、今からでも悔い改めて立ち返ることはできないのですか」

男「神が私から悔い改めを取り上げたのだ。神のことばはもう私を信仰へと励まさない。そうだ、神ご自身が私を牢獄に閉じ込めた。世界中のどんな人間でも私を外に出せない。ああ、永遠よ！　永遠よ！　永遠に味わわなければならないこの不幸に、私はどうして立ち向かえようか」

解釈者「この男の不幸をとこしえの戒めとして覚えてください」

クリスチャン「なんとおそろしい！　私が目を覚まして気をつけていられるように、神が助けてくださいますように。また、この男の不幸の原因を避けられるよう祈れますように。先生、そろそろ私は旅を続けるべき時ではないでしょうか」

解釈者「もうひとつだけお見せしますから、それまでお待ちください。その後でお行きなさい」

彼はまたクリスチャンの手を取って、ある部屋に案内した。そこでは、ひとりの人が寝床から起き上がるところだった。彼は服を着ながら、ガタガタと震えていた。クリスチャンは「どうしてこの人は震えているのですか」と尋ねた。解釈者は彼に理由を説明するよう促した。

彼は話し始めた。「昨夜、眠っている間に夢を見ました。天が真っ暗になり、世にも恐ろしいさまで雷鳴がとどろき、稲妻が走りました。それで私はおびえました。夢の中で見上げると、雲がものすごい速さで流れていました。そこからラッパの音がけたたましく鳴り響くのが聞こえました。また雲の上にひとりの人が座っていて、天の軍勢を従えているのが見えました。軍勢は燃えさかる火に覆われ、天もまた火に覆われていました。そのとき、声が聞こえました。

『死人たちよ、起きて裁きを受けに来なさい』

すると、岩が裂け、墓が開き、死人がそこから出てきました。ある者は歓喜して天を見上げ、ある者は山の下に隠れようとしていました（第一コリント一五・五二、第一テサロニケ四・一六、ユダ一・一四、ヨハネ五・二八～二九、第二テサロニケ一・七～八、黙示録二〇・一一～一四、イザヤ二六・二一、ミカ七・一六～一七、詩篇五〇・一～三、ダニエル七・一〇）。それから、雲の上に座っておられる方が本を開き、世界よ近づきなさいと命じるのを見ました。ところが、彼の前から吹き出る激しい炎のゆえに、彼と世界との間には、法廷での裁判官と囚人のように一定の距離が保たれていました（マラキ三・二～三、ダニエル七・九～一〇）。また、雲の上の方に従っている軍勢に、こう命じるのが聞こえました。

『毒麦、殻、刈り株を集めて、火の池に投げ込め』（マタイ三・一二、一三・三〇、マラキ四・一）

すると、私の立っているところのすぐ近くに、底知れぬ穴が口を開きました。そこからすさまじい音でおびただしい量の煙と炭火が吹き出てきました。また、同じ軍勢にこう言われました。

『私の麦を倉に納めよ』（ルカ三・一七）

すると、大勢の者が雲の中に引き上げられていくのが見えましたが、私は取り残されました（第一テサロニケ四・一六～一七）。私もどこかに隠れようとしましたが、できませんでした。雲の上の方が私をじっと見つめておられたからです。心の中に私の罪もあふれてきて、良心が自分を責め立てました（ローマ二・一四～一五）。そこで眠りから覚めました」

クリスチャン「けれども、その夢を見て、どうしてそんなに恐れているのですか」

男「それはもう、裁きの日が来たのに私はその備えができていないと思ったからです。最も恐ろしかったのは、御使いが多くの者を引き上げたのに、私だけ取

り残されたことです。また、地獄の穴が私のすぐ近くに口を開いたことも。良心も私を責め立てました。それに、裁き主がいつも私に目を注ぎ、御顔に憤りを表しておられるように思えたのです」

そのとき、解釈者がクリスチャンに言った。「これらすべてのことについてよく考えましたか」

クリスチャン「はい、すべてが希望と恐れとなって私の中にあります」

解釈者「さあ、すべてのことを心の中にとどめておきなさい。それらが脇腹を突く突き棒のように、あなたが行くべき道へとあなたを駆り立てるように」

クリスチャンは腰に帯を締め、旅に出ることにした。解釈者は祈った。「善良なクリスチャンよ、慰め主がいつもあなたと共におられ、都に至る道で導いてくださいますように」

それでクリスチャンは、こう言って旅路を出発した。

「ここで貴重なためになるものを見た。
喜ばしいもの、恐ろしいもの、私を堅く立たせるもの、
私が歩み始めたこの道に。
それらを思い巡らし、悟ろう。
なぜそれらを私に見せてくれたのかを。
感謝しよう。ああ、良き解釈者、あなたに」

（六）十字架と墓

私が夢の中で見ていると、クリスチャンは両側に壁のある道に入った。壁の名前は〈救い〉といった（イザヤ二六・一）。クリスチャンはこの道を走ったが、背中の重荷のせいではなはだしく困難を覚えた。走っていくと小高い丘に到着した。そこには十字架が突き立てられ、その下のほう、丘のふもとには墓があった。それで、私が夢の中で見ていると、クリスチャンが十字架に近づいた。ちょうどその時、重荷が肩からするりと落ちた。重荷は墓の入り口まで転がっていき、墓の中に落ちた。もうそれ以上は見えなかった。

クリスチャンは心躍り、喜びで顔が明るくなった。

「彼がその悲しみによって私に休息をくださり、その死によっていのちをくださったのだ」

しばらくそのまま立っていたが、十字架を見上げて驚いていた。十字架を見上げることで重荷がこのように取り除かれたことが、あまりにも不思議だったからである。彼は十字架を何度も見た。そのうちに涙が滝のように溢れて頬を伝った（ゼカリヤ一二・一〇）。彼が十字架を見上げながら泣いていると、三人の輝く者が現れた。三人は彼にあいさつした。

「平安があなたにあるように」

一番目の人が言った。「あなたの罪はゆるされた」（マルコ二・五）。二番目の人は、彼のぼろ着を脱がせて、立派な外套を着せた（ゼカリヤ三・四）。三番目の人は彼のひたいに印をつけた（エペソ一・一三）。そして、彼に封印された巻物を手渡した。走りながらこれを見るように、そして天の門に着いたらこれを渡すように、と彼に言いつけた。こうして三人は去った。クリスチャンは喜びのあまり三度跳び上がり、それから歌いながら進んだ。

これは誰だ。あの巡礼者だ。なんと！　まことに
古いものは過ぎ去り、すべてが新しくなった。
不思議だ！　まるで別人ではないか
りっぱな羽根がりっぱな鳥をつくるのだ。

「ここまで私は自分の罪を背負ってきた。
どんなものも私の嘆きを取り去ってくれなかった。
ここにたどり着くまでは。ここはなんという場所なのだろう！
ここが間違いなく私の至福の始まりなのでしょうか。
ここで間違いなく重荷が背中から落ちたのでしょうか。
ここで間違いなく重荷を私に縛りつけていた縄が切れたのでしょうか。
さいわいな十字架よ！　さいわいな墓よ！　いや、むしろさいわいあれ、
そこで私のために辱めを受けてくださった方に！」

（七）浅薄、怠惰、厚顔と、形式主義、偽善

私が夢の中で見ていると、クリスチャンは旅を続け、坂を下りきったところに出た。そこで道の外れに、三人の男が足かせにつながれたまま眠っていた。それぞれの名前は〈浅薄〉、〈怠惰〉、〈厚顔〉といった。

クリスチャンはこの三人が寝転がっているのを見て、彼らに近づき、起こそうとして大声で言った。「あなたがたは帆柱の上に寝ている人のようです（箴言二三・三四）。死海があなたがたの下にあります。底知れぬ深淵です。ですから、起きてここを離れなさい。そうするおつもりなら、その足かせを外すのを手伝います」また彼は言った。「ほえたける獅子のように行き巡っている者（第一ペテロ五・八）が近づいたら、あなたがたはきっと牙をかけられて餌にされます」すると彼らはクリスチャンを見つめて、こう返事をした。

浅薄「今のところどこにも危険を見かけませんよ」

怠惰「もう少し眠ろう」

厚顔「桶はどれも自分の底で立つものさ。ほかにどう答えろというんだ」

こうして彼らは再び眠りについた。クリスチャンは旅を続けた。

しかし、クリスチャンは悩んだ。せっかく男たちを起こしてあげて、危ないから離れたほうがいいと教え、足かせを外してあげようと進んで申し出たのに、その優しさを軽くあしらわれたと思った。クリスチャンがそのことで考えあぐねていると、壁の向こうから二人の男が乗りこえて、せまい道の左側に着地するのが見えた。二人は足早にクリスチャンのほうへ近づいてきた。ひとりは〈形式主義〉といい、もうひとりは〈偽善〉といった。二人がクリスチャンのところまで来ると、クリスチャンは彼らと話し始めた。

クリスチャン「お二人とも、どちらから来られたのですか。またどこへ行かれるのですか」

形式主義と偽善「我々は〈虚栄の国〉で生まれました。そして、栄誉を得るためにシオンの山に向かっているところです」

クリスチャン「どうしてお二人は道の始めにある門から来なかったのですか。こう書かれているのをご存知ありませんか。『門からでなく、ほかの所からのりこえて来る者は、盗人であり、強盗である』（ヨハネ一〇・一）」

形式主義と偽善「入口の門まで行くのは遠回りすぎると、我々の国の者は皆考えています。ですから、いつもこうやって壁をよじ登って近道するのです」

クリスチャン「ですが、それでは私たちが目指す都におられる主に対して罪を犯し、主の啓示されたみこころを冒涜することになりませんか」

形式主義と偽善「どうぞご心配なく。我々の国では皆がしてきたことですから。必要とあらば、千年以上もこの伝統が続いてきたことを証言する証拠も出せます」

クリスチャン「それでも、あなたがたのそのやり方は、神の法廷で裁きを受けるときに耐えられるでしょうか」

形式主義と偽善「この伝統は千年以上も前から受け継がれてきた確固たるものです。ですから公平な裁判官なら、きっと合法と認めるはずです。それにひとたび道に入ったら、どこから入ったかなど問題になるでしょうか。道に入ったなら、もう入ったのです。あなたは確かに門を通ってこの道にいます。我々も壁を乗り越えてですがこの道にいます。あなたのほうが我々よりどこが優っているというのでしょうか」

クリスチャン「私は主のおきてによって歩いています。あなたがたは気まぐれな空想のままに歩いています。この道を支配する主が、もうあなたがたを盗人と見なしておられます。ですから、道の終着点であなたがたは真実な者と認められないと思います。あなたがたは主のおことば抜きで自分自身を頼みにしてここに入ったのですから、主の恵み抜きで自分自身で出て行くことになります」

二人は言葉に詰まり、余計なお世話だ、と言い捨てた。それから、二人とクリスチャンはほとんど話さずに同じ道を歩いた。おもむろに二人は言った。「戒め

とおきてに従うことに関しては、我々はあなたと同じくらい良心に忠実ですよ。だから、あなたと何の違いもありません。唯一の違いはあなたの着ている外套だけです。それは裸の恥を隠すために誰か隣人からもらったものでしょう」

クリスチャン「あなたがたは門から入らなかったのですから、戒めとおきてによっては救われません（ガラテヤ二・一六）。私の着ている外套ですが、これは私が向かっている所の主からいただいたものです。おっしゃるとおり、裸の恥をおおうためです。これは私への主の好意のしるしです。以前の私はぼろ布しか持っていなかったものですから。それと、旅の道中でこれが私を慰めてくれます。都の門に到着したとき、この外套を着ているために、そこにおられる主がきっと私を歓迎してくださると思います。この外套は、主が私のぼろ布を脱がせてくださった日に、気前よく私にくださったものですから。また、お気づきでないかもしれませんが、私のひたいには印が付けられています。これは、私の肩から重荷が落ちた日に、主に最も近しい方のひとりが付けてくださったものです。そのときにもうひとつ、封をされた巻物をいただきました。道中これを読んで慰めを得るようにと、また天の門でこれを通行証として手渡すようにと言われました。あなたがたにはこれらのものがどれも欠けているのではないでしょうか。入口の門から入らなかったからです」

二人は答えず、お互いに顔を見合わせて笑うだけだった。それから私が見ていると、彼らは道を続けたが、クリスチャンはもう二人と話さずに、ため息をついたり心躍らせたりしながらひとり前に進んだ。また、輝く者のひとりから受け取った巻物を読んでは慰めを得た。

（八）三つの道・困難、危険、破滅

それから私が見ていると、彼らは道を歩き続けて、〈困難〉という山のふもとに出た。そこには泉があった。また、門から続くまっすぐな道の他に、山のふもとで二つの道が枝分かれしていた。ひとつは山を左に迂回し、もうひとつは右に迂回していた。けれども、真ん中の狭い道は、まっすぐに山の上へと伸びていた。山腹を登るこの道の名前も困難といった。クリスチャンは泉に近づき（イザヤ四九・一〇）、水を飲んで力を得た。それから、こう言いながら山を登り始めた。

「この山は高いけれど私は登りたい。
困難が打ち寄せても私は倒れない。
この道にいのちがあると知っているから。
心よ、勇敢であれ。おそれるな、ひるむな。
困難でも正しい道を行くのがよい。
簡単でも間違った道の行く先は苦しみだから」

〈偽善〉と〈形式主義〉も山のふもとに到着した。しかし、山を見上げると険しくそびえ立っていた。また、山を迂回する道が左右に伸びていた。二つの道も山の反対側でクリスチャンが行った道と合流するだろうと思った。二人は迂回路を通ることにした。道の名前は、一つは〈危険〉といい、もうひとつは〈破滅〉といった。ひとりは危険という道に進み、うっそうと茂る大きな森に入っていった。もうひとりは破滅という道に進み、広々とした場所に出たが、暗い山々がそこかしこにあった。彼はつまずいて倒れ、もう二度と起き上がらなかった。

間違って始めた者が、正しく終われるだろうか。
そんな者たちが安全を友にできるだろうか。
いや、できない。彼らは向こう見ずに歩み出した
最後には、まっさかさまに倒れるに違いない。

それから私は、クリスチャンが山を登っていくのを見ていた。最初走っていたが、山が険しくなると歩くようになり、さらに険しくなると手とひざを使ってよじのぼった。山の中腹に着くと、ありがたいことに休憩所があった。疲れた旅人を休ませるために主が用意してくださったものだった。クリスチャンはそこに入り、座って休憩した。ふところから巻物を取り出し、読んで慰めを得た。また、十字架の近くで受け取った立派な外套をまじまじと見つめて、心に力を得た。こうして喜びに浸っていたが、そのうちにうとうとし始め、つい眠ってしまった。時間が経ち、日暮れ近くになった。眠っているうちに巻物は手からすべり落ちていた。すると、誰かが眠っている彼のところに来て、ゆすり起こした。

『なまけ者よ、ありのところへ行き、そのすることを見て、知恵を得よ』（箴言六・六）

クリスチャンは飛び起き、急いで出発した。山の頂上までもう速度を落とさなかった。

（九）臆病と不信

さて、クリスチャンが山の頂上に着くと、順路の向こうから二人の男が道を逆走して、彼のほうへ駆け上がってきた。ひとりは〈臆病〉といい、もうひとりは〈不信〉といった。クリスチャンは二人に話しかけた。「どうなさったのですか。逆走しているようですが」。

臆病「私たちはシオンの都に行こうとして、あの困難な道を登りました。ところが、この先に進むとさらなる危険が待っていました。そこで私たちは引き返して、元の道を戻っているところです」

不信「そうなんです。すぐ先の道に二頭の獅子がいるのです。眠っているのか起きているのかわかりませんが、近づけばすぐさま食いちぎられるに違いありません」

クリスチャン「恐ろしいですね。でも、だからといって、どこに行けば安全なのでしょうか。私が自分の国に帰っても、火と硫黄が待っているので、きっと滅ぼされます。天の都に行けるなら、そこが安全に違いありません。危険を冒してでも行くしかありません。後ろに戻れば確実に死にます。前方には死の恐れがありますが、それにまさる永遠のいのちがあります。だから私は先に進むつもりです」

不信と臆病は山を駆け下りたが、クリスチャンは道を続けた。だが、二人から聞いた話を思い出すと、巻物を取ろうとしてふところに手を入れた。またあの巻物を読めば力を得られるはずだ。ところが、巻物は見つからなかった。彼はすっかりうろたえた。どうすればよいのか。いつも平安を与えてくれた巻物、天の都で通行証になるはずの巻物を失ってしまったのだ。だが、彼はどうすればよいかわからず、途方に暮れた。

ふと、山の中腹にあった休憩所で眠ってしまったことを思い出した。そこで落としたに違いない。クリスチャンはひざまずいて、自分の愚かな行為について神にゆるしを願った。すぐに巻物を探しに戻った。けれども、道を戻りながらクリスチャンの心がどんなに悲しみで痛んだか、誰にも想像できまい。彼はため息をついて泣いた。何度も自分を責めた。疲れを少し癒やすためだけに建てられたあの場所で眠りこけてしまうとはなんて馬鹿なことをしたんだろう。こうして戻りながら、道のすみずみまで目をこらした。旅路で何度も慰めを与えてくれたあの巻物がもしかしたら見つかるかもしれないと思って。彼が眠りこけた小屋が遠くに見えてきたが、眠りこけた罪がますます思い出されて、いっそう強く胸が痛んだ（黙示録二・五、第一テサロニケ五・七～八）。自分の罪を嘆きながらこう言った。

「ああ、私はなんというみじめな人間なのだろう、日中に寝てしまうとは！　困難のさなかに寝てしまうとは！　主が旅人の魂を休息させるために建てられた小屋で肉の安楽をむさぼるとは！　どれほど無駄足を踏んだことか！　これはイスラエルにも起きたことなのだ。彼らは罪のために、紅海の道へと送り返された。眠りこけた罪さえ犯さなければ私は喜びをもって行ったはずなのに、悲しみながら歩かなくてはならない。今ごろはどんなに先まで進めていたことだろうか！　一度だけ歩くはずだった道を三度も通らなければならないのだ。そればかりか、もう日もほとんど暮れたので、闇に包まれてしまいそうだ。ああ、眠りこけさえしなければ！」

（十）美しの家

やっと休憩小屋に着くと、クリスチャンはその場にへたりこんで泣いた。すこし経ってから、悲しげに椅子の下に目線をやった。すると願ったとおり、そこに巻物があった。彼はふるえながら急いで巻物を拾い、ふところにしまった。巻物が見つかってどんなに喜んだことか。この巻物はいのちの保証であり、望みの天における通行証なのだ。巻物のある場所に目を向けさせてくださった神に感謝した。喜びの涙にむせびながら旅を再開した。足取り軽く山を駆け上がった。ところが、登りきらないうちに日が沈んでしまった。改めて時間を無駄にしたことが思い知らされるのだった。それでまた彼は嘆き始めた。ああ、罪深い眠りよ！お前のせいで、旅の途中で日が暮れてしまいそうだ！　太陽なしで歩かなくては。自分の罪のせいで、闇が足元を覆い、動物の物悲しい鳴き声を聞かなくてはならないのだ（第一テサロニケ五・六〜七）。〈臆病〉と〈不信〉が獅子を見ておびえたという話も思い出された。クリスチャンはひとりつぶやいた。「獅子どもが餌を探して歩き回るのは夜だ。暗闇の中で見つかったらどうやって逃れよう。ばらばらに食い殺されずに逃げられるだろうか」。不幸な過ちを嘆きながら歩いていたが、ふと目を上げると、前方に立派な邸宅が見えた。道沿いに建っているその邸宅の名前は〈美し〉といった。

私が夢の中で見ていると、クリスチャンはそこに急いだ。宿を借りられるかもしれない。しばらく進むと狭い道に入った。あと二百メートルほど歩けば守衛の詰所に着く。ところが、狭い道の途中で二頭の獅子に出くわした。不信と臆病が引き返した危険な場所というのはここのことだな、と彼は思った。（獅子はじつは鎖に繋がれていたが、暗くて見えなかった。）足が震え、自分も引き返そうかと考えた。目の前にあるのはまさしく死だ。ところが、ちょうど詰所の守衛が彼に気づいた。守衛の名前は〈用心〉といった。用心はクリスチャンが引き返そうと立ち往生しているのに気づいて、大声で呼びかけた。「あなたの力はそんなにも小さいのですか（マルコ八・三四〜三七）。獅子を恐れてはなりません。鎖に繋いであります。信仰のある者にはその信仰を試すため、信仰のない者にはそのことを明らかにするために、そこに置かれているのです。道の真ん中をお歩きなさい。危害を加えることはありません」

〈困難〉は後ろに、恐れは前にある。
山は登りきったが、獅子がほえている。
クリスチャンたる者に、長い安らぎはない。
ひとつの恐れが去れば、また別の恐れに襲われる。

クリスチャンはおびえつつも守衛の言うとおり真ん中を歩いた。獅子たちは恐ろしいうなり声をあげたが、危害は加えなかった。クリスチャンは手を叩きながら歩き、守衛のいる門の前に着いた。クリスチャンは守衛に言った。「このお屋敷は何でしょうか。一晩ここで泊めていただけませんか」。守衛は答えた。「この屋敷は、巡礼者の安全と休息のために主がお建てになったものです。あなたはどこから来て、どこに向かっておられるのですか」

クリスチャン「滅びの町から来ました。シオンの山に向かっております。日がもう沈んでいるので、よろしければ一晩泊めていただきたいのです」

守衛「お名前は何とおっしゃいますか」

クリスチャン「私の名前は今はクリスチャンです。が、最初は〈恵みなし〉という名前でした。私は、神がセムの天幕に住まわせてくださるというヤペテの子孫です（創世記九・二七）」

守衛「どうしてこんなに遅くなったのですか。もう日が暮れましたが」

クリスチャン「もっと早く着くはずでした。ところが、なんとみじめなことに、山の中腹にある休憩小屋で眠りこけてしまったのです！　いえ、それだけならまだこんなに遅くならなかったのですが、眠っているうちに大切な証書を落としてしまい、そのまま山頂に登りました。それから証書をなくしたことに気づ

き、悲しい思いで眠った場所まで戻らざるをえませんでした。そこで見つけて、やっといま着いたのです」

守衛「さようですか。それなら、屋敷にいる乙女のひとりをここに呼びましょう。お話しいただいて彼女が好意を持てば、他の家族の者にも会えることになっております。それがこの屋敷のおきてです」

用心という名の守衛がドアベルを鳴らすと、かしこまった雰囲気の美しい乙女が門に来た。名前は〈分別〉といった。彼女は「どうしたのですか」と尋ねた。

守衛は答えた。「この方は滅びの町からシオンの山へと旅しておられます。ところが、暗くなりましたし疲れもありますから、今晩ここに泊めてもらえないか、とおっしゃっています。それであなたをお呼びしました。お屋敷のおきてのとおりに、彼とお話をしていただき、あなたのお気持ちのとおりにしていただこう、と彼に申しました」

彼女は、どこから来てどこへ行こうとしているのか尋ねた。また、どうやってこの道に入ったのか、さらに道中で何を見て、何に出会ったか尋ねた。彼は一つひとつ答えた。最後に、彼女は彼の名前を聞いた。「私はクリスチャンと申します。今晩、ここに泊めていただきたいのです。ここは、主が巡礼者の休息と安全のために建ててくださったお屋敷だと伺ったものですから」。彼女は微笑んだが、目に涙を浮かべていた。少し間を置いて、彼女は言った。「家族の他の者を連れて参ります」。入り口へと走り、三人を呼んだ。〈思慮〉、〈敬虔〉、〈慈愛〉が来て、なおしばらく彼と話し、それから屋敷の中に通した。家族の多くが戸口で彼を迎えて言った。「主に祝福された方よ、お入りなさい。この家は、主が巡礼者の慰労のために建てられたものです」。クリスチャンはおじきをし、彼らの後ろを歩いて屋敷に入った。屋敷内で座ると、飲み物が与えられた。夕食が用意できるまで、家族たちがクリスチャンのお相手をし、歓談の時を持つことにした。思慮、敬虔、慈愛が彼を囲んだ。

敬虔「ようこそいらっしゃいました。今晩こうしてわが家にお迎えしたのですから、よろしければ、私たちの学びのためにも、巡礼の旅の道中で起きた出来事についてぜひお話を伺いたいです」

クリスチャン「歓迎してくださってありがとうございます。何でもお話しします」

敬虔「巡礼の旅に出たきっかけを教えていただけますか」

クリスチャン「生まれ故郷にいたときに、恐ろしい声を聞きました。そこにとどまるなら滅びがわが身を襲うことは避けられない、と。それで急いで国を出ました」

敬虔「ご自分の国からこの道へはどうやって来られたのですか」

クリスチャン「神のみこころによります。といいますのも、私が滅びの恐れの下にいたとき、どこに逃れればよいかわからず震えて泣いているところに、たまたまひとりの方が来て、〈狭い門〉に行きなさいと教えてくださいました。彼の名前は伝道者といいました。自分ひとりではとても道を見つけられませんでした。それで、その道をまっすぐに行ったらこのお屋敷に着いたのです」

敬虔「解釈者の家には立ち寄りませんでしたか」

クリスチャン「立ち寄りました。そこで見せていただいたものは、一生忘れられません。中でも三つのものをよく覚えています。サタンの攻撃のさなかでもキリストが心に恵みを注ぎ続けてくださっていること。罪を犯して、神のあわれみを望むことがまったくできなくなってしまった人のこと。それから、裁きの日が到来したという夢の話です」

敬虔「それで、その夢の話を聞けたのですか」

クリスチャン「はい、おぞましい光景だと思いました。その話を聞きながら胸が痛みましたが、聞けてよかったと思います」

敬虔「解釈者の家で見たものはそれが全部ですか」

クリスチャン「いえ、解釈者は立派な宮殿を見せてくださいました。そこにいる人たちは黄金の衣をまとっていました。ひとりの勇敢な男が来て、扉の前で行く手を阻む武装した者たちを切り開いて進みました。その男は、中に入るようにと招かれ、永遠の栄光を勝ち取りました。そうしたものに心を奪われました。一年でもあの善い方の家に滞在したかったのですが、先に進まなければなりませんでした」

敬虔「他に何を見ましたか」

クリスチャン「他に、ですか。そうですね、さらに行くと、私の心にはそう見えたのですが、木にかけられて血を流している方を見ました。そのとたんに、背中の重荷が落ちました。それまで重荷に押しつぶされそうでしたが、初めて重荷が落ちました。見たこともない光景で、不思議に感じました。目が釘付けになっていると、三人の輝く者が私のところに来られました。ひとりの方が、私の罪がゆるされたと宣言なさいました。もうひとりの方が、私のぼろ着を脱がせて、この立派な外套を着せてくださいました。三番目の方が私のひたいに、ほら、このような印をつけて、この封印された巻物をくださいました」（そう言って、クリスチャンはふところから巻物を取り出した。）

敬虔「まだ他にも見たものはありませんか」

クリスチャン「一番良い話はこれで全部です。が、他に見たものはあります。三人の男、〈浅薄〉、〈怠惰〉、〈厚顔〉が道の外れで眠っているのを見ました。鉄の足かせがつけられていました。とはいえ、私が三人を目覚めさせることができたとお考えになりますか。とうていできませんでした。また、〈形式主義〉と〈偽善〉が壁を乗り越えて道に入るのを見ました。二人はシオンに向かうと言っていました。けれども、彼らはすぐに消えてしまいました。警告はしたのですが、信じてもらえませんでした。でも何よりも、この山を登るのと、獅子の口の横を通るのがたいへん骨折りでした。門の親切な守衛さんがいなければ、どうしたらいいか本当にわかりませんでした。引き返していたかもしれません。ですが、ここに来られたことを神に感謝します。私を受け入れてくださったあなたがたにも感謝します」

次に、思慮がいくつかの質問をして、彼の話を引き出した。

思慮「故郷の国のことを時々は思い出さないのですか」

クリスチャン「ええ。ですが、思い出すと恥ずかしく、嫌悪感を覚えます。実際、もしその出てきた国のことを考えていたなら、帰る機会はあったでしょう。けれども、今はもっと良い、天にあるふるさとを望んでいます（ヘブル一一・一五〜一六）」

思慮「故郷にいた頃に慣れ親しんだものを、今もまだ引きずってはいませんか」

クリスチャン「はい。私の意志にまったく反してそうなることはあります。とりわけ内なる肉の思いです。私の同胞はそれにふけっていました。私自身もそうでした。けれども、今はそうしたものは私にとって悲しみです。もし自分で選べるものなら、もう二度と、あのようなことは考えないことを選ぶでしょう。それなのに、私は心で最善を行いたいと願っても、最悪が私にまとわりつくのです（ローマ七・一六〜一九）」

思慮「そのようなものを打ち負かしたと感じるときもあれば、逆に圧倒されるときもある、ということでしょうか」

クリスチャン「はい。打ち負かしたと感じることもたまにはあります。そういう時は、私にとって黄金の時間です」

思慮「何によってその厄介な思いを打ち負かしたと感じられたか、思い出せますか」

クリスチャン「はい、十字架で見たことを思うときがそうです。また、この立派な外套を見ているときも。胸にしまった巻物を読んでいるときも。それから目的の地について思い巡らせ胸が熱くなっているときも」

思慮「では、シオンの山に行きたいという願いをあなたの中に駆り立てるものは何ですか」

クリスチャン「そうですね、シオンの山で、十字架にかけられて亡くなっていた方が生きておられるのを見たいという希望が私にはあります。また、今日までのすべての苦悩を取り去っていただけるという希望があります。そこには死がないそうです（イザヤ二五・八、黙示録二一・四）。そこでは私が最もお慕いしている方々と共に住まうことができます。といいますのも、真実を申し上げますが、私の重荷から解き放ってくださった方を私は愛しているからです。私は内にある病にうみ疲れました。もはや死ぬことがなく、聖徒と共に叫び続けたいのです。聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、と」

続いて、慈愛がクリスチャンに問いかけた。「ご家族はいらっしゃいますか。ご結婚はされていますか」

クリスチャン「妻と四人の小さな子供がいます」

慈愛「どうしてご家族をお連れしていないのですか」

クリスチャンはさめざめと泣いた。「ああ、どんなに連れて行きたかったことでしょうか！　ひとり残らず巡礼の旅に猛反対したのです」

慈愛「けれども、家族とお話しして、あとに残ることの危険を伝える努力はすべきではありませんでしたか」

クリスチャン「もちろんしました。町が滅ぼされることを神が教えてくださったということも伝えました。けれども家族には私が戯れごとを言っているように思えたらしく、信じてくれませんでした（創世記一九・一四）」

慈愛「ご家族を説得しようとするときに、神が導いてくださるように祈りましたか」

クリスチャン「はい。心から祈りました。妻も子供も私にとっては本当に大切なのです」

慈愛「滅びに対するあなた自身の悲しみと恐怖は家族に伝えましたか。あなたにとって滅びは目に見えるほど明らかなことだったと思いますが」

クリスチャン「はい、何度も、何度も伝えました。私の恐怖が表情にも、涙にも、体の震えにも、表れていました。それを家族は見ました。私たちの頭上にあって今にも下されんとする裁きを思うと、本当に恐ろしかったのです。それでも、家族を連れてくることはできませんでした」

慈愛「それはどうしてなのでしょうか。ご家族は何かおっしゃっていましたか」

クリスチャン「妻はこの世を失うのが恐ろしかったのです。子供たちは若き日の愚かな楽しみにとらわれていました。それで私はひとりで旅に出るしかありませんでした」

慈愛「けれども、いくら言葉で説得しても、あなたご自身がむなしい生活をしていたとしたら、ご家族はついて行く気持ちにならなかったのではありませんか」

クリスチャン「確かに私は自分の生活を誇ることはできません。多くの失敗を犯していると自覚しています。また、人のためを思って議論や説得で教えを心に刻ませようと労しても、自分のふるまいひとつですべてが水の泡になってしまうものだということも知っています。それでも私は、家族につまずきを与えないために、ふさわしくない言動を慎むよう心を砕いてきました。まさにこのことのために、家族は私を几帳面にすぎると言いました。家族が何の悪も見いださないようなことまで、私が（家族のために）自分に禁じていると言うのです。いえ、こう申し上げてもよいと思います。もし家族が私の中に見たものが彼らの妨げとなったのなら、それは、神に対して罪を犯すことや隣人に悪を行うことを、私がひどく恐れていたことでしょう」

慈愛「じっさいに、カインは弟を憎みました。カインのわざが悪く、弟のわざは正しかったからです（第一ヨハネ三・一二）。もしご家族があなたの良い行いのゆえにあなたを非難したのなら、善に向き直れないことをみずから示したのです。その血の責任をあなたが問われることはありません（エゼキエル三・一九）」

私が夢の中で見ていると、夕食の用意がととのうまでこのように彼らは談話した。用意が済むと、彼らは席についた。テーブルには豪華な食事と上等なワインが並んでいた。そこでの話題は、すべて主に関するものだった。主が何をしてくださったか、何のためにしてくださったか、どうしてこの建物を建ててくださったかを話した。家族たちの話によると、主は偉大な戦士であり、死の力を持つ者と戦ってこれを滅ぼされたということだった（ヘブル二・一四～一五）。しかも、無傷でその戦いを終えたのではなかった。それを知って私は、主をますます慕わしく感じた。

クリスチャンは言った。家族の話のとおり、そして自分も信じているとおり、主はその戦いで多くの血を流されたのだ、と。主のすべてのみわざにさらに恵みの栄光を加えたのは、それがご自分の御国に対するきよい愛に基づいているという事実である。さらに、家族の中には、主が十字架上で死なれたのちに、主とお会いして話をした者もいるという。また、家族が誓って言ったところによると、主はあわれな巡礼者たちを深く愛しておられ、そのさまは西から東までどこにも見られないものである、と主ご自身の口から語られたという。家族らはまた、そう断言する根拠となる例を挙げた。主は貧しい者のためにこのことをなそうと、ご自分から栄光をお脱ぎになった。また、自分ひとりでシオンの山に住むつもりはない、と主が断言されるのを聞いたという。さらに、主は多くの巡礼者を王子

とされたという。彼らは生まれながらの物乞いで、あくたの中から出た者たちであった（第一サムエル二・八、詩篇一一三・七）。

彼らは夜更けまで語り合った。それから主の守りを祈り、休むことにした。巡礼者は二階の広い部屋に案内された。そこは日の出の向きに窓が開いていた。部屋の名前は〈平和〉といった。彼は夜明けまで眠った。朝になると、起き上がって歌った。

「どこに私はいるのだろう。これはイエスの愛顧ではないか。
巡礼者をかくも愛してくださる。
このように私はゆるされた。
いますでに天の扉の間近にいるのではないか！」

朝になって皆が起きた。家族たちは彼としばらく会話し、出発する前にこの場所の珍しいものを見てくださいと引き止めた。はじめに案内された場所は書斎だった。そこで貴重な古文書を見せてくれた。そこに書かれていたのは、私の記憶によると、主の系図だった。主は日の老いたる者の御子であり、永遠の昔から生まれた方であった。また、その書には主の行いが詳細に記録されていた。他にも、主が働きに招き入れた者の名前が数百人も書いてあった。主がその者たちを、年月によっても雨風によっても朽ちることのない家に住まわせたとも書いてあった。

それから、家族たちは彼に、主のしもべたちの行いの中で価値ある記録を読んであげた。彼らがいかにして国々を征服し、義を行い、約束のものを受け、獅子の口をふさぎ、火の勢いを消し、つるぎの刃をのがれ、弱いものは強くされ、戦いの勇者となり、他国の軍を退かせたか（ヘブル一一・三三〜三四）。それからまた、家族たちは別の記録を読んであげた。それによると、主はどんな人でも好意をもって受け入れてくださる。それこそ過去に主ご自身と主のなさることにひどい侮辱を加えた者でさえも受け入れてくださるというのだ。この屋敷には、他にもたくさんの有名な記録があった。クリスチャンはそのすべてを見た。古今東西の出来事、預言とやがて必ず起こる予見、それらのものは敵にとっては畏怖と驚異であり、巡礼者にとっては慰労と安堵である。

翌日、家族たちは彼を武器庫に案内した。そこで彼らが見せたのは、主が巡礼者のために用意したすべての装備だった。つるぎ、盾、かぶと、胸当て、すべての祈り、すり減らない靴。そういったものがずらりと並んでいて、主に仕える者が天の星ほどにいたとしても不足しないと思われた。家族たちはまた、主のしもべたちが素晴らしい業績を行ったときに使用した物を見せてくれた。モーセの杖。ヤエルがシセラを打った槌とくい。ギデオンがミデアン人の軍を敗走させたときのつぼと角笛とたいまつ。シャムガルが六百人を殺した牛の突き棒。サムソンが千人を殺したあご骨。ダビデがガテのゴリヤテを殺した石投げと石。主が立ち上がられる日に不法の者を殺すつるぎ。他にも多くの素晴らしいものを見せてくれた。クリスチャンは非常に喜んだ。それから、またしばらく休んだ。

私が夢の中で見ていると、翌朝、クリスチャンが起きて出発しようとすると、家族たちはもう一日だけ泊まってくださいと引き留めた。

「晴れたら、〈喜びの山々〉をお見せしたいのです。あれをご覧になれば、きっと励ましになります。あの山はこの場所よりも望みの天に近いですから」

それで、彼はもう一日留まることにした。朝になると、家族たちは彼を屋上に案内し、南の方を指さした。ずっと遠くに、世にも美しい山があった。あざやかな木々、ぶどう畑、さまざまな果樹、色とりどりの花々、泉と湧き水、それは見るも美しい風景だった（イザヤ三三・一六〜一七）。クリスチャンは山の名前を尋ねた。〈インマヌエルの地〉という名前だった。家族の話では、その地はこの丘と同じく、すべての巡礼者に開かれているということだった。

「あなたがそこに行かれたら、そこから天の都の門が見えるかもしれません。そこに住む羊飼いたちが見せてくれるでしょう」

さて、クリスチャンはそろそろ旅立とうと考え、家族たちも同意した。「その前に、もう一度武器庫にお寄りください」。武器庫に入ると、彼らは一式の装備品をクリスチャンに手渡した。道中で攻撃に見舞われても大丈夫なように、頭から足まで武具がひと揃い用意された。武具を身につけると、クリスチャンは家族たちと一緒に門まで歩いた。クリスチャンは守衛に、ここに巡礼者が通ったか尋ねた。守衛は「はい」と答えた。

クリスチャン「その方のことをご存知ですか」

守衛「お名前を尋ねると、〈忠実〉とおっしゃいました」

クリスチャン「ああ、その方なら存じております。同じ町の者で、近所におられました。私の生まれた町から来られた方です。今どのあたりにおられると思いますか」

守衛「今頃は、この丘のふもとに着いているでしょう」

クリスチャン「そうですか。守衛さん、主があなたと共におられますように。あなたが私に親切にしてくださったので、その報いにあらゆる祝福が豊かに増し加えられますように」

（十一）　へりくだりの谷とアポリュオン

それから、クリスチャンは先に進み始めた。〈分別〉、〈思慮〉、〈敬虔〉、〈慈愛〉の四人が丘のふもとまで同伴した。一行は丘を下りながら、前と同じように繰り返し話した。クリスチャンはこわごわと言った。「登るときも大変でしたが、こうして見ると、下りも危険ですね」。「そうです」と思慮。「今のあなたのように〈へりくだりの谷〉へ下りていくとき、途中で一度もすべらずにすむのは難しいことです」。一同は言った。「ですから、私たちはふもとまでご一緒しようと出てきたのです」。彼は用心しながら下ったが、それでも一度か二度は足をすべらせた。

私が夢の中で見ていると、一行は丘のふもとに着いた。この良き同伴者たちは、パンとワインと干しぶどうをクリスチャンに手渡した。ここでクリスチャンとお別れした。

だが、へりくだりの谷を歩いていると、あわれなクリスチャンは困難に出会った。少し進んだところで、道の向こうから汚れた悪鬼が来たのだ。名前はアポリュオン（破壊者）といった。クリスチャンはおびえた。引き返すか、その場で踏みとどまるか、思いめぐらした。だが、思い直した。彼の背面は武具を身につけていない。だから、背中を見せて引き返せば、奴の矢で打たれる隙を与えかねない。勇気をもって踏みとどまることに決め、足に力をこめた。たとえ自分のいのちを救うことしか考えないとしても、踏みとどまるのが最善だと、クリスチャンは考えた。

それで、先に進み、アポリュオンと対面した。見るも恐ろしい怪物だった。彼は魚のような鱗に覆われていた。それが彼の自慢だった。竜のような翼と、熊のような足。腹からは火と煙が上っていた。口は獅子の口のようであった。彼がクリスチャンに近づくと、見下すような目つきで問いを発した。

アポリュオン「お前はどこから来たのか。どこに向かっているのか」

クリスチャン「滅びの町から参りました。そこはあらゆる悪の掃き溜めでした。そして、シオンの町に向かっています」

アポリュオン「なるほど。ではお前は私の臣民だ。その国は私のものだからだ。私はその国の君主であり、神でもある。だが、どういうわけでお前は王から逃げ出したのか。お前がこれからもっと私に仕えるという望みがなければ、いまここで一撃のもとに地に打ち倒してやるところだ」

クリスチャン「私は確かにあなたの支配する国に生まれましたが、あなたの与える仕事は労苦ばかりで、その賃金はそれによって人が生きられるようなものではありませんでした。罪の支払う報酬は死だからです（ローマ六・二三）。ですから、私は大人になってから、思慮深い人がそうするように、善く生きるための道を探しました」

アポリュオン「臣民をこうも簡単に去らせる君主はおるまい。だから、お前を簡単に去らせるわけにはいかない。お前の仕事と賃金に不満があるのなら、安心して帰るがよい。わが国が与えうるものは何でもお前に与えると、ここで約束しよう」

クリスチャン「ですが、もう私は別の方、王の王たる方にお仕えしています。それなのにあなたと一緒に帰るのは、はたして正しいことでしょうか」

アポリュオン「お前のしたことは、『悪いことを変えたらますます悪くなった』ということわざどおりになる。だが、主のしもべを名乗る者にはよくあることだが、しばらくすると主のもとから逃げ出して、また私のところに戻ってくるのだ。お前もそうするがよい。すべてが丸く収まる」

クリスチャン「私はその方に信仰をささげ、忠誠を誓いました。その誓いを捨てるなら、私は裏切り者として処刑されても仕方ありません」

アポリュオン「お前は私に対しても同じことをしたのだ。だが、もし思い直して帰って来るなら、すべてを水に流そう」

クリスチャン「私があなたに約束したのは、まだ物心もつかない時でした。それに、私が今お仕えしている主君は、私をゆるしてくださいます。私がかつてあなたに従って犯した過ちを放免してくださいます。それに、ああ、破滅をもたらすアポリュオンよ、真実を申しますが、私は主の仕事、報酬、しもべたち、ご支配、同志、御国を、あなたのそれよりも愛しています。ですから、もうこれ以上説き伏せようとするのはやめてください。私は主のしもべです。主に従います」

アポリュオン「冷静になって、お前が行こうとしている道で何に出くわすことになるか、もう一度考えてみよ。お前は知っているはずだ。あの者のしもべたちの多くが無残な終わりを迎えていることを。彼らは私と私の道を裏切ったからそうなったのだ。どれほど多くの者たちが目も当てられない死に方をしたことか！それだけでない。お前はあの者の仕事を私の仕事よりも良いと考えているようだが、あの者はしもべたちを敵の手から救うために自分のいる場所から降りてきたためしがない。だが、私はどうだ。世界中がよく知っている。あの者によって連れ去られた私の忠実なしもべたちを、力や嘘によって何度救ってきたことか！だから、お前のことも救ってやろう」

クリスチャン「主が今すぐに彼らを救ってくださらないのは、彼らが終わりまで忠実であるかどうか、主への愛を試すためです。あなたが言う無残な死に方は、彼らにとって最高の栄誉です。というのも、彼らは今すぐ救われることをあまり期待していません。自分たちの栄光を待ち望んでいるからです。そして、主がご自身の栄光と御使いたちの栄光のうちに来られるとき、彼らはその栄光を受けるのです」

アポリュオン「お前はもうすでにあの者への奉仕において不忠実だったではないか。それでどうして自分が報酬を受け取れるなどと思うのか」

クリスチャン「アポリュオンよ、私のどこが不忠実だったというのですか」

アポリュオン「お前は〈失望の沼〉に沈みそうになったとき、もうさっそく望みを失いかけたではないか。お前は背中の重荷を取り去るために間違った道に行こうとした。お前の主君がそれを取り除くまで待っているべきだったのに。また、お前は罪深くも眠りこけて、大切なものをなくした。お前は獅子を前に引き返そうとさえした。お前が旅で見聞きしたことを話すとき、自分の話や行いの中にむなしく自分を誇ろうとする思いが内にあった」

クリスチャン「それはみな真実です。そればかりか他にもまだ言われていないこともあります。ですが、私が仕える、褒めたたえられるべき主君はあわれみ深い方ですから、いつでもゆるしてくださいます。それに、これらの弱さは、あなたの国にいたときに私に取りついたものです。あの国で私はそれを吸い込んでしまったのです。私はその弱さのもとでうめき、心から悔いました。そして、今は私の主君からの恩赦をいただきました」

するとアポリュオンは激しい怒りを爆発させた。

アポリュオン「私はこの君主の敵だ。彼の人格も法も民も憎んでいる。私が来たのはお前に敵対するためだ」

クリスチャン「アポリュオンよ、あなたが行なっていることに注意なさい。私は王の道、聖なる道を歩んでいるのです。ですから、気をつけなさい」

するとアポリュオンは道幅いっぱいに立ちはだかり、言った。

アポリュオン「私にはそんなものは怖くない。死ぬ用意をするがよい。地獄の穴に誓うが、お前はこの先に進むことはない。ここでお前の魂を殺すからだ」

そう言うやいなや、アポリュオンはクリスチャンの胸をめがけて燃える火の矢を放った。しかし、クリスチャンは手に持っていた盾で矢を受けたので、害を受けなかった。

クリスチャンは反撃しようと剣を抜いた。アポリュオンは目にもとまらぬ速さであられのように大量の矢を放った。クリスチャンは懸命に避けようとしたが、頭と手足に矢を受けてしまった。ふらつき、数歩後ろにさがった。アポリュオンはここぞとばかりに猛攻をかけたが、クリスチャンは再び勇気を奮い起こし、力の限り雄々しく抵抗した。この激しい攻防は半日以上に及んだ。クリスチャンは消耗していた。受けた傷のせいでますます弱ってきた。

そこでアポリュオンは隙を見てクリスチャンに詰め寄り、つかみかかってクリスチャンを投げ倒した。クリスチャンの握っていた剣は手から落ちてしまった。アポリュオンは勝ち誇った。「お前はもう負けだ」。そしてクリスチャンを押しつぶさんばかりにのしかかったので、クリスチャンはいのちをあきらめかけた。し

かし、神の助けがあった。アポリュオンがこの善良な男のいのちを終わらせるために最後の一撃を喰らわせようとしたとき、クリスチャンはすばやく剣に手を伸ばし、つかんだ。「わが敵よ、私について喜ぶな。たとい私が倒れるとも起きあがる（ミカ七・八）」。アポリュオンに剣を突き刺した。アポリュオンは致命傷を負った者のようによろけた。クリスチャンはそうと知って再び立ち向かった。「いや、私たちを愛してくださった方によって、私たちは、これらすべての事において勝ち得て余りがある（ローマ八・三七）」。するとアポリュオンは竜の翼を広げて、飛び去った。それからしばらく、クリスチャンは彼の姿を見なかった（ヤコブ四・七）。

この戦いで、恐ろしいうなり声と怒号を上げるアポリュオンがどんなふうに戦ったか、私のようにこの目で見た者でなければ誰も想像できまい。アポリュオンは竜のように話した。他方、クリスチャンの心からはどんなため息とうめきが出たことか。クリスチャンは、両刃の剣でアポリュオンに傷を負わせたと気づくまで、その間ずっと、少しも明るい表情を見せなかった。そのとき、彼はようやく笑みを浮かべ、天を仰いだ。だが、その戦いは私が今まで見た最もおぞましい光景だった。

これほど不釣り合いな勝負はあるまい。
クリスチャンは天使と戦わねばならないのだ。だが見よ
勇敢な男は剣と盾を振るって
竜である相手をさえ戦場から退かせた。

戦いが終わると、クリスチャンは言った。

「私は、獅子の口から救い出してくださった主に、またアポリュオンとの戦いで助けてくださった主に感謝をささげよう」

また、こうも言った。

悪鬼の頭、強大なるベルゼバブは
私の破滅をたくらみ、そのために
武具をまとわせて彼を送り出した。彼は
地獄の怒りに燃え、激しく私に挑んだ。
だが、ほむべきミカエルが私を助け
私は剣をふるって、たちまち彼を退けた。
だから、あの方にとこしえの賛美をささげ
その聖なる御名に、いつも感謝し、ほめたたえよう。

それから、彼のところに手がおりてきて、数枚のいのちの木の葉が差し出された。クリスチャンはそれを取って、先の戦いで受けた傷にあてた。するとすぐに、傷は癒やされた。また彼はその場に座って、少し前にいただいたパンを食べ、飲み物を飲んだ。それで力を得て、旅を続けることにした。剣を手にさげ、彼は言った。「まだ他にも敵が近くにいるかもしれない」。だが、この谷を抜けるまで、アポリュオンから再び襲われることはなかった。

（十二）死の陰の谷

さて、〈へりくだりの谷〉の終わりにさしかかると、また別の谷があった。そこは〈死の陰の谷〉と呼ばれていた。クリスチャンはそこを通らなければならなかった。天の都への道がその真ん中を通っていたからである。この谷は非常に孤独な場所だった。預言者エレミヤはこの谷をこう描いている。「荒野なる、穴の多い荒れた地、かわいた死の陰の地、（クリスチャンのほかは）人の通らない、人の住まない地」（エレミヤ二・六）。これからの成り行きをご覧になればわかるように、この場所でクリスチャンはアポリュオンとの戦いよりも激しい悪戦苦闘を強いられたのだった。

私が夢の中で見ていると、クリスチャンが死の陰の谷の入り口にさしかかったとき、二人の男が急いで引き返してきた。二人は、良い地を悪く言いふらした者たちの子らであった（民数記一三章）。クリスチャンは次のように話しかけた。

クリスチャン「お二人はどこに行かれるのですか」

二人「引き返すのです、引き返すのです。あなたも戻ったほうがいい。いのちや平安が惜しければ」

クリスチャン「どうなさったのですか」

二人「どうもこうもありません！　我々はあなたが向かっている先に行ってきました。勇気の続く限り進みました。実のところ、もう少しで戻れなくなるところでした。もう少し先まで行っていたら、ここであなたに知らせることもできなかったでしょう」

クリスチャン「いったい何があったのですか」

二人「もう少しで死の陰の谷に入るところでした。運よく前方を見渡したので、たどり着く前に危険に気づいたのです」（詩篇四四・一九、一〇七・一〇）

クリスチャン「何を見たのですか」

二人「見ましたとも！　谷そのものが真っ暗闇でした。地獄の妖精やサテュロスや竜もいました。また、鉄かせをはめられて捕らえられている人々が、筆舌に尽くしがたい苦しみにあって、絶え間なく悲痛な叫び声をあげているのが聞こえました。谷の上には混沌の雲がかかっていて、勇気をくじきます。死もまた谷の上に常に翼を広げています。あらゆる点で最悪で、まったくの無秩序だということです」（ヨブ三・五、一〇・二二）

クリスチャン「お話をうかがっても、やはりここが私の望む港へ至る道だとしか思えません」（エレミヤ二・六）

二人「あなたはお行きになればよろしい。我々はここを通りません」

そこで別れ、クリスチャンは道を進んだ。手には剣をにぎりしめたままだった。攻撃を受けるのではないかと恐れていたのだ。

私が夢の中で見ていると、この谷のずっと先まで、道の右側に深い溝が続いていた。昔から盲人が盲人を導いてはその溝に落ち、双方とも無惨に滅ぼされるのだった（詩篇六九・一四〜一五）。また、見よ、左側には危険なぬかるみがあり、善人でさえそこに落ちると、足場を失い、立っていられなくなるのだった。かつてはダビデ王がそのぬかるみに落ちた。力あるお方が引き抜いてくださらなかったなら、間違いなくそこで息絶えていただろう。

中央の道はあまりにも狭かったため、善良なクリスチャンはますます難儀した。暗闇の中、溝を避けようとするともう片側のぬかるみにはまりそうになるし、ぬかるみを避けようとするとよほど注意しなければ溝に落ちそうになるのだった。それでも進んだが、彼はやがて悲痛なため息をついた。というのも、先の危険に加えて、通り道は非常に暗く、彼が前に進もうと足を上げても、次にどこへ、何の上に下ろせばよいかわからないことがしばしばだったからである。

あわれな人よ！　いまどこにいるのか。昼が夜になってしまった。

善き人よ、うなだれるな。まだ道をそれてはいない。

天への道は地獄の門のそばを通っているのだ。

元気を出せ、耐え抜け。きっとうまくいく。

谷の中ごろで、私は地獄の口を見た。道のすぐそばに恐ろしい口を開けていた。さあ、どうしたものか、とクリスチャンは思った。ときどき、炎と煙がバチバチとおぞましい音を立てておびただしく吹き出していた。（アポリュオンがおじ恐れたクリスチャンの剣に対してさえ、まるで意に介さぬようだった。）やむをえずクリスチャンは剣をしまい、別の武器を取り出した。〈すべての祈り〉である（エペソ六・一八）。私は彼が大声で祈るのを聞いた。「主よ、どうぞわたしの魂をお救いください」（詩篇一一六・四）。こうしてクリスチャンは長いあいだ進んだが、炎はなおも彼のほうへ伸びてきた。また、悲しげな声や、あたりを駆けまわる音が聞こえ、ときには自分が引き裂かれるのではないか、あるいは道端の泥のように踏みつけられるのではないかと思うほどだった。

この身震いするような光景とおぞましい大合唱が何マイルも続いた。しばらくして、ある場所に着くと、悪鬼の一団が前方から向かって来るような音が聞こえた気がした。彼は立ち止まり、どうすべきかと思いあぐねた。引き返そうかと思わないでもなかった。けれども、谷の半分は越えたかもしれない。彼は思い直した。多くの危険をすでに乗り越えてきたじゃないか。引き返すのは前に進むよりもずっと危険かもしれない。先に進もうと決心した。だが、悪鬼たちはだんだん近づいてくるようだ。悪鬼たちが今にも襲いかかりそうになったとき、彼はありったけの大声で、「私は主なる神の御力の中に歩む」と叫んだ。すると、悪鬼たちは退いていった。それ以上近づいて来ることはなかった。

ひとつ、書き忘れてはならないことがある。このあわれなクリスチャンは狼狽しきっていたため、自分の声さえもわからない様子だった。それは次のことからわかった。燃えさかる穴の口のそばを通り過ぎようとしているまさにその時、汚れた霊がクリスチャンの後ろに忍び寄ってきた。それが、神を冒涜する汚らわしい言葉をクリスチャンの耳元でささやいた。クリスチャンは自分の思考の声だと思った。これには、クリスチャンはこれまで出会ったどんなことよりも苦しんだ。今まで深く愛していたお方を、今や自分が冒涜しているのだと思うと、たまらなかったのである。自制する力があればそんなことは決してしなかったであろうが、今や彼は自分の耳を塞ぐとか、この冒涜の言葉がどこから来ているのか聞き分けるとか、そういう分別も失っていた。

かなりの時間をクリスチャンはこの打ちひしがれた状態で過ごした。やがて前方でひとりの男の声を聞いた気がした。「たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわいを恐れません。あなたがわたしと共におられるからです」（詩篇二三・四）。クリスチャンは喜んだ。その理由は次のとおりである。

第一に、その声を聞いて、自分と同じように神を恐れる者がこの谷にいると知ったからである。

第二に、陰鬱な暗闇の中にあっても、神が彼らと共にいてくださると知ったからである。それなら、神は私とも共にいてくださるに違いない、とクリスチャンは思った。この場所の見通しが悪いせいで、私にはそれが見えないだけで。（ヨブ九・一一）

第三に、（彼らに追いつけるなら）一緒に旅路を行けるという希望を得たからである。

こういうわけで、クリスチャンは先を急ぎ、前方にいる人に呼びかけた。だが、その人もどう答えたものかわからなかった。その人自身も孤立無援の旅をしていると思っていたからである。やがて夜が明けた。クリスチャンはこう言った。「主は暗黒を朝に変じられた」（アモス五・八）

朝になった。クリスチャンは後ろを振り返った。引き返したいと思ったわけではない。暗闇の中で通り抜けてきた危険がどれほどのものだったか、日の光で確かめたかったのである。見ると、片側にある深い溝、その反対側のぬかるみ、それらにはさまれた狭い道がはっきり見えた。地獄の妖精、サテュロス、竜もはるか遠くに見えた。夜が明けてからは近寄ってこなかったのである。それでも、「（主が）暗やみの中から隠れた事どもをあらわし、暗黒を光に引き出し」（ヨブ一二・二二）たと書いてあるとおり、それらの光景ははっきり見えるところとなった。

クリスチャンはこの孤独で危険な道を歩みぬいた解放感で胸をなでおろした。道中では今よりずっと恐ろしく思えた数々の危険が、太陽の光にさらされてはっきりと見えるようになっていた。

しかも、このころ日が昇りつつあったことは、クリスチャンにとってまた別の恵みであった。というのも、死の陰の谷の前半も危険だったが、これから進む後

半は、それよりはるかに危険だったからである。クリスチャンが今立っている場所から谷の終端まで道沿いに、落とし穴や罠や捕獲網がそこら中にあり、溝やくぼみや深い穴や落ち込む段差がそこかしこにあった。もしも来た道のように暗闇の中を歩かなければならないとしたら、命がいくつあっても足りなかったにちがいない。だが、今は太陽が出ているのだ。クリスチャンはこう口にした。「彼のともしびがわたしの頭の上に輝き、彼の光によってわたしは暗やみを歩む」（ヨブ二九・三）

この光の中でクリスチャンはついに谷の終端に着いた。私が夢の中で見ていると、そこには血だまり、骨、灰、ずたずたにされた死体が散見された。以前にここを通った巡礼者たちのものだった。私はどうしてなのかとしばらく考えたが、すぐ近くに洞窟があるのを見つけた。昔、そこに二人の巨人〈教皇〉と〈異教徒〉が住んでいたのだった。谷に散らばっている骨、血、灰などは、巨人たちの圧倒的な力と暴虐によって無惨に殺された人々のものだった。

けれども、その場所もクリスチャンは難なく通過した。私はいぶかしく思ったが、しかし後になってわかった。異教徒はもうずいぶん前に死んでいた。教皇はかろうじて生きていたが、年老いているため、また若い頃に何度も手痛い目にあったため、体はすっかり衰え関節はこわばって、洞窟の入り口で座っているのがやっとであった。巡礼者たちが通りかかると歯をむいてにらみつけ、もう襲いかかることができないため、悔しそうに爪を噛んでいるだけだった。

私は、クリスチャンが先に進むのを見ていた。だが、洞窟の入り口に座っている老人を見ると、クリスチャンはどう考えてよいかわからなかった。とりわけ、老人は追ってくることはできないながらも、こう話しかけてきたからである。「お前たちは、もっと大勢が火あぶりにされるまで懲りないだろう」。しかし、クリスチャンは黙ったまま、平然とした表情でいた。すぐ近くを通り過ぎたが、何も害を受けなかった。それから、クリスチャンは歌った。

世にもふしぎなことよ、と言うより他にありません
ここで降りかかった苦しみと悩みの中で
生かされたとは！　ほむべきかな
そこから私を救ってくださった御手よ
闇の中の危険と悪魔と地獄と罪が
この谷を歩む私を取り囲み
穴と溝と罠と網が
道のまわりに仕掛けられ、取るに足りない愚かな私は
罠にはまり、足がもつれ、倒れてもおかしくなかった
だが、私は生きている。イエスに栄光の王冠あれ

（十三）忠実

クリスチャンが旅路を進むと、小高い丘に着いた。巡礼者が行く手を見渡せるように盛り上げられた見晴らし台だった。クリスチャンはそこに登って前方を見渡した。すると、先のほうを〈忠実〉が旅しているのが見えた。クリスチャンは大声で呼びかけた。

「おーい、おーい、待ってください。一緒に行きましょう」

忠実は後ろを振り返った。クリスチャンはまた叫んだ。

「待って、待ってください。追いつくまで」

けれども、忠実は答えた。

「いいえ、待てません。私はいのちがけで逃げているのです。血の復讐をする者が後ろから迫っているのですから」

クリスチャンはこれに少しむっとして、全力で駆け出した。あっという間に忠実に追いつき、それどころか追い越してしまった。後の者が先になったのである。兄弟を出し抜いたので、クリスチャンは得意げににやりと笑った。けれども、足元をよく見ていなかったので、不意につまずいて倒れてしまった。そして、忠実が助けに来るまで起き上がることができなかった。

私が夢の中で見ていると、二人は仲睦まじく一緒に歩き、これまでの旅路で起こったことをあれこれ親しく語り合った。クリスチャンがこう切り出した。

クリスチャン「敬愛する兄弟、忠実さん。あなたに追いつけて嬉しいです。神が私たちの心を和ませてくださったおかげで、こんなに楽しい道を連れ立って歩けるのですから」

忠実「親愛なる友よ。本当は町を出るときからあなたとご一緒したかったのですが、あなたが先に出発してしまわれたので、ここまでひとりで来るしかありませんでした」

クリスチャン「私の後を追って旅に出るまで、〈滅びの町〉にはどれくらいおられたのですか」

忠実「もうこれ以上いられなくなるまでです。あなたが出て行ってまもなく、天から火が降ってこの町はじきに焼け野原になる、という噂でもちきりになりましたから」

クリスチャン「そうなのですか。近所の方々がそう話したのですか」

忠実「はい。皆が口々に言っていました」

クリスチャン「なんと。それなのに、危険から逃れようと町を出てきたのはあなただけなのですか」

忠実「申し上げたとおり噂でもちきりでしたが、本気で信じている人はいなかったと思います。というのも、その話で盛り上がっているさなかに、あなたのことや、あなたの『無謀な旅』のことを馬鹿にして話す人たちがいたからです。あなたの巡礼の旅をそう呼んでいたのです。でも、私は信じていました。今も信じています。私たちの町は天からの火と硫黄で滅びる、と。だからこうして逃げてきたのです」

クリスチャン「隣人の〈軟弱〉の噂は聞きましたか」

忠実「ええ、聞きましたよ、クリスチャンさん。軟弱はあなたについて行って、〈失望の沼〉まで来たところで、人の話では、そこに落ちたそうです。本人は落ちたことを知られたくないようですが、あの泥ですっかり汚れていたのは確かです」

クリスチャン「それで、近所の人たちは軟弱のことをどう言いましたか」

忠実「戻ってからというもの、あらゆる人たちのひどい笑い者になっています。あざける人もいれば、見下す人もいて、彼に仕事をくれる人はほとんどいません。今の彼は、町を一度も出なかった場合よりも七倍も悪くなりました」

クリスチャン「でも、軟弱が見捨てた道を、町の人たちも軽蔑しているというのに、どうしてそんなに彼を目のかたきにするのでしょう」

忠実「ああ、町の人たちは言うのです。『あんなやつはくたばってしまえ。裏切り者だ。自分の信仰告白に忠実でなかった！』と。神がご自分の敵までも奮い立たせて彼をあざけらせ、物笑いの種にしておられるのだと思います。彼が道を捨てたからです」（エレミヤ二九・一八～一九）

クリスチャン「あなたは旅に出る前に軟弱と話しませんでしたか」

忠実「通りで一度会いましたが、自分のしたことを恥じているように、目をそらして反対側へ行ってしまいました。だから、話はしませんでした」

クリスチャン「そうですか。旅に出た当初、私は軟弱に望みをかけていました。でも今は、彼があの町と一緒に滅びてしまうのではないかと心配です。『犬は自分の吐いた物に帰り、豚は洗われても、また、どろの中にころがって行く』という真実のことわざどおりになってしまったのですから」（第二ペテロ二・二二）

忠実「私も同じことを心配しています。けれども、起こるべきことを誰が止められるでしょうか」

クリスチャン「まあ、隣人の忠実さん、軟弱のことはもう置いておいて、私たち自身にもっと身近なことを話しましょう。ここまでの道中で出会ったことを聞かせてください。きっと何かに出会ったはずです。何もなかったとしたら、それこそ珍事として書き残されるでしょうから」

忠実「あなたが落ちたという沼には落ちずにすみ、危ない目にあわずに門までたどり着きました。ただ、〈浮気〉という名の女に出会って、危うくひどい目にあわされるところでした」

クリスチャン「その網にかからなくてよかったですね。ヨセフも彼女にひどく苦しめられ、あなたと同じように逃れましたが、危うくいのちを落とすところでした（創世記三九・一一～一三）。それで、彼女に何をされたのですか」

忠実「彼女がどんなに口がうまかったか、想像もつかないでしょう。いえ、少しはおわかりかもしれませんが。一緒に脇道へそれようと私にしつこく迫って、ありとあらゆる満足を約束しました」

クリスチャン「とはいえ、正しい良心の満足を約束したわけではないでしょう」

忠実「おわかりでしょう。肉的で官能的な満足ばかりです」

クリスチャン「彼女から逃れられたことを神に感謝します。『主に憎まれる者はその穴に陥る』のですから（箴言二二・一四）」

忠実「いえ、浮気のわなから完全に逃れられたのかどうか、自分でもわからないのです」

クリスチャン「どうしてですか。まさか彼女の望みに応じたわけではないでしょう」

忠実「ええ、身を汚すようなことはしませんでした。以前に見た古い書物に『彼女の歩みは地獄におもむく』と書いてあったのを思い出したからです（箴言五・五）。それで、彼女の色香に惑わされないように目を閉じました（ヨブ三一・一）。すると彼女は私をののしりましたが、私はそのまま先へ進みました」

クリスチャン「他には旅路で大変な目にあいませんでしたか」

忠実「〈困難〉という名の丘のふもとに着いたとき、ひどく年老いた人に会いました。お前は何者で、どこへ行くのかと尋ねられたので、天の都へ向かう巡礼者だと答えました。すると老人は言いました。『あんたは正直者のようだ。わしが払う給金で、わしと一緒に暮らす気はないかね』。私は老人の名前と、どこに住んでいるのかを尋ねました。名は第一の人アダムといい、〈偽りの町〉に住んでいるとのことでした（エペソ四・二二）。それから、仕事は何で、給金は何かと尋ねました。仕事はさまざまな楽しみで、給金は最後に自分の跡取りになれることだというのです。さらに、どんな暮らしをしていて、ほかにどんな召使いがいるのかと尋ねました。暮らしは世のあらゆるご馳走でまかなわれていて、召使いはみな自分の血を分けた者たちだということでした。それから、子供はいるのかと尋ねました。娘が三人だけいて、名前は〈肉の欲〉、〈目の欲〉、〈生活の見栄〉だといいます（第一ヨハネ二・一六）。望むならその娘たちみなと結婚してもよい、と。最後に、どれくらいの期間一緒に暮らしてほしいのかと尋ねると、自分が生きているかぎりずっとだ、とのことでした」

クリスチャン「それで結局、どうすることにしたのですか」

忠実「最初は、老人と一緒に行ってもいいような気になりました。とても立派なことを言うと思ったものですから。ところが、話しながら老人の額を見ると、

こう書いてあったのです。『古き人をその行いと一緒に脱ぎ捨てよ』」

クリスチャン「それからどうなりましたか」

忠実「すると、ある思いが燃えるように心に浮かびました。老人が何を言おうと、どんなにおだてようと、ひとたび家に連れて行かれたら、私は奴隷として売り飛ばされるに違いない、と。それで、話はもう結構です、あなたの家の戸口にも近寄りませんから、と言いました。すると老人は私をののしり、お前の旅路を魂にとって苦いものにしてやる者を後から差し向けてやる、と言いました。それで私は老人に背を向けて立ち去ろうとしました。ところが、向きを変えたちょうどそのとき、老人が私の肉をつかんで、ぐいとひどく引き戻すのを感じました。体の一部を持って行かれたかと思うほどでした。それで私は叫びました。『ああ、わたしは、なんというみじめな人間なのだろう』（ローマ七・二四）。こうして私は丘を登っていきました。半分ほど登ったところで後ろを振り返ると、誰かが風のように速く後を追ってくるのが見えました。そして、ちょうど休憩所のあたりで私に追いついたのです」

クリスチャン「ちょうどそこで、私は座って休んだのです。けれど、眠気に負けてしまい、そこでこの巻物を懐から落としてしまいました」

忠実「まあ、兄弟、最後まで聞いてください。その人は私に追いつくやいなや、一言いうなり殴りかかってきました。私は殴り倒され、死んだようになりました。少し正気に戻ってから、どうしてこんな仕打ちをするのかと尋ねると、私がひそかに第一の人アダムに心を傾けたからだ、と言いました。そう言うと、また胸にすさまじい一撃をくらわせて、私をあおむけに打ち倒しました。私はさっきと同じように、死んだようにその足元に倒れました。また正気に戻ったので、あわれみを乞いました。ところが彼は、あわれみの示し方など知らない、と言って、また私を殴り倒しました。もし誰かが通りかかって、やめよと命じてくれなければ、私は間違いなく殺されていたでしょう」

クリスチャン「やめよと命じたのは、誰だったのですか」

忠実「最初は誰かわかりませんでした。けれども、その方が通り過ぎるとき、両手とわき腹に穴があるのが見えました。それで、私たちの主だとわかったのです。それから私は丘を登りました」

クリスチャン「あなたを襲った人は、モーセです。モーセはどんな人にも容赦しません。律法にそむく者にあわれみを示すことを知りません」

忠実「よく存じております。モーセに会ったのは初めてではありません。私が家でくつろいでいる時に来たことがあります。その家に居続けるなら、頭の上から家を燃やしてしまうぞ、と脅されました」

クリスチャン「ところで、モーセに会った丘の上に、お屋敷が建っていたのをご覧になりませんでしたか」

忠実「見ました。お屋敷に着く前に、獅子も見ました。でも獅子は眠っていたようです。昼ごろでしたから。まだ日が高かったので、守衛の前を通り過ぎて丘を降りました」

クリスチャン「そういえば守衛があなたの通り過ぎるのを見たと教えてくれました。あなたもお屋敷に立ち寄ればよかったでしょうに。きっと一生忘れられない珍しいものをたくさん見せてもらえましたよ。ところで、どうか教えてください。〈へりくだりの谷〉では誰にも会いませんでしたか」

忠実「ええ、〈不平不満〉という人に会いました。一緒に引き返そうとしきりに誘ってきました。その理由というのが、この谷にはまったく栄誉がないから、というのです。さらに言うには、そこへ行けば私の友人たちにみな背くことになる、と。〈誇り〉、〈傲慢〉、〈うぬぼれ〉、〈世の栄光〉など、彼の知っている人たちです。もし私がこの谷を渡るなどという愚かなことをすれば、その人たちはひどく腹を立てるだろう、と言いました」

クリスチャン「それで、不平不満には何と返事したのですか」

忠実「こう答えました。あなたが名前をあげた人たちは、私の親類だと言うかもしれないし、それはもっともです（確かに肉によれば私の親類なのですから）。けれども、私が巡礼者になってからは、あの人たちは私を勘当しましたし、私のほうでも縁を切りました。だから今の私にとって、あの人たちは初めから血のつながりがなかったも同然です、と。さらにこうも言いました。この谷について、あなたはまったく間違ったことを言っています。『謙遜は、栄誉に先だつ』、『誇る心は倒れにさきだつ』のです。だから私は、あなたが最も心を寄せる

に値すると思うものを選ぶよりも、最も知恵ある人々が栄誉とみなしたものに向かって、この谷を通るほうを選びます、と」

クリスチャン「その谷では他に何にも出会いませんでしたか」

忠実「ええ、〈恥〉に会いました。けれども、旅の途中で出会ったすべての人の中で、彼ほど名前が間違っている人はいないと思います。ほかの人たちは、少し言い合いをしたりすれば引き下がりましたが、この厚かましい恥はいつまでたってもやめようとしませんでした」

クリスチャン「恥はあなたに何と言ったのですか」

忠実「何と言ったか、ですか。そうですね、恥は宗教そのものにけちをつけたのです。宗教に心を向けるなど、人として情けなく、卑しく、こそこそしたことだと言いました。繊細な良心は男らしくない、とも言いました。今の時代の威勢のいい連中は好き勝手にふるまうことに慣れているのに、自分の言葉と行いに気をつけて、その自由から自分を縛るようなことをすれば、時代の笑い者になる、と。さらに彼は、権力者や金持ちや賢者で私と同じ考えを持った者はほとんどいない、と言いました。いたとしても、それは愚か者になるよう説き伏せられ、わけのわからないもののためにすべてを失う危険を好んで冒すようになってからのことだ、と（第一コリント一・二六、三・一八、ピリピ三・七〜八、ヨハネ七・四八）。それだけでなく、今の時代の巡礼者の多くが身分も低く貧しいこと、また自然科学についてまったく無知で理解に欠けていることにも、けちをつけました。そんな調子で彼は、今話したこと以外にもさまざまな話をしました。教会の説教を聞いて泣いたり嘆いたりするのは恥だとか、家でため息をついたり呻いたりするのは恥だとか、取るに足りない失敗のために隣人に赦しを乞うのは恥だとか、誰かから取ったものを返すのは恥だとか、そういう話もありました。またこうも言いました。宗教を持つと、偉い人たちのちょっとした悪徳（彼はそれをもっと上品な名前で呼んでいました）のせいで、偉い人たちから疎遠になってしまう。そのうえ、同じ信仰の仲間だというだけで、身分の低い者を仲間と認め、尊重するようになる。これは恥ではないか、と」

クリスチャン「それで、あなたは何と答えたのですか」

忠実「何と答えたか、ですか。初めは何と言えばいいのかわかりませんでした。恥にひどく責め立てられて、顔が真っ赤になりました。恥がそうさせたのです。私はすっかり打ち負かされそうになりました。けれども、ついに私はこう考え始めました。『人々の間で尊ばれるものは、神のみまえでは忌みきらわれる』（ルカ一六・一五）。また、こうも考えました。この恥は人間がどういうものかは語るが、神や神のことばがどういうものかについては何ひとつ語らない。さらにこう考えました。裁きの日に私たちが死かいのちかを言い渡されるのは、世の威勢のいい連中の考えによるのではなく、いと高き方の知恵と律法による。だから、たとえ世のすべての人が反対しても、神が最善だと言われることこそ本当に最善なのだ。神はご自分の宗教を良しとされ、繊細な良心を良しとされる。天の御国のために愚か者となる者こそ最も賢く、キリストを愛する貧しい者は、キリストを憎む世で最も偉大な者よりも豊かなのだ。そうであるなら、恥よ、去れ。お前は私の救いの敵だ。私の君である主に逆らってまで、お前をもてなすべきだろうか。そんなことをしたら、主が来られるとき、どうして御顔を仰げるだろうか（マルコ八・三八）。今、主の道と主のしもべたちを恥じるようなら、どうして祝福を期待できるだろうか。そう思いました。けれども、この恥は実に大胆な悪党でした。なかなか振り切ることができませんでした。私につきまとって、宗教につきものの弱さをあれこれ持ち出しては、絶えず耳元でささやき続けたのです。けれども、ようやく私は、これ以上そんなことをしても無駄だときっぱり言いました。お前が軽蔑している事柄にこそ、私は最高の栄光を見ているのだから。こうしてやっとこのしつこい男をやり過ごすことができました。彼を振り払ったとき、私は歌い出しました。

「天の召しに従う人々が
出会う試練は数知れず
肉の弱みにつけこんで
次から次へと、また新たに襲い来る。
今かいつかは、それに捕らわれ
打ち負かされて、捨てられよう。

されば巡礼者よ、巡礼者よ
目を覚まし、男らしくあれ」

クリスチャン「兄弟よ、あなたがこの悪党にそれほど勇敢に立ち向かってくださって嬉しいです。おっしゃるとおり、すべての人の中で、彼ほど名前が間違っている者はいないと思います。何しろ大胆にも通りまでついてきて、すべての人の前で私たちに恥をかかせようとするのですから。つまり、善いことを恥じさせようとするのです。彼自身が厚かましくなければ、あんなことはしようとも思わないでしょう。けれども、これからも彼に抵抗しようではありませんか。どんなに大口をたたいても、恥が引き立てるのは愚か者だけで、ほかの誰でもありません。ソロモンも言っています。『知恵ある者は、誉を得る、しかし、愚かな者ははずかしめを得る』（箴言三・三五）」

忠実「恥に打ち勝てるよう、あの方に助けを叫び求めなければならないと思います。私たちが地上で真理のために勇敢であることを望んでおられる方に」

クリスチャン「まさにそうです。ところで、その谷では他に誰にも出会いませんでしたか」

忠実「いいえ、誰にも。その谷の残りの道も、死の陰の谷も、ずっと日が照っていましたから」

クリスチャン「それはよかったですね。私のほうはまるで違いました。あの谷に入るとすぐ、汚れた悪鬼アポリュオンと長いあいだ恐ろしい戦いをしたのです。本当に殺されるかと思いました。とくに、地面に倒されて、のしかかられたときには、粉々にされるかと思いました。投げ飛ばされたときに、剣が手から飛んでいってしまったのです。アポリュオンは、もうお前は俺のものだと言いました。けれども、私が神に叫び求めると、神は聞いてくださり、あらゆる苦難から救い出してくださいました。それから死の陰の谷に入りましたが、谷のなかばまで光がありませんでした。何度も、もう殺されると思いました。けれども、ついに夜が明けて日が昇り、残りの道のりはずっと楽に、穏やかに進むことができました」

（十四）多弁

私が夢の中で見ていると、二人が進んでいくうちに、〈忠実〉がふと横に目をやった。すると、〈多弁〉という名の男が、少し離れて並んで歩いているのが見えた。このあたりは道幅が広く、皆で並んで歩けたのである。多弁は背の高い男で、近くで見るより遠くから見たほうがいくらか見栄えがした。忠実はこの男にこう話しかけた。

忠実「友よ、どちらへ行かれるのですか。天の国へ行かれるのですか」

多弁「私も同じところへ参ります」

忠実「それはよかった。では、ご一緒していただけるでしょうか」

多弁「喜んでお供しましょう」

忠実「では、一緒に行きましょう。そして、ためになることを語り合って時を過ごしましょう」

多弁「善いことを語り合うのは、あなたとでも、ほかの誰とでも大歓迎です。こんな善い務めに心を向ける方々に出会えて嬉しく思います。実を言うと、旅のあいだにこうして時を過ごそうとする人はほとんどいません。たいていは、何の益にもならない話をしたがるのです。これには私も心を痛めてきました」

忠実「それは本当に嘆かわしいことです。地上の人が舌と口を使うのに、天の神のことほどふさわしいものがあるでしょうか」

多弁「あなたのことがすっかり気に入りました。あなたの言葉には確信があふれています。私からも付け加えましょう。神のことを語り合うほど楽しく、ためになることがあるでしょうか。どれほど楽しいことか。つまり、驚くべきことを喜ぶ人にとっては、ということです。たとえば、物事の歴史や奥義を語るのが好きな人がいるとします。あるいは、奇跡や不思議やしるしについて語るのが好きな人がいるとします。そういう人にとって、聖書ほど楽しく、美しく書き記されたものがどこにあるでしょうか」

忠実「そのとおりです。けれども、こういうことを語り合うときは、それによって益を受けることを目的にするべきです」

多弁「それこそ私が言ったことです。こういうことを語り合うのは、何よりもためになります。そうすることで、さまざまなことを知ることができるからです。たとえば、地上のもののむなしさや、天上のものの恵みです。大まかに言えばそうなります。もっと詳しく言えば、新しく生まれることの必要、私たちの行いの不十分さ、キリストの義の必要などを学ぶことができます。そのうえ、語り合うことで、悔い改めること、信じること、祈ること、苦しみを受けることなどが何であるかも学べます。また、福音の大いなる約束と慰めが何であるかを学んで、自分の慰めとすることもできます。さらに、誤った意見に反駁し、真理を弁護し、無知な人を教えることも学べます」

忠実「みなおっしゃるとおりです。あなたからこういうことを伺えて嬉しいです」

多弁「ああ、これが欠けているせいで、信仰の必要を悟る人がほとんどいないのです。永遠のいのちのためには魂に恵みの働きが必要だということも悟りません。そういう人は、無知なまま律法の行いに頼って生きています。そんなことでは、決して天の御国を得られないのに」

忠実「けれども、失礼ながら、こうしたことについての天の知識は神の賜物です。人の努力で得られるものではありませんし、それについて語るだけで得られるものでもありません」

多弁「それはみなよく承知しています。人は天から与えられなければ、何も受けることができません。すべては恵みによるのであって、行いによるのではありません。これを裏づける聖句なら百でも挙げられますよ」

忠実「では、今ここで、何を話の土台にしましょうか」

多弁「何でもお好きなものを。天上のことでも地上のことでも、道徳のことでも福音のことでも、聖なることでも俗なることでも、過去のことでも未来のことでも、外国のことでも国内のことでも、本質的なことでも付随的なことでも、お話ししましょう。すべてが私たちのためになるのでしたら」

忠実はすっかり感心してしまった。クリスチャンはその間ずっとひとりで歩いていた。忠実はそちらへ歩み寄り、小声で話しかけた。

忠実「なんと頼もしい連れができたことでしょう。この人はきっと、すばらしい巡礼者になりますよ」

クリスチャンは控えめに微笑んで言った。

クリスチャン「あなたがそんなに気に入ったこの人は、その舌で、彼を知らない人を二十人でもだますでしょう」

忠実「では、あの人をご存じなのですか」

クリスチャン「知っているか、ですって。ええ、本人よりもよく知っていますよ」

忠実「いったい、どういう人なのですか」

クリスチャン「名前は多弁といって、私たちの町に住んでいます。あなたが彼を知らないとは意外ですが、私たちの町は大きいですからね」

忠実「誰の息子ですか。町のどのあたりに住んでいるのですか」

クリスチャン「〈口上手〉という人の息子で、〈おしゃべり横丁〉に住んでいました。知り合いの間では『おしゃべり横丁の多弁』で通っています。口はうまいのですが、実はつまらない男です」

忠実「でも、なかなか立派な人に見えますが」

クリスチャン「それは、彼をよく知らない人にとってのことです。彼は外ではいちばん見栄えがしますが、家の近くではずいぶん醜いのです。あなたが立派な人だとおっしゃるので、ある画家の作品で気づいたことを思い出しました。その画家の絵は、遠くから見るといちばん見栄えがしますが、すぐ近くで見ると、あまり感じがよくないのです」

忠実「でも、あなたが笑っておられたので、冗談をおっしゃっているだけかと思いました」

クリスチャン「とんでもない。笑いはしましたが、このことで冗談を言うつもりはありませんし、誰かを偽って訴えるつもりもありません。もう少し彼のことを明かしましょう。この男は、どんな相手とも、どんな話でもします。今あなたと話しているように、酒場の腰掛けでも同じように話すでしょう。酒が頭に回れば回るほど、こういう話が口から出てくるのです。彼の心にも、家にも、行いにも、宗教の居場所はありません。彼が持っているものはみな舌の上にあるだけです。彼の宗教は、舌で騒ぎ立てることなのです」

忠実「そうなのですか。それなら、私はあの人をすっかり見誤っていました」

クリスチャン「見誤っていましたとも。間違いありません。『彼らは言うだけで、実行しない』ということわざを思い出してください。『神の国は言葉ではなく、力である』のです（マタイ二三・三、第一コリント四・二〇）。彼は祈りのことも、悔い改めのことも、信仰のことも、新しく生まれることも話します。けれども、それについて話すことしか知らないのです。私は彼の家に行ったことがあり、家の中でも外でも彼の様子を見てきました。ですから、私の言うことが本当だとわかっています。彼の家には、卵の白身に味がないのと同じくらい、宗教がありません。祈りもなければ、罪を悔い改めるしるしもありません。いや、獣のほうが、獣なりに、彼よりずっとよく神に仕えています。彼を知るすべての人にとって、彼は宗教の汚点であり、恥辱であり、恥そのものです（ローマ二・二四～二五）。彼のせいで、彼の住む界隈では、宗教はほとんどよく言われません。彼を知る世間の人はこう言います。『外では聖人、家では悪魔』。かわいそうに、彼の家族はそれを身にしみて知っています。彼は召使いたちにひどく意地が悪く、口汚くののしり、無茶を言います。それで召使いたちは、彼のために何をし、彼に何と言えばいいのかわからないのです。彼と取引をする人たちは、彼を相手にするよりトルコ人を相手にするほうがましだ、と言います。トルコ人のほうがよほど公正に取引してくれるからです。この多弁は、できることなら取引相手を出し抜き、だまし、欺き、食い物にするのです。そのうえ、息子たちにも自分と同じ道を歩ませようと育てています。息子の誰かに愚かな臆病さが見られると、その子をばか者、のろま呼ばわりするのです。彼の言う愚かな臆病さとは、繊細な良心が芽生えることです。そして、その子には大事な仕事を決して任せ

ず、人前でほめることもしません。私の考えでは、彼はその邪悪な生き方によって、多くの人をつまずかせ、倒れさせてきました。神が止めてくださらなければ、これからもさらに多くの人を滅ぼすことになるでしょう」

忠実「兄弟よ、あなたの言うことを信じないわけにはいきません。あなたが彼を知っているとおっしゃるからだけではありません。あなたがクリスチャンらしく人について語られるからです。あなたが悪意からこんなことをおっしゃるとは思えません。本当におっしゃるとおりなのでしょう」

クリスチャン「もし私があなた以上に彼を知らなかったら、私もあなたと同じように、初めは彼を立派な人だと思ったかもしれません。また、彼のこうした評判が宗教の敵である人たちから出ているだけなら、中傷だと思ったでしょう。悪人の口からは、善人の名前や信仰告白について、よくそういう中傷が出てくるものですから。けれども、こうしたことはみな、私自身が見聞きしたことから証明できます。いや、同じくらい悪いことをほかにもたくさん証明できるのです。そのうえ、善良な人たちは彼のことを恥じています。彼を兄弟とも友とも呼べないのです。彼を知る善良な人たちの間では、その名前を口にしただけで顔が赤くなるほどです」

忠実「なるほど、言うことと行うことは別物なのですね。これからはこの違いをもっとよく見分けるようにします」

クリスチャン「まさに別物です。魂と体ほども違います。魂のない体はただの死骸にすぎません。それと同じように、言うことも、それだけならただの死骸にすぎないのです。宗教の魂は、実践にあります。『父なる神のみまえに清く汚れのない信心とは、困っている孤児や、やもめを見舞い、自らは世の汚れに染まずに、身を清く保つことにほかならない』（ヤコブ一・二二〜二七）。多弁はこのことに気づいていません。聞くことと言うことで、立派なクリスチャンになれると思っているのです。こうして彼は自分の魂を欺いています。聞くことは種をまくことにすぎません。話すだけでは、心と生活に本当に実が結んでいる証拠にはなりません。裁きの日には、人はその実によって裁かれるのだと肝に銘じましょう（マタイ一三章、二五章）。そのときには、『あなたは信じたか』とは問われません。『あなたは行う人だったか、それともただ話す人だったか』と問われ、それに応じて裁かれるのです。世の終わりは収穫にたとえられています。ご存じのとおり、収穫のときに人は実のほかには目もくれません。信仰によらないものが受け入れられる、と言っているのではありません。その日には多弁の信仰告白がどれほど無意味かをお伝えしたくて、こう言っているのです」

忠実「それで、モーセが清い獣について述べたところを思い出しました（レビ記一一・三〜七、申命記一四・六〜八）。清い獣とは、ひずめが分かれていて、しかも反芻するもののことです。ひずめが分かれているだけのものや、反芻するだけのものではありません。野うさぎは反芻しますが、ひずめが分かれていないので汚れています。これはまさに多弁にそっくりです。彼は反芻します。知識を求め、みことばを噛みしめます。けれども、ひずめが分かれていません。罪人の道と袂を分かたないのです。野うさぎのように、犬や熊の足をしたままなのです。だから汚れているのです」

クリスチャン「私の知るかぎり、あなたはこれらの聖句の、福音における本当の意味を語られました。もう一つ付け加えましょう。パウロはある人々を、しかも大変な話し手である人々を、やかましい鐘や騒がしい鐃鉢と呼んでいます（第一コリント一三・一〜三）。パウロが別の箇所で説明しているように、それはいのちのないものが音を出すようなものです（第一コリント一四・七）。いのちがないというのは、福音の真の信仰と恵みがないということです。ですから、たとえその話す声が御使いの舌や声のようであっても、天の御国でいのちの子らとともに置かれることは決してないのです」

忠実「初めはあれほど彼と一緒にいたいと思ったのに、今は同じくらいうんざりしています。どうすれば彼と別れられるでしょうか」

クリスチャン「私の助言どおりにしてごらんなさい。そうすれば、彼のほうもすぐにあなたにうんざりするでしょう。神が彼の心に触れて、向きを変えてくださらないかぎりは」

忠実「どうしろとおっしゃるのですか」

クリスチャン「彼のところへ行って、宗教の力について、何かまじめな話を始めるのです。彼はきっとそれに賛成するでしょう。賛成したら、その力が彼の心や家や行いに据えられているかどうか、はっきり尋ねてごらんなさい」

そこで忠実はまた前へ進み出て、多弁に言った。

忠実「さあ、ご機嫌いかがですか。調子はどうですか」

多弁「おかげさまで元気です。今ごろはもう、たくさん語り合っているはずだと思っていましたよ」

忠実「では、よろしければ今から始めましょう。問いを立てるのを私に任せてくださったのですから、こういう問いにしましょう。神の救いの恵みが人の心にあるとき、それはどのように現れるのでしょうか」

多弁「なるほど、私たちの話は物事の力についてのものになるわけですね。それはとても良い問いです。喜んでお答えしましょう。手短に答えると、こうです。第一に、神の恵みが心にあるとき、それは罪に対する大きな叫びを引き起こします。第二に」

忠実「いいえ、待ってください。一つずつ考えましょう。むしろ、恵みは魂に罪を忌みきらわせることで現れる、と言うべきだと思います」

多弁「おや、罪に対して叫ぶことと、罪を忌みきらうことに、どんな違いがあるのですか」

忠実「ああ、大違いです。人は計算ずくで罪に対して叫ぶこともできます。けれども、罪を忌みきらうことは、罪に対する敬虔な嫌悪の力によらなければできません。説教壇で罪に対して叫びながら、心や家や行いの中では罪を平気で許している人を、私は大勢見てきました。ヨセフの主人の妻は、まるでとても聖い女であるかのように大声で叫びました。けれども、それにもかかわらず、ヨセフと汚れたことをしようとしていたのです。罪に対して叫ぶといっても、母親がひざの上の子を叱るのと変わらない人もいます。だらしない子だの、悪い子だのと言っておきながら、すぐに抱きしめて口づけするのです」

多弁「どうやら、あなたは揚げ足を取ろうと待ちかまえているようですね」

忠実「いいえ、とんでもない。私はただ物事を正しくしたいだけです。ところで、心に恵みの働きがあることを示すと、あなたが考える二つめのしるしは何ですか」

多弁「福音の奥義についての深い知識です」

忠実「そのしるしは最初に挙げるべきでした。けれども、最初であれ最後であれ、これも間違っています。福音の奥義についての知識、それも深い知識を得ていても、魂に恵みの働きがないことはあるからです。そうです、人はたとえあらゆる知識に通じていても、無に等しいことがあります。したがって、神の子ではないこともあるのです（第一コリント一三章）。キリストが『あなたがたは、これらのことが皆わかったか』と言われ、弟子たちが『わかりました』と答えたとき、キリストはこう付け加えられました。『もしこれらのことがわかっていて、それを行うなら、あなたがたはさいわいである』。キリストは祝福を、知ることにではなく、行うことに置いておられます。行いを伴わない知識もあるのです。『主人のこころを知っていながら、それに従わない』者がそうです。人は御使いのように知っていても、クリスチャンでないことがあります。ですから、あなたのしるしは正しくありません。確かに、知ることは話し手や自慢屋を喜ばせます。けれども、行うことこそ神を喜ばせるのです。知識がなくても心が善くなりうる、と言うのではありません。知識がなければ、心はむなしいものです。ですから、知識には二種類あります。物事をただ思いめぐらすだけで終わる知識と、信仰と愛の恵みを伴う知識です。後者は人を動かし、心から神のみこころを行わせます。前者は話し手には十分でしょう。けれども、後者がなければ、真のクリスチャンは満足しません。『わたしに知恵を与えてください。わたしはあなたのおきてを守り、心をつくしてこれに従います』（詩篇一一九・三四）」

多弁「また揚げ足取りですね。これでは徳を高めることになりません」

忠実「では、よろしければ、恵みの働きがあるところでそれがどう現れるのか、別のしるしを挙げてください」

多弁「いや、やめておきます。どうやら意見が合いそうにありませんから」

忠実「では、あなたが挙げないのでしたら、私が挙げてもよろしいですか」

多弁「ご自由にどうぞ」

忠実「魂のうちにある恵みの働きは、それを持っている本人か、あるいはそばで見ている人に現れます」

「本人には、こう現れます。恵みの働きは、その人に罪を悟らせます。とくに、自分の本性の汚れと、不信仰の罪を悟らせます。イエス・キリストを信じて

神のあわれみを受けなければ、その罪のために必ず滅びることも悟らせます（ヨハネ一六・八、ローマ七・二四、ヨハネ一六・九、マルコ一六・一六）。こうしたことを見て感じると、その人は罪を悲しみ、恥じるようになります。さらにその人は、世の救い主が自分のうちに示されたことを知ります。いのちを得るためには、どうしても救い主に結びつかなければならないことも知ります。そして、救い主に飢えかわくようになります。その飢えかわきに対して、約束が与えられているのです（詩篇三八・一八、エレミヤ三一・一九、ガラテヤ二・一六、使徒四・一二、マタイ五・六、黙示録二一・六）。その人の喜びと平安、聖さへの愛は、救い主への信仰の強さに応じて強くも弱くもなります。救い主をもっと知り、この世でもっと仕えたいという願いも同じです。けれども、恵みの働きはこのように本人に現れるといっても、本人がこれは恵みの働きだと結論できることはめったにありません。今なお残る自分の腐敗と、ゆがめられた理性のために、このことについて心が判断を誤ってしまうからです。ですから、この働きを持つ人が、これは恵みの働きだとしっかり結論するには、とても健全な判断力が必要です」

「ほかの人には、こう現れます」

「第一に、キリストへの信仰を経験に基づいて告白することによって現れます（ローマ一〇・一〇、ピリピ一・二七、マタイ五・一九）。第二に、その告白にふさわしい生活によって現れます。つまり、聖い生活です。心の聖さ、家庭の聖さ（家庭があればですが）、そして世の中での行いの聖さです。そういう生活は全体として、その人に、ひそかに内側で自分の罪を忌みきらい、罪のゆえに自分自身を忌みきらうことを教えます。また、家庭では罪を抑え、世の中では聖さを広めることを教えます。それも、偽善者やおしゃべりな人のように口先だけでするのではありません。信仰と愛のうちに、みことばの力に実際に従うことによってするのです（ヨハネ一四・一五、詩篇五〇・二三、ヨブ四二・五～六、エゼキエル二〇・四三）。さて、恵みの働きとその現れについての、この手短な説明に何か異論がおありなら、どうぞおっしゃってください。もしなければ、二つめの問いをさせていただきたいのです」

多弁「いいえ、今の私の役目は異論を述べることではなく、聞くことです。ですから、二つめの問いをどうぞ」

忠実「それはこうです。あなたは、この説明の前半を経験していますか。また、あなたの生活と行いは、それを証ししていますか。それとも、あなたの宗教は言葉や口先だけのもので、行いと真実にはないのでしょうか。これに答えてくださるなら、どうか、天におられる神がアーメンと言ってくださると知っていること以上は言わないでください。また、あなたの良心が正しいと認めることのほかは言わないでください。『自分で自分を推薦する人ではなく、主に推薦される人こそ、確かな人』だからです。そのうえ、自分の行いも近所の人たちもみな嘘だと言っているのに、自分はこうだ、ああだと言うのは、大きな悪です」

すると、多弁は初め顔を赤らめた。けれども、気を取り直して、こう答えた。

多弁「今度は経験だの、良心だの、神だのを持ち出して、話したことが正しいかどうか神に訴えるのですね。こういう話になるとは思っていませんでした。こんな問いに答える気もありません。答える義務などないと思いますから。あなたが教理問答の先生になるというなら別ですが。たとえそうなっても、あなたを私の裁き手と認めるのは、お断りしてもかまわないはずです。それにしても、どうしてこんなことを尋ねるのか、教えていただけますか」

忠実「あなたが熱心に話したがるのを見たからです。それに、あなたには頭の中の考えのほかに何かがあるとは思えなかったからです。そのうえ、本当のことをすっかり申し上げますと、あなたについてこう聞いているのです。あなたの宗教は話の中にあるだけで、あなたの行いは、その口先だけの信仰告白が偽りであることを示している、と。あなたはクリスチャンの間の汚点で、あなたの不敬虔な行いのせいで宗教がますます悪く言われている、と人々は言っています。すでにあなたの邪悪な生き方につまずいた人もいて、これからさらに多くの人がそのために滅びる危険がある、と。あなたの宗教は、酒場とも、貪欲とも、不品行とも、悪態とも、嘘とも、くだらない仲間づきあいとも両立するのです。遊女について言われる『あの女はすべての女の恥だ』ということわざは、あなたにも当てはまります。あなたは信仰を告白するすべての者の恥なのです」

多弁「そんなにたやすく噂をうのみにして、そんなに軽々しく人を裁くのですから、あなたは気難しい人か、ふさぎこんだ人に違いありません。話し相手にふさわしくない人です。では、さようなら」

すると、クリスチャンがやって来て、兄弟に言った。

クリスチャン「こうなると言ったでしょう。あなたの言葉と彼の欲とは、相容れなかったのです。彼は生活を改めるよりも、あなたと別れるほうを選びました。でも、私が言ったとおり、彼は行ってしまいました。行かせておきましょう。損をするのは彼自身で、ほかの誰でもありません。彼のほうから去ってくれたので、私たちが彼から離れる手間が省けました。彼がこのままでいるなら（きっとそうでしょうが）、私たちの仲間にとって汚点にしかならなかったでしょう。そのうえ、使徒も『このような人々から離れなさい』と言っています」

忠実「でも、彼とこうして少し話せてよかったと思います。もしかすると、彼はまたこのことを考えるかもしれません。いずれにせよ、私は彼に率直に話しました。ですから、彼が滅びても、私はその血について責任がありません」

クリスチャン「あれほど率直に話されたのは、よいことでした。このごろは、こういう忠実な接し方を人にする者がほとんどいません。そのために、宗教が多くの人に鼻もちならないものになっているのです。言葉だけの宗教を持ち、行いは放埒でむなしい、あのおしゃべりな愚か者たちのせいです。彼らが敬虔な人々の交わりにたびたび加えられるので、世の人は戸惑い、キリスト教に傷がつき、誠実な人が悲しむのです。すべての人がこういう者たちに、あなたがしたように接してくれればいいのですが。そうすれば、彼らは宗教にもっとかなう者になるでしょう。さもなければ、聖徒の交わりに居たたまれなくなるでしょう」

それから忠実はこう歌った。

「多弁は初め、なんと羽を広げることか。
なんと勇ましく語ることか。なんと思い上がって
すべてを打ち負かそうとすることか。だが
忠実が心のうちのわざを語るやいなや
満月を過ぎた月のように、彼は欠けてゆく。
心のうちのわざを知る者のほかは、みなそうなるのだ」

（十五）伝道者

こうして二人は、道中で見てきたことを語り合いながら進んでいった。そのおかげで、道のりは楽になった。そうでなければ、きっと退屈な道だっただろう。今は荒野を通っていたからである。荒野をほとんど抜けかけたころ、〈忠実〉がふと後ろを振り返った。すると、誰かが後からついて来るのが見えた。見覚えのある人だった。忠実は兄弟に言った。

「おや、向こうから来るのは誰でしょう」

クリスチャンはそちらを見て言った。

「私の親しい友、伝道者さんです」

忠実も言った。

「ええ、私の親しい友でもあります。門への道に私を送り出してくださったのは、あの方なのですから」

やがて伝道者は二人に追いつき、こうあいさつした。

伝道者「愛する人たちよ、あなたがたに平安があるように。あなたがたを助ける者にも平安があるように」

クリスチャン「ようこそ、ようこそ、伝道者さん。あなたのお顔を見ると、以前あなたが私にしてくださった親切を思い出します。私の永遠の幸いのために、たゆまず労してくださったことも思い出します」

忠実「本当によく来てくださいました。ああ、慕わしい伝道者さん。あなたがご一緒してくださることは、私たちあわれな巡礼者にとって、どれほどうれしいことでしょう！」

伝道者「友よ、この前別れてから、どうしていましたか。どんなことに出会い、どのようにふるまってきましたか」

そこでクリスチャンと忠実は、道中で起こったことをすべて伝道者に話した。どのようにして、どれほど苦労してここまでたどり着いたかも話した。

伝道者「本当にうれしく思います。あなたがたが試練に出会ったことがうれしいのではありません。あなたがたが勝利を収めたことがうれしいのです。多くの弱さがあったにもかかわらず、今日この日まで道を歩み続けてきたことがうれしいのです」

「本当に、このことをうれしく思います。私自身のためにも、あなたがたのためにもです。私がまき、あなたがたが刈り取ったのです。そして、『まく者も刈る者も、共々に喜ぶ』日が来ます（ヨハネ四・三六）。ただし、あなたがたが耐え抜くならばです。『たゆまないでいると、時が来れば刈り取るようになる』からです（ガラテヤ六・九）。冠があなたがたの前にあります。それは朽ちない冠です。『賞を得るように走りなさい』（第一コリント九・二四～二七）。この冠を目指して出発し、遠くまで来たのに、横から来た者に冠を奪われてしまう人もいます。『だから、あなたがたの冠がだれにも奪われないように、自分の持っているものを堅く守っていなさい』（黙示録三・一一）。あなたがたはまだ、悪魔の鉄砲の弾が届かないところまでは来ていません。『罪と取り組んで戦う時、まだ血を流すほどの抵抗をしたことがない』のです。いつも御国を目の前に置きなさい。目に見えないものを堅く信じなさい。この世にあるものは、何ひとつ心に入り込ませてはなりません。何よりも、自分の心と、そこにある欲によく気をつけなさい。心は『よろずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている』からです。顔を火打石のようにしなさい。天と地のいっさいの権威が、あなたがたの味方なのです」

クリスチャンは伝道者の勧めに感謝した。そして、残りの道のりの助けになるように、もっと話してほしいと頼んだ。伝道者が預言者であることを、二人はよく知っていたからである。これから身に起こるかもしれないことも、それにどう立ち向かい、打ち勝てばよいかも、伝道者なら教えてくれるはずだった。忠実もこの願いに加わった。そこで伝道者は、次のように話し始めた。

伝道者「わが子らよ、あなたがたは福音の真理のことばの中で聞いています。『多くの苦難を経て天の御国に入らなければならない』と。また、『至るところの町々で、投獄と患難とが、あなたがたを待ちうけている』とも聞いています。ですから、巡礼の旅を長く続けるうちに、何らかの形でこうしたことに出会わずにすむと思ってはなりません。あなたがたはすでに、これらの証しが真実であることを、いくらか身をもって知りました。そして、これからすぐに、もっと多くのことが起こります。ご覧のとおり、あなたがたはもうすぐこの荒野を抜けます。そうすれば、やがて行く手に町が見えてきて、まもなくその町に入るでしょう。その町で、あなたがたは敵にひどく取り囲まれます。彼らは何としてもあなたがたを殺そうとするでしょう。あなたがたのうちどちらか、あるいは二人ともが、自分の持っている証しを血で封印することになるのは確かです。けれども、『死に至るまで忠実であれ。そうすれば、王はいのちの冠を与えてくださる』のです。そこで死ぬ者は、非業の死を遂げ、おそらく苦しみも大きいでしょう。それでも、その人は連れよりも恵まれています。連れより先に天の都に着くからだけではありません。もう一人が残りの旅で出会う多くの災いを免れるからです。その町に着いて、ここで私が話したことが実現するのを見たら、友である私を思い出してください。そして、男らしくふるまいなさい。『善をおこない、そして、真実であられる創造者に、自分のたましいをゆだねるがよい』」

（十六）虚栄の市

私が夢の中で見ていると、二人は荒野を抜けた。するとまもなく、行く手に町が見えてきた。その町の名は〈虚栄の町〉という。町では市が開かれていて、〈虚栄の市〉と呼ばれている。市は一年中開かれている。虚栄の市という名が付いているのは、市の開かれている町そのものが、むなしいものよりも軽いからである。また、そこで売られる物も、そこにやって来る物も、すべてむなしいからである。賢者の言うとおり、『きたらんとする事は皆空である』（伝道の書一章、二・一一、一七、一一・八、イザヤ四〇・一七）。

この市は、近ごろ始まったものではない。昔からあるものである。その起こりを話そう。

五千年近く前にも、天の都へ向かって歩む巡礼者たちがいた。ちょうどこの二人の正直者のようにである。ベルゼバブ、アポリュオン、レギオンとその仲間たちは、巡礼者たちの歩いた跡を見て気づいた。都への道は、この虚栄の町を通っているのだ。そこで彼らは、この町に市を立てようと企んだ。あらゆる虚栄を売る市で、一年中開かれる市である。だから、この市ではあらゆる商品が売られている。家、土地、商売、地位、名誉、昇進、称号、国、王国、欲望、快楽などである。あらゆる種類の楽しみもある。遊女、女衒、妻、夫、子供、主人、しもべ、いのち、血、からだ、たましい、銀、金、真珠、宝石など、何でもある。

そのうえ、この市ではいつでも、手品、いかさま、賭け事、芝居、道化、猿、悪漢、ごろつきが見られる。それも、ありとあらゆる種類のものがである。

ここではまた、盗み、人殺し、姦淫、偽証も見られる。しかも、ただで見られるのである。どれも血のように赤い色をしている。

規模の小さいほかの市でも、通りや筋にはそれぞれ名前があり、そこでこれこれの品が売られている。それと同じように、この市にもそれぞれの場所、筋、通りがある。つまり国や王国である。そこへ行けば、この市の品物がすぐに見つかる。ここにはイギリス通り、フランス通り、イタリア通り、スペイン通り、ドイツ通りがあって、さまざまな種類の虚栄が売られている。ほかの市では、ある一つの品が市全体の目玉になっているものである。それと同じように、この市ではローマの品とその商いが大いにもてはやされている。ただ、私たちイギリス国民は、ほかのいくつかの国民と共に、それを嫌うようになった。

さて、すでに言ったとおり、天の都への道は、このにぎやかな市が開かれている町のただ中を通っている。都へ行こうとしながら、この町を通らずにすませたいと思う者は、『この世から出て行かねばならない』（第一コリント五・一〇）。君の君であられる方ご自身も、地上におられたとき、この町を通ってご自分の国へ行かれた。それも市の立つ日にである。私の思うには、この市の首領ベルゼバブがその方を招いて、自分の虚栄を買わせようとした。それどころか、町を通るときに自分を拝みさえすれば、市の主にしてやろうとさえした。その方がたいへん尊い方だったので、ベルゼバブはその方を通りから通りへと連れ回し、またたくまに世界のすべての国々を見せた。何とかしてその祝福された方を誘い、虚栄のいくつかを値切らせ、買わせようとしたのである。けれども、その方は商品に少しも心を引かれなかった。だから、これらの虚栄にびた一文も使わずに、町を去って行かれた（マタイ四・八、ルカ四・五～七）。このように、この市は昔からある古いもので、たいへん大きな市なのである。

さて、すでに言ったとおり、この巡礼者たちは、どうしてもこの市を通らなければならなかった。そこで二人は市を通って行った。ところが、二人が市に入るやいなや、市じゅうの人々が騒ぎ出した。町そのものが、二人のことで大騒ぎになったかのようだった。それにはいくつかの理由があった。第一に、巡礼者たちの着ている服が、その市で商いをするどの人の服とも違っていた。そのため、市の人々は二人をじろじろと眺めた。ある者は愚か者だと言い、ある者は狂人だと言い、ある者は異国の者だと言った（第一コリント二・七～八）。

第二に、人々は二人の服装に驚いたのと同じように、その話す言葉にも驚いた。二人の言うことがわかる者は、ほとんどいなかったからである。二人はおのずとカナンの言葉を話した。しかし、市の商人たちはこの世の人間だった。そのため、市の端から端まで、互いに相手が異国人のように思えたのである。

第三に、商人たちを少なからずとまどわせたことがある。巡礼者たちが、商人たちの品物をまるで重んじなかったのである。二人は品物を見ようとさえしなかった。買ってくれと呼びかけられると、指で耳をふさいで叫んだ。『わたしの目をほかにむけて、むなしいものを見させないでください』（詩篇一一九・三七）。そして上を見上げた。自分たちの商いと取引は天にある、という意味だった（ピリピ三・一九〜二〇）。

ある者が、二人のふるまいを見て、あざけるように言った。

「お前たち、何を買うのか」

二人はその男を重々しく見つめて言った。

「私たちは真理を買います（箴言二三・二三）」

それがきっかけになって、人々は二人をますます軽蔑した。ある者はあざけり、ある者はなじり、ある者はののしった。二人をなぐれとほかの者をけしかける者もいた。ついに市は大騒ぎになり、秩序はすっかり乱れてしまった。すぐに市の大物のもとに知らせが届いた。大物は急いでやって来て、最も信頼する友人の何人かに、男たちを取り調べるように命じた。市をひっくり返しかけた男たちである。こうして二人は取り調べのために連れて来られた。取り調べる者たちは、二人に尋ねた。どこから来て、どこへ行くのか。こんな見慣れない服を着て、ここで何をしているのか。二人は答えた。自分たちは巡礼者で、この世では旅人であり寄留者だ。自分たちのふるさと、天のエルサレムへ行くところだ（ヘブル一一・一三〜一六）。町の人々にも商人たちにも、こんな目にあわされ、旅を妨げられるようなことは何もしていない。ただ、何を買うのかと聞かれたので、真理を買うと答えただけだ。けれども、取り調べを任された者たちは、二人を狂人としか思わなかった。さもなければ、市をすっかり混乱させに来た者たちだと思った。そこで二人を捕らえて打ちたたき、泥を塗りつけ、檻に入れた。市のすべての人の見せ物にするためである。二人はしばらくそこに置かれ、誰からも慰みものにされ、悪意や仕返しの的にされた。市の大物は、二人の身に起こることを、ずっと笑って見ていた。

けれども、二人は忍耐強く、『悪口をもって悪口に報いず、かえって、祝福をもって報いなさい』という教えを守った。悪い言葉には良い言葉を返し、危害には親切を返した。すると、市の人々の中でも、ほかの者よりよく物を見ていて偏見の少ない人々が、卑しい者たちをいさめ、とがめ始めた。卑しい者たちが、二人に絶えずひどい仕打ちをしていたからである。卑しい者たちは怒って、その人々に食ってかかった。お前たちも檻の中の男たちと同じくらい悪い、仲間に違いない、同じ目にあわせてやる、と言った。相手は言い返した。見たところ、あの男たちは静かで落ち着いていて、誰にも害を加えるつもりはない。この市で商いをしている者の中には、あの男たちよりも檻に入れられるべき者が大勢いる。いや、さらし台にさらされるべき者さえいる。そのあいだずっと、二人は彼らの前で、たいへん賢く落ち着いてふるまっていた。こうして双方でいろいろと言い合ったあげく、彼らは互いに殴り合いを始め、けが人も出た。

そこで、このあわれな二人はまた取り調べる者たちの前に引き出され、市で起きたこのたびの騒ぎの責任を問われた。二人はむごたらしく打たれ、鉄のかせをはめられ、鎖につながれたまま市じゅうを引き回された。ほかの者への見せしめと脅しのためである。誰も二人の味方をして口をきいたり、仲間に加わったりしないようにしたのである。けれども、クリスチャンと〈忠実〉は、いっそう賢くふるまった。浴びせられる不名誉と恥を、深い柔和と忍耐をもって受けた。そのため、市の人々のうち何人かが二人の味方になった。ほかの者に比べれば、わずかではあったが。これを見て、相手方はますます怒り狂い、ついに二人を死刑にすると決めた。そして、檻や鎖ではもう足りない、市の人々をはずかしめ、惑わした罪で死なければならない、と脅した。

見よ、虚栄の市を。巡礼者たちはそこで
鎖につながれ、傍らに立たされる。
私たちの主も、このようにここを通り
されこうべの丘で死なれたのだ。

そこで二人は、次の処置が決まるまで、また檻に戻された。人々は二人を檻に入れ、その足を足かせにしっかりとはめた。

ここでも二人は、誠実な友である伝道者から聞いたことを思い出した。伝道者が二人の身に起こると言っていたことが、そのとおりになった。それで二人は、自分たちの道と苦しみについて、いっそう確信を深めた。二人はまた、苦しみを受ける定めになった者こそいちばん良いものを得るのだ、と互いに慰め合った。だから、それぞれ心ひそかに、その栄誉が自分に与えられるようにと願った。けれども、二人はすべてを治めておられる方の、限りなく賢いはからいに身をゆだねた。そして、ほかの処置が下されるときまで、置かれた境遇のまま、大いに満ち足りてとどまっていた。

やがて都合のよい日時が決められ、二人は裁判に引き出された。有罪を言い渡すためである。その時が来ると、二人は敵の前に連れて来られ、罪状を問われた。裁判官の名は〈善嫌い〉卿といった。二人の起訴状は、形は少しずつ違っていたが、中身は同じだった。その内容はこうである。『この者たちは商売の敵であり、商売を乱す者である。町に騒動と分裂を引き起こした。また、君主の法を侮り、自分たちの最も危険な考えに一派を引き入れた』

さあ、忠実よ、男らしくあれ。あなたの神のために語れ。悪しき者の悪意も、そのむちも恐れるな。大胆に語れ。真理はあなたの側にある。真理のために死に、勝ち誇っていのちへと進め。

すると忠実が答え始めた。自分はただ、いと高き方よりもさらに高い方に逆らうものに逆らっただけだ、と。そして、こう言った。

「騒動についてですが、私は何も起こしていません。私自身、平和を好む者です。私たちの側についた人々は、私たちの真実と潔白を見て味方になったのです。その人々は、悪いほうから良いほうへ向きを変えただけです。それから、あなたがたの言う王は、私たちの主の敵ベルゼバブです。ですから私は、ベルゼバブにも、そのすべての使いたちにも、真っ向から逆らいます」

そこで布告が出された。主君である王のために被告に対して何か言うことのある者は、ただちに出頭して証言せよ、というのである。すると三人の証人がやって来た。すなわち、〈ねたみ〉、〈迷信〉、〈おべっか〉である。彼らは、被告を知っているかと尋ねられた。また、主君である王のために、被告に不利なことで何か言うことがあるかと尋ねられた。

まずねたみが進み出て、おおよそ次のように言った。

「閣下、私はこの男を長いあいだ知っております。この尊い法廷の前で、誓って証言いたします。この男は」

裁判官「待て。その者に誓いを立てさせよ」

そこで彼らは、ねたみに誓いを立てさせた。それから、ねたみは言った。

ねたみ「閣下、この男は、もっともらしい名前をしておりますが、我が国で最も卑劣な者の一人です。君主も民も、法も習慣も重んじません。それどころか、あらゆる手を尽くして、すべての人に不忠な考えを吹き込もうとしております。それをひっくるめて、信仰と聖さの原理と呼んでおります。具体的に申しますと、私自身、この男がこう断言するのを一度聞きました。キリスト教と我らが虚栄の町の習慣とは正反対で、決して相容れない、と。閣下、この男はこの言葉によって、我らの立派な行いを残らず罪に定めております。それだけでなく、そうする我ら自身をも罪に定めているのです」

すると裁判官は彼に言った。

裁判官「まだ言うことはあるか」

ねたみ「閣下、まだいくらでも申せますが、法廷を退屈させたくはございません。けれども、もし必要とあれば、ほかの紳士方が証言を終えたあとで、私の証言を付け足しましょう。この男を片づけるのに足りないものが、一つもないようにいたします」

そこで、ねたみは下がっているように命じられた。

次に彼らは迷信を呼び、被告を見るように命じた。そして、主君である王のために、被告に不利なことで何を言えるかと尋ねた。それから誓いを立てさせると、迷信は話し始めた。

迷信「閣下、私はこの男をよく知っているわけではありませんし、これ以上知りたいとも思いません。けれども、この男がひどく有害なやつだということはわかっております。先日、この町でこの男と話したことがあるからです。そのと

き、この男はこう言いました。我らの宗教はくだらない、そんなものではとうてい神に喜ばれることはできない、と。閣下、この言葉から必然的に何が導かれるかは、閣下がよくご存じでしょう。つまり、我らはいまだにむなしく礼拝しており、いまだに罪の中にいて、ついには地獄に落ちる、ということです。私の申し上げることは以上です」

次におべっかが誓いを立て、主君である王のために、被告に不利なことで知っていることを言うように命じられた。

おべっか「閣下、ならびに紳士の皆様、私はこの男を以前から知っております。この男が、口にしてはならないことを話すのを聞きました。この男は、我らの気高い君主ベルゼバブ様をののしりました。また、そのご立派なご友人方のことも、さげすんで話しました。そのご友人方のお名前は、〈古き人〉卿、〈肉の快楽〉卿、〈ぜいたく〉卿、〈虚栄心〉卿、老〈好色〉卿、〈強欲〉卿、そのほか我らの貴族の方々すべてです。そのうえ、この男はこうも言いました。もしすべての人がこの男と同じ考えになれば、この貴族の方々は、できることなら誰一人として、もはやこの町にいさせないようにするだろう、と。それだけではありません。閣下、今この男の裁判官に任じられているあなた様をも、この男は恐れげもなくののしりました。神を恐れぬ悪党と呼んだのです。ほかにも同じような悪口を並べて、我らの町の紳士方のほとんどに浴びせかけたのです」

おべっかが話し終えると、裁判官は被告に向かって言った。

「この背教者め、異端者め、裏切り者め。この正直な紳士方がお前に不利な証言をしたのを聞いたか」

忠実「私自身の弁明のために、少し話してもよろしいでしょうか」

裁判官「こやつめ、こやつめ。お前はもう生きている値打ちはない。この場ですぐに殺されて当然だ。だが、我らがお前にどれほど寛大であるかを、皆にわからせてやろう。卑しい背教者のお前が何を言うのか、聞いてやる」

忠実「では申します。第一に、ねたみの言ったことに答えます。私はこう言っただけです。神のみことばに真っ向から反する規則や法や習慣や人々は、キリスト教とは正反対である、と。もしこれが間違っているなら、私の誤りを示してください。私はここで、あなたがたの前で前言を取り消す用意があります」

「第二に、迷信と、私に対する彼の告発についてです。私はただこう言いました。神を礼拝するには、神から来る信仰が必要です。しかし、神のみこころが神から啓示されなければ、神から来る信仰はありえません。ですから、神の啓示にかなわないものを神の礼拝に持ち込むなら、それは人間の信仰によってしかできません。そして、そのような信仰は永遠のいのちの役には立たないのです」

「第三に、おべっかが言ったことについてです。ののしったなどという言い方はさておいて、こう申します。この町の君主は、この町やこの国よりも、地獄にいるほうがふさわしいのです。この紳士が名を挙げたその取り巻きの有象無象も同じです。どうか主が私をあわれんでくださいますように」

すると裁判官は陪審員たちに呼びかけた。陪審員たちはこのあいだずっと、そばに立って聞き、見ていたのである。

「陪審員諸君、この町でこれほどの大騒ぎを起こしたこの男を、諸君は見ている。また、これらの立派な紳士方がこの男に不利な証言をしたのを聞いた。この男の答弁と自白も聞いた。この男を絞首刑にするか、命を助けるかは、今や諸君の胸ひとつにかかっている。だが、我らの法について諸君に教えておくのがよいと思う」

「我らの君主のしもべである大王パロの時代に、一つの法令が作られた。異なる宗教の者たちが増えてパロの手に負えなくなるといけないので、その男の子らを川に投げ込め、というものだった（出エジプト一・二二）。また、君主のもう一人のしもべ、大王ネブカデネザルの時代にも法令が作られた。それによれば、王の金の像にひれ伏して拝まない者は、火の燃える炉に投げ込まれることになっていた（ダニエル三・六）。また、ダリヨスの時代にも法令が作られた。それによれば、一定の期間、王をおいてほかの神に祈る者は、獅子の穴に投げ入れられることになっていた（ダニエル六章）。さて、この反逆者は、これらの法の本質を破った。心の中で破っただけでも許しがたいのに、言葉と行いでも破ったのだ。だから、とうてい許すことはできない」

「パロの法は、まだ罪が明らかになっていないうちに、害を防ぐことを想定して作られたものだった。だが、ここでは罪が明らかになっている。第二と第三の

法について言えば、諸君の見たとおり、この男は我らの宗教に反論している。そして、すでに自白した反逆の罪によって、この男は死罪に値するのだ」

そこで陪審員たちは退席した。その名は、〈盲目〉、〈ろくでなし〉、〈悪意〉、〈色好み〉、〈放蕩〉、〈向こう見ず〉、〈高ぶり〉、〈敵意〉、〈うそつき〉、〈残酷〉、〈光嫌い〉、〈容赦なし〉である。彼らは一人一人、仲間内で被告に不利な評決を述べた。それから全員一致で、裁判官の前で有罪と答申することに決めた。まず仲間内で、陪審長の盲目が言った。

「この男が異端者であることは、はっきりと見えている」

次にろくでなしが言った。

「こんなやつは地上から取り除いてしまえ」

悪意も言った。

「そうだ。あいつの顔つきからして憎らしい」

色好みが言った。

「あいつにはどうにも我慢がならなかった」

放蕩も言った。

「俺もだ。あいつはいつも、俺の生き方を責めてばかりいたからな」

向こう見ずが言った。

「吊るせ、吊るせ」

高ぶりが言った。

「けちな小物め」

敵意が言った。

「あいつを見ると、胸がむかむかする」

うそつきが言った。

「あいつは悪党だ」

残酷が言った。

「絞首刑でもあいつには生ぬるい」

光嫌いが言った。

「あいつを片づけてしまおう」

最後に容赦なしが言った。

「全世界をくれると言われても、俺はあいつと和解などできない。だから、すぐにあいつを死罪に当たる有罪と答申しよう」

彼らはそのとおりにした。そこで忠実は、ただちに有罪を言い渡された。今いる場所から、もといた場所へ連れて行かれ、考えうる限り最もむごい死に方で処刑されることになったのである。

そこで彼らは、自分たちの法に従って処刑するために、忠実を連れ出した。まず彼をむち打ち、次にこぶしで殴り、次に小刀で肉を切り裂いた。そのあと石で打ち、さらに剣で突き刺した。そして最後に、杭に縛りつけて焼き、灰にしてしまった。こうして忠実は最期を遂げた。

私が見ていると、群衆の後ろに二頭立ての馬車がとまり、忠実を待っていた。敵が忠実を殺すやいなや、彼はその馬車に乗せられた。そしてすぐに、ラッパの響きと共に雲を突き抜けて運び上げられた。天の門へいちばん近い道を通ってである。一方、クリスチャンには猶予が与えられ、牢に戻された。こうして彼は、しばらくそこにとどまった。けれども、すべてを治めておられる方が、彼らの怒りの力をご自分の手に握っておられた。その方がうまく取り計らわれたので、クリスチャンはこのときは彼らの手を逃れ、自分の道を進んで行った。

勇敢な忠実よ、言葉にも行いにも、見事であった。

裁判官も、証人も、陪審員も

あなたに打ち勝つどころか、怒りをさらけ出しただけだ。

彼らが死んでも、あなたは代々に生き続ける。

クリスチャンは歩きながら、こう歌った。

「忠実よ、あなたは忠実に信仰を言いあらわした

あなたの主に。主と共にあなたは祝福を受ける

不忠実な者たちが、むなしい楽しみもろとも

地獄の苦しみの中で泣き叫ぶときに。

歌え、忠実よ、歌え。あなたの名を生かし続けよ

彼らはあなたを殺したが、あなたは今も生きているのだから」

（十七）下心とその仲間たち

私が夢の中で見ていると、クリスチャンは一人で出て行ったのではなかった。〈希望〉という名の人が、彼に加わったのである。希望は、クリスチャンと〈忠実〉が市で苦しみを受けたときの言葉とふるまいを見て、望みを抱くようになった。希望はクリスチャンと兄弟の契りを結び、旅の連れになりたいと言った。こうして、一人は真理をあかしするために死んだ。そしてもう一人が、その灰の中からよみがえり、クリスチャンの巡礼の連れとなった。

希望はまた、クリスチャンにこう言った。市の人々の中には、折を見てあとに続く者がまだ大勢いる、と。

私が見ていると、二人は市を出るとまもなく、前を歩いている一人の男に追いついた。その男の名は〈下心〉といった。二人は男に言った。

「どちらのご出身ですか。この道をどこまで行かれるのですか」

男は答えた。自分は〈甘言の町〉から来た、天の都へ行くところだ、と。けれども、名前は言わなかった。

クリスチャン「甘言の町からですか。あそこに善い人が住んでいるのでしょうか（箴言二六・二五）」

下心「ええ、そう願っていますよ」

クリスチャン「失礼ですが、何とお呼びすればよいでしょうか」

下心「私はあなたを存じませんし、あなたも私をご存じありません。この道を行かれるのでしたら、喜んでご一緒しましょう。そうでなければ、しかたがありません」

クリスチャン「甘言の町のことなら聞いたことがあります。たしか、豊かな町だという話でした」

下心「ええ、そのとおりですとも。あの町には、金持ちの親類がたくさんおります」

クリスチャン「立ち入ったことを伺うようですが、その親類の方々とはどなたですか」

下心「町のほとんど全部ですよ。とくに、〈変節〉卿、〈日和見〉卿、それに〈甘言〉卿がおります。甘言卿の先祖から、あの町の名が付いたのです。それから、〈如才なし〉、〈二股〉、〈何でも屋〉もそうです。私どもの教区の牧師の〈二枚舌〉は、私の母の実の兄弟でした。父方のですがね。実を申しますと、私は今では身分のある紳士になりました。けれども、曽祖父はただの船頭でした。片方を見ながら、反対の方へ漕ぐ船頭です。私も財産の大部分を、同じ商売で手に入れました」

クリスチャン「ご結婚はされているのですか」

下心「ええ。妻はたいへん徳の高い女で、母親も徳の高い女でした。妻は〈見せかけ〉夫人の娘です。ですから、たいへん立派な家柄の出なのです。しつけも申し分なく、王侯にも農夫にも、誰に対してもうまくふるまうすべを心得ております。たしかに私どもは、信仰の点で厳格な方々といくらか違っております。でも、それもほんの二つの小さな点だけです。第一に、私どもは決して風や潮に逆らいません。第二に、私どもがいちばん熱心になるのは、信仰が銀の靴をはいて歩くときです。日が照っていて、人々が信仰に拍手を送るときに、信仰と一緒に通りを歩くのが大好きなのです」

そこでクリスチャンは、連れの希望のほうへ少し寄って言った。

「ふと思ったのですが、この人は甘言の町の下心という人ではないでしょうか。もしそうなら、このあたりきっての悪党と道連れになっていることになります」

すると希望は言った。

「聞いてみてはどうですか。自分の名を恥じたりはしないはずです」

そこでクリスチャンは、またその男に追いついて言った。

「あなたは、世の中の誰よりも物事をよくご存じのような話し方をなさいますね。私の見当が外れていなければ、あなたが誰なのか、だいたい察しがつきます。あなたは甘言の町の下心さんではありませんか」

下心「それは私の名前ではありません。実はあだ名でして、私を嫌う人たちが付けたのです。ほかの善い人たちも、私より前に、それぞれのそしりを負ってきました。私も、これをそしりとして甘んじて負わなければなりません」

クリスチャン「けれども、人からその名で呼ばれるようなきっかけを、ご自分で作ったことはないのですか」

下心「とんでもない、とんでもない！　この名前で呼ばれるきっかけになったことといえば、せいぜいこれくらいです。私はいつも運よく、その時々の世の流れに考えが合ったのです。それがどんな流れであってもです。そして、たまたまそれで得をしてきました。そういうものが私に巡ってきたのなら、私はそれを祝福と思うことにします。だからといって、意地の悪い人たちにそしりを浴びせられるいわれはありません」

クリスチャン「やはりあなたは、私が噂に聞いた人だったのですね。思ったことを申し上げましょう。この名前は、あなたが私たちに思わせたいよりも、ずっとあなたにふさわしいのではないかと思います」

下心「まあ、そう思われるのなら、しかたがありません。それでも、仲間に入れていただければ、私がよい道連れだとおわかりになるでしょう」

クリスチャン「私たちと一緒に行くなら、風や潮に逆らって進まなければなりません。それはどうやら、あなたの考えに反するようですね。また、信仰が銀の靴をはいているときだけでなく、ぼろをまとっているときにも、信仰を自分のものと認めなければなりません。信仰が拍手を浴びて通りを歩くときだけでなく、鉄の鎖につながれているときにも、信仰の味方をしなければなりません」

下心「私の信仰に口出ししたり、指図したりしないでください。私の自由にさせてください。そのうえで、一緒に行かせてください」

クリスチャン「私の申し上げたことを、私たちと同じように行うのでなければ、もう一歩も一緒には行きません」

すると下心は言った。

「私は昔からの主義を決して捨てません。害がないうえに、得になるのですから。一緒に行けないのなら、あなたがたに追いつかれる前と同じようにするまでです。つまり、一人で行きます。そのうち、私の連れになるのを喜ぶ人が追いついてくるでしょう」

私が夢の中で見ていると、クリスチャンと希望は下心と別れ、先に立って距離をあけて進んだ。けれども、二人のうちの一人が振り返ると、三人の男が下心のあとからついて来るのが見えた。三人が追いつくと、下心はたいへん低くお辞儀をした。三人もまた挨拶を返した。男たちの名は、〈この世大事〉、〈金好き〉、〈ため込み〉といった。下心とは昔からの知り合いだった。子供のころの学校仲間で、〈握り屋〉という先生に教わったのである。握り屋は、北の〈むさぼり〉州にある〈もうけ好き〉という市場町の教師だった。この先生は、手に入れる術を教えた。暴力、ぺてん、へつらい、うそ、あるいは信仰の見せかけを使って手に入れるのである。この四人の紳士は、先生の術を大いに身につけていた。だから、四人はそれぞれ自分でも同じような学校を開けるほどだった。

さて、こうして互いに挨拶を済ませると、金好きが下心に言った。

「前を行くあの人たちは誰ですか」

クリスチャンと希望が、まだ見えるところにいたのである。

下心「遠い国から来た二人連れです。あの人たちなりのやり方で、巡礼に出ているのです」

金好き「それは残念！　なぜ待っていてくれなかったのでしょう。そうすれば、よい道連れになれたでしょうに。あの人たちも私たちも、そしてきっとあなたも、皆巡礼に出ているのですから」

下心「たしかにそうです。けれども、前を行く二人はひどく頑固なのです。自分たちの考えばかり大事にして、ほかの人の意見を軽んじます。どんなに信心深い人でも、何から何まで二人と考えが合わなければ、すっかり仲間から締め出してしまうのです」

ため込み「それはいけませんな。けれども、聖書にも義に過ぎる人のことが出てきます。そういう人は頑固さのあまり、自分たち以外のすべての人を裁いて罪

に定めてしまうのです。ところで、あなたがたが意見を異にしたのは、どんな点で、いくつあったのですか」

下心「それがですね、あの二人は強情にもこう決めてかかっているのです。どんな天気でも旅を急いで進むのが自分たちの務めだ、と。でも私は、風や潮を待とうという考えです。あの二人は、神のためなら一度にすべてを賭けようとします。でも私は、あらゆる好機をとらえて、自分のいのちと財産を守ろうとします。あの二人は、ほかの人が皆反対しても、自分たちの考えを曲げません。でも私は、時勢と自分の安全が許す範囲でだけ、信仰を持とうとします。あの二人は、信仰がぼろをまとってさげすまれているときに味方します。でも私は、信仰が金の靴をはき、日の光を浴び、拍手を受けて歩くときに味方するのです」

この世大事「そうとも、下心さん、その考えを守り通しなさい。わしに言わせれば、持っているものを守る自由がありながら、愚かにもそれを失うような者は、ばか者でしかない。ヘびのように賢くあろうではないか。『日の照るうちに干し草を作れ』と言うだろう。ほれ、蜂は冬のあいだじっとしていて、楽しみと得の両方があるときにだけ動き出す。神は雨を降らせることもあれば、日を照らすこともある。あの連中が愚かにも雨の中を進むというなら、それもよかろう。わしらは晴れた日を選んで進めばよいのだ。わしとしては、神のよい祝福をしっかり守れる信仰がいちばん好きだ。神はこの世のよいものを、わしらに授けてくださった。それなら、神のためにそれを手放さずにおけと望んでおられるに決まっている。理性に従う者なら、誰でもそう考えるはずだ。アブラハムもソロモンも、信仰を持ちながら富んだ。ヨブも、善い人は金をちりのように積み上げると言っている。ただし、その善い人が、前を行く連中のような者であってはならん。あんたの言うとおりの連中ならな」

ため込み「この件については、私たちは皆同じ考えのようですな。ですから、これ以上言うことはありません」

金好き「ええ、この件についてはもう言うことはありませんね。聖書も理性も信じない者は、自分の自由もわきまえず、自分の安全も求めないのです。ご覧のとおり、聖書も理性も私たちの側についていますからね」

下心「兄弟方、ご覧のとおり、私たちは皆巡礼に出ています。そこで、悪いことに心を向けずにすむように、一つ問題を出させてください。たとえば、ある人がいるとします。牧師でも商人でもかまいません。その人の前に、この世のよい祝福を得る好機が転がっているとします。ただし、それを得るには、ある方法をとるしかありません。以前は関わりもしなかった信仰上のいくつかの点について、少なくとも見かけの上で、並外れて熱心になることです。この人はその手段を使って目的を果たしても、なお正真正銘の正直者でいられるでしょうか」

金好き「ご質問の底にあるものはわかります。こちらの紳士方のお許しをいただいて、お答えしてみましょう。まず、牧師自身にかかわる問いとしてお答えします。ある牧師がいるとします。立派な人ですが、ごく小さな聖職禄しか持っていません。そして、もっと大きくて、はるかに実入りのよい禄に目をつけています。今まさにそれを得る好機もあります。ただし、そのためには、もっと勉強し、もっとたびたび熱心に説教しなければなりません。また、会衆の気質がそれを求めるので、自分の主義のいくつかを変えなければなりません。私に言わせれば、そうしてはいけない理由など見当たりません。召しを受けているならば、です。いや、それどころか、ほかにもいろいろ手を尽くしたってかまいません。それでも、その人は正直者でいられます。その理由は次のとおりです」

「第一に、より大きな禄を望むことは正当なことです。これに反論の余地はありません。神の摂理によって目の前に置かれたのですから。ですから、得られるものなら得てよいのです。いちいち良心に問うことはいりません」

「第二に、その禄を望む心があるので、彼はもっと勉強するようになり、もっと熱心に説教するようになります。こうして、彼はよりよい人間になるのです。そうです、自分の才能をいっそう磨くようになります。それは神のみこころにかなうことです」

「第三に、会衆の気質に合わせることについてです。会衆に仕えるために、自分の主義のいくつかを捨てるのですから、これは次のことを示しています。一つ、彼が自分を捨てる気質の持ち主であること。二つ、人当たりがよく、人を引きつけるふるまいができること。三つ、それゆえ牧師の務めにいっそうふさわしいこと」

「第四に、結論を申しますと、小さな禄を大きな禄に替える牧師は、そうしたからといって貪欲だと裁かれるべきではありません。むしろ、それによって才能も勤勉さも磨かれるのですから、召しに従う人と見なされるべきです。善を行うために与えられた好機を生かす人なのです」

「さて、問いの第二の部分、お話に出た商人についてです。その人がこの世でごく貧しい仕事しか持っていないとします。けれども、信心深くなれば、商売の具合がよくなるかもしれません。金持ちの妻をもらえるかもしれませんし、店にもっと多くの、もっとよい客がつくかもしれません。私に言わせれば、これを正当に行っていけない理由はありません。その理由は次のとおりです」

「第一に、信心深くなることは徳です。どんな手段で信心深くなろうとも、です」

「第二に、金持ちの妻をもらうことも、私の店の客を増やすことも、不正ではありません」

「第三に、信心深くなることでこれらを得る人は、自分が善い者になることで、善い人々から善いものを得るのです。つまり、善い妻と、善い客と、善いもうけが得られます。しかも、どれも信心深くなるという善いことによってです。ですから、これらすべてを得るために信心深くなるのは、善い、得になる計画なのです」

下心の問いに対する金好きのこの答えは、皆から大いにほめそやされた。そこで彼らは、全体として、これはまことに健全で有益な答えだと結論した。誰もこれに反論できないと思った。しかも、クリスチャンと希望はまだ声の届くところにいた。そこで彼らは、二人に追いついたらすぐ、この問いで攻めてやろうと申し合わせた。二人が先ほど下心に逆らったのだから、なおさらである。そこで彼らは二人に呼びかけた。二人は立ち止まり、彼らが来るまで待っていた。彼らは歩きながら、下心ではなく、老人のこの世大事に問いを出させようと決めた。少し前の別れぎわ、下心と二人のあいだには激しい言い合いがあった。この世大事が相手なら、二人の答えにそのほとぼりは残らないだろうと考えたのである。

こうして彼らは互いに近づいた。短い挨拶のあと、この世大事はクリスチャンとその連れに問いを出した。そして、答えられるものなら答えてみよ、と言った。

するとクリスチャンは言った。

「信仰の赤ん坊でも、そんな問いには一万でも答えられます。ヨハネによる福音書の六章にあるとおり、パンのためにキリストに従うのは正しくありません。それなら、キリストと信仰を隠れみのにして、この世を手に入れて楽しむのは、どれほど忌まわしいことでしょう！　こんな考えを持っているのは、異邦人、偽善者、悪魔、魔術師のほかにはありません」

「第一に、異邦人です。ハモルとシケムは、ヤコブの娘と家畜を欲しがりました。けれども、割礼を受けるほかに、それらを手に入れる道はないとわかりました。そこで仲間たちに言ったのです。『彼らが割礼を受けているように、もしわれわれのうちの男子が皆、割礼を受けるなら、彼らの家畜と財産とすべての獣とは、われわれのものとなるではないか』。彼らが手に入れようとしたのは、娘と家畜でした。そして、それを手に入れるために信仰を隠れみのにしたのです。その話をすべて読んでごらんなさい（創世記三四・二〇～二三）」

「第二に、偽善者のパリサイ人も、この信仰の持ち主でした。長い祈りは見せかけで、やもめたちの家を食い倒すのがねらいでした。そして神から、もっときびしいさばきを受けました（ルカ二〇・四六～四七）」

「第三に、悪魔であるユダも、この信仰の持ち主でした。財布のために信心深くなり、その中身を自分のものにしようとしました。けれども、彼は滅び、捨てられました。まさに滅びの子となったのです」

「第四に、魔術師シモンもこの信仰の持ち主でした。聖霊を受けて、それで金をもうけようとしたのです。そして、ペテロの口から、それにふさわしい宣告を受けました（使徒八・一九～二二）」

「第五に、私はこう思わずにいられません。この世のために信仰を手に取る者は、この世のために信仰を投げ捨てるでしょう。ユダが信心深くなったとき、この世を目当てにしていたのは確かです。それと同じく確かに、ユダは同じこの世のために、信仰と自分の主を売りました。ですから、あなたがたのように、この問いにそうしてよいと答えるのも、その答えを正しいと認めるのも、異邦人のすべてです。

ること、偽善者のすること、悪魔のすることです。あなたがたは、自分の行いに応じて報いを受けるでしょう」

すると彼らは互いに顔を見合わせて立ちつくした。クリスチャンに返す言葉がなかったのである。希望もクリスチャンの答えが正しいことを認めた。こうして、一同はすっかり黙りこんでしまった。下心とその仲間たちはたじろいで、あとに下がった。クリスチャンと希望に先に行かせるためである。そこでクリスチャンは連れに言った。

「この人たちは、人の宣告にさえ立ち向かえないのです。それなら、神の宣告にはどうするでしょうか。土の器に責められて黙ってしまうのなら、焼きつくす火の炎にとがめられるときには、どうするでしょうか」

（十八）安楽の野とデマスの銀山

クリスチャンと〈希望〉は、また彼らを引き離して進んだ。やがて二人は、〈安楽〉という心地よい野に着いた。二人はそこを、大いに満ち足りて歩いた。けれども、その野は狭かったので、すぐに通り過ぎてしまった。野の向こうの端には、〈利得〉という小さな丘があった。その丘には銀山があった。以前この道を通った人々の中には、銀山が珍しいので、わき道にそれて見に行った者たちがいた。けれども、穴の縁に近づきすぎると、足もとの地面は見かけと違ってもろく、崩れ落ちた。こうして、その人たちは死んだ。また、そこで体を損ない、死ぬ日まで元の自分に戻れなかった者もいた。

私が夢の中で見ていると、道から少し外れた、銀山の向かいに、デマスが立っていた。紳士然として、通りかかる人に、来て見るようにと呼びかけていた。デマスはクリスチャンとその連れに言った。

「おーい、こちらへ寄っていきなさい。よいものをお見せしましょう」

クリスチャン「道からそれてまで見る値打ちのあるものとは、いったい何ですか」

デマス「ここに銀山があって、何人かが宝を掘っています。来てごらんなさい。少し骨を折るだけで、たっぷり財産をこしらえられますよ」

希望「行って見てみましょう」

クリスチャン「私は行きません。この場所のことは前から聞いています。ここで大勢の人が死んだことも聞いています。それに、あの宝は、それを求める者にとってわなです。巡礼の妨げになるのですから」

そこでクリスチャンは、デマスに呼びかけて言った。

「ここは危ない場所ではありませんか。これまで大勢の人の巡礼を妨げてきたのではありませんか（ホセア九・六）」

デマス「不注意な人でなければ、たいして危なくはありませんよ」

けれども、そう言いながら、デマスは顔を赤らめた。

クリスチャン「あちらへは一歩も寄らずに、このまま道を進みましょう」

希望「請け合ってもいいですが、〈下心〉が追いついてきて、私たちと同じように誘われたら、きっと見にそれていきますよ」

クリスチャン「そうに決まっています。あの人の主義が、そちらへ向かわせるのですから。百のうち九十九まで、あの人はあそこで死ぬでしょう」

デマス「それでも、こちらへ見に来ないのですか」

クリスチャン「デマスよ、あなたはこの道の主の、まっすぐな道に敵対する者です。あなたは自分がわき道にそれたために、王に仕える裁き人の一人から、すでに罪に定められています（第二テモテ四・一〇）。それなのに、なぜ私たちまで、同じさばきに陥れようとするのですか。それに、私たちが少しでもわき道にそれれば、私たちの主である王は、必ずそれをお聞きになります。そして、私たちが御前に大胆に立ちたいと願うその場所で、私たちを恥じ入らせるでしょう」

デマスはまた叫んで、自分もあなたがたの兄弟の一人だ、と言った。そして、少し待ってくれるなら、自分も一緒に歩いて行こう、と言った。

クリスチャン「あなたの名は何というのですか。私が今呼んだ名ではありませんか」

デマス「ええ、私の名はデマスです。アブラハムの子です」

クリスチャン「あなたのことは知っています。ゲハジはあなたの曽祖父で、ユダはあなたの父です。あなたはその足跡を踏んできました（第二列王五・二〇、マタイ二六・一四～一五、二七・一～五）。あなたのしていることは、悪魔のような悪だくみにすぎません。あなたの父は裏切り者として首をつりました。あなたもそれ以上の報いには値しません。覚悟しておきなさい。私たちは王のもとに着いたら、あなたのこのふるまいを王に申し上げます」

こうして二人は自分たちの道を進んだ。そのころには、下心とその仲間たちが、また見えるところまで来ていた。彼らはデマスに一度手招きされただけで、

そちらへ渡って行った。さて、彼らは穴の縁からのぞきこんで、落ちたのだろうか。それとも、掘りに下りて行ったのだろうか。あるいは、底にいつもわき上がる毒気で、息がつまったのだろうか。そのことは、私にもはっきりとはわからない。けれども、これだけは見届けた。彼らは二度とこの道で見かけられなかったのである。そこでクリスチャンは歌った。

「下心と銀のデマスは、気が合う
一方が呼べば、もう一方は駆けつける
その利得の分け前にあずかるために。こうして二人は
この世にとどまり、それより先へは進まない」

（十九）ロトの妻

私が見ていると、この野のちょうど向こう側で、巡礼者たちはある場所に来た。そこには、街道のすぐわきに、古い記念碑が立っていた。その形が奇妙だったので、二人とも見て気にかかった。それは、女が柱の形に変えられたもののように見えたのである。そこで二人は立ち止まり、それをじっと見つめていた。けれども、しばらくは、それをどう考えたらよいのかわからなかった。とうとう〈希望〉が、柱の頭のところに、見なれない字体で何か書いてあるのを見つけた。ただ、彼には学がなかった。そこで、学問のあるクリスチャンを呼んで、意味が読み取れるかどうか見てもらった。クリスチャンが来て、しばらく文字をつなぎ合わせてみると、それは『ロトの妻のことを思い出しなさい』という言葉だとわかった。そこで彼は、それを連れに読んで聞かせた。そのあと二人は、これはロトの妻が変えられた塩の柱に違いない、と結論した。彼女は、助かるためにソドムから出て行くとき、むさぼりの心でうしろを顧みたので、そうなったのである（創世記一九・二六）。この突然の驚くべき光景がきっかけとなって、二人は次のような話をした。

クリスチャン「ああ、兄弟よ、これは折にかなった光景です。デマスが〈利得〉の丘を見に来るようにと私たちを誘ったあとで、ちょうどよく現れてくれました。もし私たちが、デマスの望んだとおりに、またあなたがその気になっていたとおりに、あちらへ行っていたらどうでしょう。私たちもこの女のように、後から来る人々の見せ物にされていたかもしれません」

希望「あんなに愚かだったことが悔やまれます。今ロトの妻のようになっていないのが、不思議なくらいです。彼女の罪と私の罪とで、どこが違うのでしょうか。彼女はうしろを振り返っただけです。けれども私は、見に行きたいと望んだのです。ただ恵みをほめたたえます。そして、このようなことが一度でも私の心にあったことを、恥じ入るばかりです」

クリスチャン「ここで見たことを心に留めておきましょう。これから先の助けになりますから。この女は、一つのさばきは逃れました。ソドムの滅びでは倒れなかったのです。けれども、ご覧のとおり、別のさばきで滅ぼされました。塩の柱に変えられたのです」

希望「そのとおりです。彼女は私たちにとって、警告にも見せしめにもなるでしょう。警告とは、彼女の罪を避けよ、ということです。見せしめとは、この警告によっても思いとどまらない者に、どんなさばきが下るかを示すしるしです。コラ、ダタン、アビラムと、その罪のうちに滅びた二百五十人も、同じように、ほかの人々が気をつけるためのしるしとなり、戒めの鏡となりました（民数記一六・九～一〇）。けれども何よりも、私には一つのことが不思議でなりません。デマスとその仲間が、どうしてあんなに平然と向こうに立って、あの宝を探していられるのか、ということです。この女は、そうした宝を惜しんでうしろを振り返っただけで、塩の柱に変えられました。道から一歩でも踏み出したとは、聖書には書かれていないのです。しかも彼女は、さばきを受けて、彼らのいる場所から見えるところで見せしめにされているのです。目を上げさえすれば、彼らは彼女を見ないわけにはいきません」

クリスチャン「まったく驚くべきことです。それは、彼らの心がもう救いようのないものになっている証拠です。彼らにぴったりのたとえは、裁判官の目の前ですりを働く者か、絞首台の下で巾着を切る者くらいしか思いつきません。ソドムの人々は『はなはだしい罪びと』であったと言われています。彼らが『主に対して』、つまり主の目の前で罪を犯したからです。しかも、主が彼らに示された慈しみにもかかわらず、そうしたのです（創世記一三・一三）。そのころソドムの地は、昔のエデンの園のようだったのですから（創世記一三・一〇）。そのため、主はなおさらねたみを起こされました。そして、天からの主の火が燃やせる限りの激しい災いを、彼らに下されたのです。ですから、こう結論するのが最も

道理にかなっています。この人たちのように主の目の前で罪を犯す者は、最も厳しいさばきを受けるほかありません。しかも彼らは、そうしないよう戒めるために絶えず目の前に置かれている見せしめを、ものともせずに罪を犯しているのです」

希望「確かに、おっしゃるとおりです。けれども、あなたも、とりわけ私も、この見せしめにされなかったとは、何というあわれみでしょう！　このことは、神に感謝し、御前に恐れをいだき、いつもロトの妻のことを思い出すきっかけを、私たちに与えてくれます」

（二十）いのちの水の川

それから私が見ていると、二人は道を進んで、ある心地よい川に来た。ダビデ王はこれを『神の川』と呼び、ヨハネは『いのちの水の川』と呼んだ（詩篇六五・九、黙示録二二章、エゼキエル四七章）。さて、二人の道は、ちょうどこの川の岸に沿って続いていた。そこでクリスチャンとその連れは、大きな喜びをもってここを歩いた。また、川の水も飲んだ。その水は心地よく、旅に疲れた二人の心を生き返らせた。そのうえ、この川の両岸には緑の木々が立ち並び、あらゆる種類の実を結んでいた。その木々の葉は薬になった。二人はこの木々の実も大いに喜んだ。また、その葉を食べた。食べ過ぎの害や、旅で血をほてらせる者がかかりやすい、ほかの病を防ぐためである。川の両側にはまた牧場があり、ゆりの花で見事に飾られていた。そこは一年中緑だった。二人はこの牧場で横になって眠った。ここでは安らかに伏すことができたからである（詩篇二三・二、イザヤ一四・三〇）。目が覚めると、二人はまた木々の実を摘み、また川の水を飲み、それからまた横になって眠った。こうして幾日も幾夜も過ごした。それから二人は歌った。

「見よ、水晶のようなこの流れが、すべるように行くさまを
街道のかたわらで、巡礼者たちを慰めようと。
緑の牧場は、かぐわしい香りのうえに
ごちそうをも彼らに与える。そして、この木々の
実が、いや葉までもが、どれほど良いものかを知る者は
すぐにも持ち物をみな売りはらい、この畑を買うだろう」

やがて二人は、先へ進もうという気になった。旅はまだ終わっていなかったからである。そこで二人は食べ、飲み、そして出発した。

（二十一）わき道の牧場と巨人絶望

私が夢の中で見ていると、二人がまだそれほど進まないうちに、川と道がしばらく分かれてしまった。二人はそれをずいぶん残念に思った。けれども、道から外れる勇気はなかった。川から離れた道は荒れていた。二人の足は、長い旅のために傷みやすくなっていた。そのため、巡礼者たちはその道に堪えがたくなった（民数記二一・四）。そこで二人は、歩きながらも、もっと良い道があればと願い続けた。さて、少し先の道の左手に牧場があり、そこへ越えて入るための踏み越し段があった。その牧場は〈わき道の牧場〉と呼ばれていた。クリスチャンは連れに言った。

「この牧場が私たちの道に沿って続いているのなら、越えて入りましょう」

そこで彼は、踏み越し段のところへ見に行った。すると、柵の向こう側に、道に沿って小道が通っていた。クリスチャンは言った。

「願ったとおりです。ここなら、いちばん楽に歩けます。さあ、〈希望〉さん、越えて行きましょう」

希望「でも、もしこの小道が私たちを道から外れさせたら、どうしますか」

クリスチャン「そんなことはないでしょう。ご覧なさい、道のわきに沿って続いているではありませんか」

そこで希望は連れに説き伏せられて、彼について踏み越し段を越えた。小道に入ってみると、足にはとても楽だった。そのうえ、前を見ると、自分たちと同じように歩いている男が目に入った。その名を〈過信〉といった。二人は後ろから呼びかけて、この道はどこへ通じているのかと尋ねた。男は答えた。

「天の門へだ」

クリスチャンは言った。

「ほら、言ったとおりではありませんか。これで、私たちが正しいことがわかるでしょう」

そこで二人は男の後について行き、男は二人の前を進んだ。ところが、やがて夜になり、あたりはひどく暗くなった。そのため、後ろを行く二人は、前を行く男を見失ってしまった。

前を行っていた過信は、行く手の道が見えなかった。そして、深い穴に落ちた。それは、その土地の君主が、思い上がった愚か者を捕らえるために、わざと掘らせておいたものだった。過信は落ちた拍子に、粉々に砕けてしまった（イザヤ九・一六）。

クリスチャンとその連れには、彼の落ちる音が聞こえた。そこで二人は、どうしたのかと呼びかけた。けれども、答える者はなく、ただうめき声が聞こえるだけだった。希望は言った。

「私たちは今、どこにいるのでしょうか」

連れは黙っていた。自分が希望を道から外れさせてしまったのではないかと案じていたのである。そのうちに雨が降り出し、雷が鳴り、稲妻がまことに恐ろしく光った。水かさもみるみる増していった。

希望は心の中でうめいて言った。

「ああ、自分の道を離れずにいればよかった！」

クリスチャン「この小道が私たちを道から外れさせるなんて、誰が思ったでしょうか」

希望「私は初めから、それを恐れていました。それで、あのように控えめにご注意したのです。もっとはっきり言いたかったのですが、あなたは私より年上ですから」

クリスチャン「兄弟よ、気を悪くしないでください。あなたを道から外れさせ、こんなに差し迫った危険に遭わせてしまって、申し訳なく思っています。どうか許してください、兄弟よ。悪い心からしたのではないのです」

希望「安心してください、兄弟よ。あなたを許します。それに、このことがきっと私たちの益になると信じてください」

クリスチャン「あわれみ深い兄弟がいっしょにいてくれて、うれしく思います。けれども、ここで立ち止まっていてはいけません。引き返してみましょう」

希望「でも兄弟よ、私に先に行かせてください」

クリスチャン「いいえ、よろしければ、私に先に行かせてください。もし危険があれば、私が真っ先にそれに遭うようにしたいのです。私のせいで、二人とも道から外れてしまったのですから」

希望「いいえ、先に行かせるわけにはいきません。あなたは心が乱れているので、また道を外れてしまうかもしれませんから」

そのとき、二人を励ますように、ある人の声が聞こえた。『大路に、あなたの通って行った道に心を留めよ。帰れ』と言っていた（エレミヤ三一・二一）。けれども、もう水かさがひどく増していた。そのため、引き返す道はたいへん危険だった。私はこう思った。道の中にいるときに道から外れるのは、道の外にいるときに道に戻るよりもたやすいのだ、と。それでも二人は、思い切って引き返そうとした。しかし、あまりに暗く、水があまりに高かったので、戻る途中で九度も十度もおぼれそうになった。

その夜は、どれほど手を尽くしても、踏み越し段まで戻ることはできなかった。そこでとうとう、小さな雨よけを見つけて、夜が明けるまでそこに座っていることにした。けれども、疲れていたので、眠り込んでしまった。さて、二人が寝ている場所から遠くないところに、〈疑いの城〉と呼ばれる城があった。その持ち主は巨人〈絶望〉だった。二人が眠っていたのは、その地所の中だったのである。巨人は朝早く起きて、自分の畑を歩き回っていた。そして、クリスチャンと希望が自分の地所で眠っているのを見つけて捕らえた。巨人は恐ろしい無愛想な声で二人を起こし、どこから来たのか、自分の地所で何をしているのかと尋ねた。二人は、自分たちは巡礼者で、道に迷ったのだと答えた。すると巨人は言った。

「お前らはゆうべ、勝手に俺の地所に踏み込んで、寝そべっていた。だから、俺といっしょに来てもらうぞ」

二人はしかたなくついて行った。巨人のほうが強かったのである。それに、二人には言い分もほとんどなかった。自分たちに落ち度があるとわかっていたからである。巨人は二人を追い立てて城に入れ、ひどく暗い地下牢に放り込んだ。そこは汚く、二人の気が滅入るほどの悪臭がした。こうして二人は、水曜日の朝から土曜日の夜まで、そこに横たわっていた。一切れのパンも、一滴の飲み物も、明かりもなく、具合を尋ねてくれる者もなかった。二人はひどい有様で、友人や知人からも遠く離れていた（詩篇八八・一八）。この場所で、クリスチャンの悲しみは二重だった。二人がこの苦境に陥ったのは、彼の軽はずみな言葉のせいだったからである。

巡礼者たちは今、肉を満たそうとして
その安楽を求める。だが、ああ、そのために
なんと新たな嘆きへ、また身を投じることか！

肉を喜ばせようとする者は、自らを滅ぼす。

さて、巨人絶望には妻がいた。その名を〈不安〉といった。巨人は床に就くと、自分のしたことを妻に話した。二人の囚人を捕らえ、自分の地所に踏み込んだかどで地下牢に投げ込んだ、というのである。それから、この二人をこの先どうしたらよいかと妻に尋ねた。妻は、それはどんな者たちで、どこから来て、どこへ向かっているのかと尋ねた。巨人はそれを話した。すると妻は、朝起きたら容赦なく打ちたたくように、と夫に勧めた。そこで巨人は起きると、野りんごの木で作ったすさまじいこん棒を手にして、地下牢の二人のところへ下りて行った。そしてまず、犬にでも向かうように二人をののしった。二人は一言も気にさわることを言わなかったのに、そうしたのである。それから二人に襲いかかり、恐ろしいほど打ちたたいた。二人は身を守ることも、床の上で寝返りを打つこともできなかった。これが済むと、巨人は引き上げ、二人をそこに残した。二人がみじめさを嘆き、苦しみの中で悲しむに任せたのである。こうしてその日一日、二人はため息と激しい嘆きのうちに過ごすほかなかった。

次の夜、妻は夫と二人のことをさらに話し合った。そして、二人がまだ生きていると知ると、自分で命を絶つよう二人に勧めなさい、と夫に助言した。朝にな

ると、巨人は前と同じように無愛想な様子で二人のところへ行った。そして、前の日に打った傷で二人がひどく痛んでいるのを見ると、こう言った。

「お前らは、もうこの場所から出られそうにない。だから、さっさと自分でけりをつけるのが唯一の道だ。刃物でも、首つり縄でも、毒でもいい。こんなに苦しみばかりの人生を、なぜわざわざ生きようとするのか」

けれども二人は、どうか放してほしいと頼んだ。すると巨人は恐ろしい顔つきで二人をにらみ、飛びかかってきた。発作さえ起こさなければ、きっと自分の手で二人を片付けていただろう。ところが、巨人は発作を起こしてしまった。日が照っていると、ときどき発作を起こすのである。そのため、しばらく手が使えなくなり、巨人は引き上げた。そして前と同じように、どうするか考えさせるために、二人をそこに残した。そこで囚人たちは、巨人の勧めに従うのがよいかどうか、二人で相談した。こうして二人は話し始めた。

クリスチャン「兄弟よ、どうしたらよいでしょうか。今こうして生きているのは、みじめなことです。私としては、このまま生きるのがよいのか、ひと思いに死ぬのがよいのか、わかりません。私の魂は、生きるよりも息の止まることを願います。この地下牢よりも、墓のほうが楽です（ヨブ七・一五）。巨人の言うとおりにしましょうか」

希望「確かに、今の私たちの有様は恐ろしいものです。このままいつまでもここにいるより、死んだほうが、私にもずっとありがたいでしょう。けれども、考えてみましょう。私たちが向かっている国の主は、『殺してはならない』と言われました。ほかの人を殺すことさえ禁じられているのです。まして、自分を殺せという巨人の勧めに従うことは、なおさら禁じられています。それに、ほかの人を殺す者は、その人の体を殺すにすぎません。しかし、自分を殺す者は、体と魂とを一度に殺すのです。そのうえ、兄弟よ、あなたは墓の中の安らぎのことを言われます。ですが、人殺しが必ず行く地獄のことを忘れたのですか。『人殺しはすべて、そのうちに永遠のいのちをとどめてはいない』のですから。それから、もう一度考えてみましょう。すべての権限が巨人絶望の手にあるわけではありません。私の知る限りでは、私たちと同じように彼に捕らえられながら、その手から逃れた人たちもいるのです。世界を造られた神が、巨人絶望を死なせてくださらないとも限りません。あるいは、巨人がいつか私たちに鍵をかけ忘れるかもしれません。あるいは、近いうちに、また私たちの前で発作を起こして、手足が利かなくなるかもしれません。もしまたそういうことが起こったら、私は男らしく勇気を奮い起こして、何としても彼の手から逃れようと心に決めています。前にそうしなかったのは、愚かでした。けれども、兄弟よ、ともかく辛抱して、しばらく耐え忍びましょう。幸いにも解き放たれるときが来るかもしれません。ただ、自分で自分を殺す者にだけはならないようにしましょう」

希望はこう言って、さしあたり兄弟の心を和らげた。こうして二人は、その日も暗闇の中で、悲しく痛ましい有様のまま、いっしょに過ごした。

さて、夕方近くになると、巨人はまた地下牢に下りて行った。囚人たちが自分の勧めに従ったかどうか見るためである。ところが行ってみると、二人は生きていた。とはいえ、ただ生きているというだけだった。パンも水もなく、また打たれたときの傷のために、もうほとんど息をすることしかできなかったのである。それでも、二人は生きていた。巨人はそれを見てひどく怒った。そして二人に、俺の勧めに背いたからには、生まれてこなかったほうがましだったと思うような目に遭わせてやる、と言った。

これを聞いて二人はひどく震えた。私の見たところ、クリスチャンは気を失ったようだった。けれども、少し正気に返ると、二人はまた巨人の勧めについて話し合った。それに従うのがよいかどうか、ということである。今度もクリスチャンは、そうするほうに傾いているようだった。しかし希望は、二度目の答えを次のように返した。

希望「兄弟よ、あなたがこれまでどれほど勇敢だったか、覚えていないのですか。アポリュオンもあなたを打ち砕くことはできませんでした。死の陰の谷で聞いたこと、見たこと、感じたことのすべても、あなたを打ち砕けなかったのです。あなたはすでに、どれほどの苦難と恐怖と驚きをくぐり抜けてきたことでしょう。それなのに今は、恐れるばかりなのですか。ご覧のとおり、私もあなたといっしょに地下牢にいます。私は生まれつき、あなたよりずっと弱い人間です。この巨人は、あなたと同じように私をも傷つけました。私の口からもパンと水を断ちました。私もあなたといっしょに、光のないところで嘆いているので

す。けれども、もう少し辛抱しましょう。虚栄の市で、あなたがどんなに男らしくふるまったかを思い出してください。あなたは鎖も檻も、血を流す死さえも恐れませんでした。クリスチャンたる者が、こんな恥ずかしい姿をさらすのはふさわしくありません。せめてそれを避けるためにも、できる限り辛抱して耐えましょう」

さて、また夜になった。巨人とその妻が床に就くと、妻は囚人たちのことを尋ねた。巨人の勧めに従ったかどうか、というのである。巨人は答えた。

「しぶとい悪党どもだ。自分で始末をつけるくらいなら、どんな苦しみにでも耐えるほうを選ぶというんだ」

すると妻は言った。

「あしたあいつらを城の中庭に連れて行って、あんたがもう片付けた連中の骨やどくろを見せておやりよ。そして、一週間もしないうちに、前の仲間と同じように八つ裂きにしてやると思い込ませるんだね」

そこで朝になると、巨人はまた二人のところへ行った。そして城の中庭に連れ出し、妻に言われたとおり、骨やどくろを見せた。巨人は言った。

「こいつらも、かつてはお前らと同じ巡礼者だった。そしてお前らと同じように、俺の地所に踏み込んだ。だから俺は、気が向いたときに八つ裂きにしてやった。十日もしないうちに、お前らも同じ目に遭わせてやる。さあ、穴蔵へ戻れ」

そう言って、巨人は地下牢に着くまでずっと二人を打ちたたいた。こうして二人は、土曜日も一日中、前と同じように痛ましい有様で横たわっていた。さて、夜になり、不安夫人と夫の巨人が床に就くと、夫婦はまた囚人たちのことを話し合った。年寄りの巨人は、打っても勧めても二人を片付けられないのを、不思議に思っていた。すると妻が答えた。

「あたしが思うに、あいつらは誰かが助けに来るという望みを持って生きているんだよ。それとも、錠前を開ける道具を隠し持っていて、それで逃げ出せると思っているのかもしれないね」

巨人は言った。

「お前、そう思うか。それなら、朝になったらあいつらの体を調べてやろう」

さて、土曜日の真夜中ごろ、二人は祈り始め、夜明け近くまで祈り続けた。夜が明ける少し前、善良なクリスチャンは、半ば我を忘れたように、激しい調子でこう叫び出した。

「ああ、私は何という愚か者でしょう！　自由に歩いて出られるのに、こんな悪臭のする地下牢に寝ているとは。私のふところには、〈約束〉という鍵があります。これなら、疑いの城のどんな錠でも開けられるに違いありません」

すると希望が言った。

「それは良い知らせです。兄弟よ、それをふところから取り出して、試してみてください」

そこでクリスチャンは、鍵をふところから取り出し、地下牢の戸で試し始めた。鍵を回すと、かんぬきが外れた。戸はたやすく開き、クリスチャンと希望は二人とも外に出た。次に彼は、城の中庭に通じる外の戸のところへ行き、その戸も鍵で開けた。そのあと、鉄の門のところへ行った。そこも開けなければならなかったからである。その錠はおそろしく固かったが、それでも鍵で開いた。二人は急いで逃げようと、門を押し開けた。ところが門は、開くときにひどくきしんだ。その音で巨人絶望が目を覚ました。巨人は急いで起きて、囚人たちを追いかけようとした。けれども、手足が言うことを聞かなかった。また発作に襲われたのである。そのため、どうしても二人を追うことはできなかった。それから二人は進んで行き、ふたたび王の大路に出た。そこは巨人の支配の及ばないところだったので、二人は安全だった。

さて、踏み越し段を越えると、二人は相談した。あとから来る人たちが巨人絶望の手に落ちないように、この踏み越し段のところで何をしたらよいか、ということである。そして、そこに柱を一本立て、その側面に次の言葉を刻むことにした。『この踏み越し段の向こうは、疑いの城への道である。その城を守る巨人絶望は、天の国の王を侮り、その聖なる巡礼者たちを滅ぼそうとしている』。そのため、あとから来た多くの人が、書かれたことを読んで危険を免れた。これが済むと、二人は次のように歌った。

「道から外れた私たちは、そこで思い知った
禁じられた地を踏むのが、どういうことかを。
あとから来る者は、気をつけるがよい

不注意から、私たちと同じ目に遭わぬように。
地所を侵したかどで、囚人とならぬように

その城は疑い、その名は絶望という者の」

（二十二）喜びの山々

それから二人は進んで行き、〈喜びの山々〉に着いた。この山々は、前に述べたあの丘の主のものである。そこで二人は山に登り、庭や果樹園、ぶどう畑や泉を眺めた。二人はそこで水を飲み、体を洗い、ぶどう畑の実も思うままに食べた。さて、この山々の頂には羊飼いたちがいて、羊の群れを飼っていた。羊飼いたちは大路のわきに立っていた。そこで巡礼者たちは彼らのところへ行き、杖に寄りかかった。疲れた巡礼者が道で誰かと立ち話をするときには、よくそうするものである。そして二人は尋ねた。

「この喜びの山々は、どなたのものですか。ここで草を食べている羊は、どなたの羊ですか」

今、二人は喜びの山々に登る
そこには羊飼いたちがいて、二人に勧める
心ひかれるものと、戒めとなるものとを。
巡礼者は、信仰と恐れによって揺るがずに保たれる。

羊飼い「この山々は〈インマヌエルの地〉で、インマヌエルの都が見えるところにあります。羊もこの方のものです。この方は、羊のためにいのちを捨てられました（ヨハネ一〇・一一）」

クリスチャン「これは天の都へ行く道ですか」

羊飼い「まさにその道を歩いておられます」

クリスチャン「そこまで、どのくらいの道のりですか」

羊飼い「本当にそこへたどり着く人のほかは、誰にとっても遠すぎる道のりです」

クリスチャン「その道は安全ですか。それとも危険ですか」

羊飼い「安全であるべき人には安全です。しかし、罪びとはそこでつまずきます（ホセア一四・九）」

クリスチャン「この場所には、旅の途中で疲れて弱った巡礼者を助けてくれるものがありますか」

羊飼い「この山々の主は、旅人をもてなすことを忘れてはならない、と私たちに命じておられます。ですから、この地の良いものは、みなあなたがたの前にあります（ヘブル一三・一〜二）」

また私が夢の中で見ていると、羊飼いたちは、二人が旅人だと知ると、今度は自分たちから、どこから来たのか、どうやってこの道に入ったのか、どうやってここまで道を守り通したのか、と尋ねた。二人はほかの場所でしたのと同じように答えた。ここへ来ようと歩み出す者は多いが、この山々に顔を見せる者はわずかしかいないからである。羊飼いたちは二人の答えを聞いて喜んだ。そして、二人をたいへん愛情深く見つめて言った。

「喜びの山々へようこそ」

さて、この羊飼いたちの名は、〈知識〉、〈経験〉、〈用心〉、〈誠実〉といった。羊飼いたちは二人の手を取って自分たちの天幕に連れて行き、ちょうど用意してあったものをふるまった。そして、さらにこう言った。

「しばらくここに留まってください。私たちと親しくなっていただきたいのです。それにもまして、この喜びの山々の良いものを味わって、心を慰めていただきたいのです」

二人は、喜んで留まると答えた。そして、夜もすっかり更けていたので、その晩は休んだ。

それから私が夢の中で見ていると、朝になって、羊飼いたちはクリスチャンと〈希望〉に声をかけ、いっしょに山を歩こうと誘った。そこで二人は羊飼いたちと出かけ、しばらく歩いた。どちらを見ても、心地よい眺めが広がっていた。すると羊飼いたちは互いに言った。

「この巡礼者たちに、不思議なものをいくつか見せてはどうでしょう」

そうしようと決まると、羊飼いたちはまず二人を〈誤り〉という丘の頂に連れて行った。その丘は、向こう側がひどく切り立っていた。羊飼いたちは二人に、ふもとを見下ろすように言った。クリスチャンと希望が見下ろすと、ふもとに何人もの男が倒れていた。頂から落ちて、粉々に砕けていたのである。クリスチャンは言った。

「これはどういうことですか」

羊飼いたちは答えた。

「ヒメナオとピレトに耳を貸して、体の復活の信仰について誤りに陥った人たちのことを、聞いたことはありませんか（第二テモテ二・一七〜一八）」

二人は、はい、と答えた。すると羊飼いたちは言った。

「この山のふもとに砕けて倒れているのが、その人たちです。ご覧のとおり、今日まで葬られずにいます。ほかの人たちへの見せしめとして、高く登りすぎたり、この山の崖っぷちに近づきすぎたりしないよう、気をつけさせるためです」

それから私が見ていると、羊飼いたちは二人を別の山の頂に連れて行った。その山の名は〈警戒〉という。羊飼いたちは二人に、遠くを見るように言った。二人がそうすると、そこにある墓の間を、何人もの男が行ったり来たりしているのが見えたように思った。男たちは目が見えないのだとわかった。ときどき墓につまずき、また墓の間から抜け出せずにいたからである。クリスチャンは言った。

「これはどういうことですか」

すると羊飼いたちは答えた。

「この山々の少し下で、この道の左手に、牧場へ入る踏み越し段があったのを見ませんでしたか」

二人は、はい、と答えた。すると羊飼いたちは言った。

「あの踏み越し段から、まっすぐ〈疑いの城〉へ通じる小道があります。その城を守っているのは巨人〈絶望〉です」

羊飼いたちは、墓の間にいる男たちを指さして続けた。

「あの人たちも、かつては今のあなたがたと同じように巡礼の旅をしていて、あの同じ踏み越し段まで来ました。ところが、そのあたりで正しい道が荒れていたので、道を離れてあの牧場へ入ることを選びました。そして巨人絶望に捕らえられ、疑いの城に投げ込まれました。しばらく地下牢に入れられていたあと、とうとう巨人に目をえぐり取られました。そして、あの墓の間に連れて行かれ、今日までそこをさまようままにされているのです。こうして、『悟りの道を離れる人は、死人の集会の中におる』という知者の言葉が成就したのです（箴言二一・一六）」

クリスチャンと希望は顔を見合わせ、涙をあふれさせた。けれども、羊飼いたちには何も言わなかった。

それから私が夢の中で見ていると、羊飼いたちは二人を谷間の別の場所に連れて行った。そこには、丘の中腹に戸があった。羊飼いたちはその戸を開け、二人に中をのぞくように言った。二人がのぞいてみると、中はひどく暗く、煙が立ちこめていた。また、火の燃えるようなごうごうという音と、苦しめられている者たちの叫び声が聞こえたように思った。硫黄のにおいもしたように思った。クリスチャンは言った。

「これはどういうことですか」

羊飼いたちは答えた。

「これは地獄へのわき道です。偽善者たちが入って行く道です。すなわち、エサウのように長子の権利を売る者、ユダのように主を売る者、アレキサンデルのように福音を汚す者、アナニヤとその妻サッピラのように偽り欺く者たちです」

すると希望は羊飼いたちに言った。

「この人たちもみな、今の私たちと同じように、巡礼者の姿をしていたのですね。そうではありませんか」

羊飼い「そうです。しかも、長いあいだその姿を保っていました」

希望「結局はみじめに捨てられてしまったとはいえ、この人たちは、生きているうちに巡礼の道をどこまで進んだのでしょうか」

羊飼い「この山々より遠くまで行った者もいれば、ここまで来なかった者もいます」

すると巡礼者たちは互いに言った。

「私たちは、力ある方に力を求めて叫ばなければなりませんね」

羊飼い「そうです。そして力をいただいたら、それを使わなければならないでしょう」

このころには、巡礼者たちは先へ進みたいと思っていた。羊飼いたちも、そうさせたいと思っていた。そこで一同は、山々の端のほうへいっしょに歩いて行った。すると羊飼いたちは互いに言った。

「ここで巡礼者たちに、天の都の門を見せてあげましょう。私たちの遠眼鏡をのぞく腕があればですが」

巡礼者たちは、喜んでその申し出を受けた。そこで羊飼いたちは二人を、〈澄明〉という高い丘の頂に連れて行き、遠眼鏡を渡してのぞかせた。二人はのぞこうとした。けれども、羊飼いたちに最後に見せられたもののことを思い出して、手が震えた。そのため、遠眼鏡をしっかりのぞくことができなかった。それでも、門のようなものと、その場所の栄光のいくらかが見えたように思った。それから二人はそこを離れ、こう歌った。

「こうして羊飼いたちによって、秘密が明かされる
ほかのすべての人々には隠されている秘密が。
それなら羊飼いたちのもとへ来るがよい、見たいと願うなら
深いこと、隠れたこと、奥義に満ちたことを」

二人が出発しようとすると、羊飼いの一人が、道筋を記した書きつけを渡した。二人目は、〈へつらい者〉に気をつけるようにと言った。三人目は、〈魔法の地〉で眠り込まないようにと注意した。そして四人目は、神の祝福を祈って二人を送り出した。こうして私は夢から覚めた。

（二十三）無知

私はまた眠って、ふたたび夢を見た。すると、あの同じ二人の巡礼者が、大路に沿って山々を下り、都のほうへ向かって行くのが見えた。さて、この山々の少し下の左手には、〈うぬぼれの国〉がある。その国から、巡礼者たちの歩いている道へ、曲がりくねった小道が一本通じていた。ここで二人は、その国から出てきた、たいそう威勢のいい若者に出会った。その名を〈無知〉といった。そこでクリスチャンは、どこから来て、どこへ行くのかと彼に尋ねた。

無知「はい、私はあそこの、少し左手のほうにある国で生まれました。これから天の都へ行くところです」

クリスチャン「でも、門のところでどうやって入れてもらうつもりですか。そこでは難しいことがあるかもしれませんよ」

無知「ほかの人たちと同じようにして入りますよ」

クリスチャン「でも、門を開けてもらうために、そこで何を見せられるのですか」

無知「私は主のみこころを知っていますし、これまで正しく暮らしてきました。誰にでも、払うべきものは払っています。祈りもするし、断食もするし、十分の一もささげるし、施しもしています。それに、行こうとしている所を目指して、自分の国を出てきたのですよ」

クリスチャン「でも、あなたはこの道の初めにある狭い門から入って来ませんでした。あの曲がりくねった小道を通って、ここへ入って来たのです。ですから、心配なのです。あなたが自分のことをどう思っていても、清算の日が来たら、都に入れてもらえるどころか、盗人であり強盗であるという罪を負わされるのではないでしょうか」

無知「お二人とも、私にはまったく見ず知らずの方です。あなたがたのことは知りません。ご自分の国の宗教に従っていればいいでしょう。私は私の国の宗教に従います。万事うまくいくと思っていますよ。それに、あなたがたの言うその門が私たちの国からずいぶん遠いことは、世間の誰もが知っています。私たちの地方には、そこへ行く道を知っている人さえ一人もいないでしょう。もっとも、知っていようがいまいが、どうでもいいのです。ご覧のとおり、私たちの国からは、きれいで気持ちのいい緑の小道が下りてきて、いちばんの近道でこの道に通じているのですから」

クリスチャンは、この男がうぬぼれて、自分を知恵ある者と思い込んでいるのを見て取った。そこで〈希望〉にささやいた。

「あの人よりも、かえって愚かな人のほうに望みがあります（箴言二六・一二）」

さらにクリスチャンは言った。

「『愚者は道を行く時、思慮が足りない。自分の愚かなことをすべての人に告げる』とあるとおりです（伝道一〇・三）。どうしましょうか。もっとあの人と話しますか。それとも、今は追い越して行って、もう聞いたことをあの人に考えさせておきましょうか。そして、あとでまた立ち止まってあの人を待ち、少しずつでも、あの人のためになることができるかどうか、試してみましょうか」

すると希望が言った。

「無知には、しばらく思い巡らさせよう
語られたことを。そして拒まずにいてほしい
良い勧めを受け入れることを。さもないと
何よりの益について、無知のままでいるだろう。
神は言われる、無知の民は
自ら造った者であっても、救わない、と」

希望「それに、あの人に一度に全部言ってしまうのは、良くないと思います。よろしければ、今はあの人を追い越して行き、あとで、あの人が受けとめられる程度に話してみましょう」

（二十四）小信の話

こうして二人は進んで行き、〈無知〉はそのあとからついて来た。さて、二人が無知を少し引き離したころ、とても暗い小道に入った。そこで二人は、一人の男に出会った。七人の悪鬼が七本の丈夫な縄でその男を縛り、二人が丘の中腹で見たあの戸のところへ連れ戻そうとしていた（マタイ一二・四五、箴言五・二二）。善良なクリスチャンは震えだした。連れの〈希望〉も同じだった。それでも、悪鬼たちがその男を引いて行くとき、クリスチャンは、知っている男かどうか見てみた。〈背教の町〉に住んでいた〈離反〉という者かもしれない、と彼は思った。けれども、顔ははっきり見えなかった。男は、捕まった盗人のようにうなだれていたからである。男が通り過ぎてから、希望がその後ろ姿を見送った。すると、背中に一枚の紙が貼ってあるのが見えた。そこには『放縦な信仰告白者、滅びに定められた背教者』と書いてあった。

するとクリスチャンは連れに言った。

「今、思い出しました。このあたりで、ある善良な人に起きたことを聞いたのです。その人の名は〈小信〉といいました。けれども善良な人で、〈真心の町〉に住んでいました。こういうことです。この通り道の入り口に、〈広い道の門〉から下ってくる小道があります。〈死人小路〉と呼ばれています。そこではよく人殺しがあるので、そう呼ばれているのです。この小信は、今の私たちと同じように巡礼の旅をしていて、たまたまそこに座って眠り込んでしまいました。ちょうどそのとき、広い道の門から、たくましい三人のならず者がその小道を下って来ました。名前は〈弱気〉、〈不信〉、〈罪責〉といい、三人兄弟でした。彼らは小信を見つけると、大急ぎで駆け寄って来ました。善良な小信は、ちょうど目を覚まして、旅を続けようと起き上がるところでした。三人はそろって彼のところへ来て、脅し文句を並べて、止まれと命じました。これを聞いて、小信の顔は紙のように真っ白になりました。戦う力も、逃げる力もありませんでした。すると弱気が言いました。『財布を出せ』。けれども、小信はすぐには出そうとしませんでした。お金を失いたくなかったからです。すると不信が駆け寄り、小信のポケットに手を突っ込んで、銀貨の入った袋を引っぱり出しました。小信は『泥棒だ、泥棒だ！』と叫びました。そのとたん、罪責が手に持っていた大きなこん棒で、小信の頭を殴りました。その一撃で、小信は地面にばったり倒れました。そして、そのまま血を流して倒れ、今にも出血で死にそうでした。そのあいだ、盗賊たちはそばに立っていました。けれども、とうとう、道を誰かがやって来る音を聞きつけました。それが〈確信の町〉に住む〈大恵み〉という者ではないかと恐れて、三人は一目散に逃げ出しました。そして、この善良な人を置き去りにしたのです。しばらくして、小信は正気づきました。そして起き上がり、どうにかこうにか道を進んで行きました。これがその話です」

希望「でも、盗賊たちは、彼の持ち物を一つ残らず奪ったのですか」

クリスチャン「いいえ。宝石をしまってある場所は、まったく探られませんでした。ですから、宝石はそのまま持っていました。けれども、聞いたところでは、善良な小信は、失ったもののことでひどく苦しみました。盗賊たちが、彼の路銀のほとんどを奪ってしまったからです。先ほど言ったように、奪われなかったのは宝石でした。ほかに小銭も少し残っていましたが、旅の終わりまで持ちそうにはありませんでした（第一ペテロ四・一八）。それどころか、私の聞いたことが間違っていなければ、彼は生きるために、物乞いをしながら進まなければなりませんでした。宝石は売ってはならないものだったからです。けれども、物乞いをし、できることは何でもしても、よく言うように、残りの道のりのほとんどを、すきっ腹を抱えて歩いたのです」

希望「でも、天の門で入れてもらうための証書を奪われなかったのは、不思議ではありませんか」

クリスチャン「不思議です。けれども、それを奪われなかったのは、彼がうまく立ち回ったからではありません。彼は襲われてうろたえ、何かを隠す力も知恵

もありませんでした。ですから、盗賊たちがその尊いものを見逃したのは、彼の努力というより、神の恵み深い摂理によるものだったのです」

希望「でも、宝石を奪われなかったのは、彼にとって慰めだったに違いありません」

クリスチャン「それをしかるべく用いていれば、大きな慰めになったかもしれません。けれども、私にこの話をしてくれた人たちによれば、彼は残りの道のりのあいだ、それをほとんど用いなかったそうです。お金を奪われて、うろたえていたからです。実際、残りの旅の大部分は、それを忘れていました。そのうえ、それを思い出して慰められ始めると、いつも、失ったものについての新たな思いがまた押し寄せてきました。そして、その思いがすべてを飲み込んでしまったのです（第一ペテロ一・九）」

希望「ああ、かわいそうな人です。それは大きな悲しみだったに違いありません」

クリスチャン「悲しみですか。ええ、まさに悲しみです！　彼のような目にあったら、私たちの誰にとってもそうだったのではありませんか。見知らぬ土地で強盗にあい、そのうえ傷まで負わされたのですから。かわいそうに、悲しみのあまり死ななかったのが不思議なくらいです。聞いたところでは、彼は残りの道のりのほとんどを、悲しげで苦々しい嘆きばかりをまき散らしながら歩いたそうです。追いついてきた人にも、道で追いついた人にも、誰にでも話して聞かせました。どこで、どんなふうに強盗にあったのか。誰がやったのか。何を失ったのか。どんなふうに傷を負い、かろうじて死を免れたのか」

希望「でも、困り果てて、宝石のいくつかを売るか質に入れるかして、旅の助けにしようとしなかったのは不思議です」

クリスチャン「あなたは、今になってもまだ頭に卵の殻をつけている者のような話し方をしますね。何のために、それを質に入れなければならないのですか。また、誰に売れるというのですか。彼が強盗にあったあの地方一帯では、彼の宝石は何の値打ちもないとされていました。また、彼はその地方から与えられるような助けを求めてはいませんでした。それに、天の都の門で宝石がなくなっていたら、彼はそこで受け継ぐはずのものから締め出されていたでしょう。彼はそのことをよく知っていました。それは彼にとって、一万人の盗賊が現れて悪事を働くことよりも悪いことだったでしょう」

希望「兄弟よ、どうしてそんなに手きびしいのですか。エサウは長子の権利を売りました。それも一杯の食のためにです。その長子の権利は、エサウのいちばん大事な宝石でした。エサウがそうしたのなら、なぜ小信も同じようにしてはいけないのですか（ヘブル一二・一六）」

クリスチャン「たしかにエサウは長子の権利を売りました。ほかにも、そうする人は大勢います。そして、そうすることで、あの卑しい男と同じく、最大の祝福から自分を締め出してしまうのです。けれども、エサウと小信とは区別しなければなりません。二人の置かれた状態も区別しなければなりません。エサウの長子の権利は、型にすぎませんでした。けれども、小信の宝石はそうではありませんでした。エサウは自分の腹を神としていました。けれども、小信はそうではありませんでした。エサウの飢えは、肉の欲にありました。小信の飢えはそうではありませんでした。そのうえ、エサウには、自分の欲を満たすことより先は見えませんでした。『わたしは死にそうだ。長子の特権などわたしに何になろう』と彼は言ったのです（創世記二五・三二）。けれども小信は、わずかな信仰しか持たない定めではありましたが、そのわずかな信仰によって、そんな無茶なことをせずにすみました。そして、エサウが長子の権利を売ったように宝石を売るのではなく、宝石の値打ちを見て、大切にすることができたのです。エサウに信仰があったとは、どこにも書いてありません。わずかな信仰さえなかったのです。信仰がなくて肉に逆らうものがない人のうちでは、肉だけが支配します。そういうところでは、その人が長子の権利も、魂も、何もかも、それも地獄の悪魔に売り渡したとしても、不思議ではありません。そういう人は、雌ろばと同じです。その欲情を、だれもとどめることができません（エレミヤ二・二四）。彼らは欲に心を向けると、どれほど高くついても、それを手に入れずにはいません。けれども、小信は違う気質の人でした。彼の心は神のことに向いていました。彼の暮らしの糧は、霊的なもの、上から来るものでした。ですから、そういう気質の人が、むなしいもので心を満たすために、宝石を売るでしょうか。たとえ買う人がいたとしても、何のために売るのでしょうか。わらで腹を満たすために、一文で

も払う人がいるでしょうか。山鳩を説き伏せて、からすのように死肉を食べて生きさせることができるでしょうか。信仰のない者は、肉の欲のために、持っているものを質に入れたり、抵当に入れたり、売ったりします。そのうえ、自分自身まで丸ごと売り渡してしまいます。けれども、信仰を、救いの信仰を持っている人は、たとえそれがわずかでも、そんなことはできません。ですから、兄弟よ、ここがあなたの思い違いなのです」

希望「認めます。けれども、あなたのきついお言葉には、もう少しで腹を立てるところでした」

クリスチャン「いや、私はただ、あなたを元気のいい種類の鳥のひなにたとえただけです。頭に殻をつけたまま、人の通らない道をあちこち走り回るひなです。けれども、そのことはおいて、いま論じている事柄をよく考えましょう。そうすれば、あなたと私のあいだは万事うまくいきます」

希望「でも、クリスチャンさん、その三人の男は、ただの臆病者の集まりにすぎないと私は心から思います。そうでなければ、道をやって来る人の物音を聞いただけで、あんなふうに逃げ出したでしょうか。どうして小信は、もっと大きな勇気を奮い起こさなかったのでしょうか。せめて一度はやり合ってみて、どうにもならなくなってから降参してもよかったと思うのです」

クリスチャン「彼らが臆病者だと言った人は大勢います。けれども、試練のときに本当にそうだとわかった人はわずかです。大きな勇気など、小信にはまったくありませんでした。兄弟よ、あなたの話からすると、もしあなたがその当人だったら、一度やり合って、それから降参するだけのことでしょう。実際、彼らが遠く離れている今でさえ、あなたの意気込みはその程度なのです。もし彼らが小信の前に現れたように、あなたの前に現れたら、あなたも考え直すことになるかもしれません」

「それから、もう一度考えてください。彼らは雇われの盗賊にすぎません。彼らは底知れぬ所の王に仕えています。その王は、必要とあれば自ら助けに来ます。その声は、ほえたける獅子のようです（第一ペテロ五・八）。私自身も、この小信と同じように襲われたことがあります。それは恐ろしいことでした。この三人の悪党が私に襲いかかってきました。私がクリスチャンらしく抵抗し始めると、彼らがひと声呼んだだけで、彼らの主人が乗り込んできたのです。ことわざにあるように、私のいのちは一文の値打ちもないところでした。けれども、神のおぼしめしで、私は確かな鎧を身に着けていました。そうです。それでも、そんなに身を固めていても、男らしくふるまうのはつらい仕事でした。その戦いで何が私たちを待ち受けているかは、自分で戦場に出たことのある人にしかわかりません」

希望「なるほど。でも彼らは、大恵みが道にいると思っただけで逃げ出したではありませんか」

クリスチャン「そのとおりです。彼らも彼らの主人も、大恵みが姿を見せただけで、たびたび逃げ出しました。それも不思議ではありません。大恵みは王の勇士なのですから。けれども、小信と王の勇士とは別だと、あなたも認めるでしょう。王の民がみな王の勇士だというわけではありません。また、試されたときに、勇士のような武勇を示せるわけでもありません。小さな子供が、ダビデのようにゴリアテを扱えると考えるのは正しいでしょうか。みそさざいに牛の力があると考えるのはどうでしょうか。強い人もいれば、弱い人もいます。大きな信仰を持つ人もいれば、小さな信仰しか持たない人もいます。この人は弱い人の一人でした。それで、追い詰められて負けたのです」

希望「来たのが本当に大恵みだったら、あの連中も思い知ったでしょうに」

クリスチャン「もし大恵みだったとしても、手を焼いたかもしれません。言っておかなければなりませんが、大恵みは武器を扱うのがすばらしく上手です。相手を剣の切っ先より内に寄せつけずにいるかぎり、彼らを相手に十分うまく戦えますし、これまでもそうしてきました。けれども、もし懐に入り込まれたら、相手が弱気や不信や、もう一人の者であっても、まず間違いなく足をすくわれて倒されてしまいます。そして、ご存じのとおり、人は倒されてしまったら何ができるでしょうか」

「大恵みの顔をよく見る人は、そこに傷あとや切り傷があるのに気づくでしょう。それを見れば、私の言うことがすぐにわかります。そればかりか、大恵みが戦いのさなかに『わたしたちは生きる望みをさえ失ってしまった』と言ったと聞いたこともあります。このたくましいならず者どもとその仲間は、ダビデをどれ

ほどうめかせ、嘆かせ、叫ばせたことでしょう！　ヘマンもヒゼキヤも、その時代には勇士でしたが、彼らに襲われると、懸命に奮い立たなければなりませんでした。それでも、彼らにさんざんに打ちのめされたのです。ペテロも、あるとき、自分に何ができるか試してみようとしました。彼を使徒の長と言う人もいます。けれども、ならず者どもは彼を手玉に取り、とうとう、つまらない女中を恐れるようにさせてしまったのです」

「そのうえ、彼らの王は、口笛ひとつで駆けつけます。呼べば聞こえるところに必ずいます。そして、彼らが劣勢になると、できることなら王自ら助けに来ます。この王について、こう言われています。『つるぎがこれを撃っても、きかない、やりも、矢も、もりも用をなさない。これは鉄を見ること、わらのように、青銅を見ること朽ち木のようである。弓矢もこれを逃がすことができない。石投げの石もこれには、わらくずとなる。こん棒もわらくずのようにみなされ、投げやりの響きを、これはあざ笑う』（ヨブ四一・二六～二九）。こういうとき、人に何ができるでしょうか。たしかに、いつでもヨブの馬を手に入れることができ、それを乗りこなす腕と勇気があれば、目ざましいことができるかもしれません。『その首は力で装われている。これはいなごのようにおびえて跳ねることがない。その鼻あらしの威力は恐ろしい。これは谷であがき、その力に誇り、みずから出ていって武器に向かう。これは恐れをあざ笑って、驚くことなく、つるぎをさけて退くことがない。矢筒はその上に鳴り、やりと投げやりと、あいきらめく。これはたけりつ、狂いつ、地をひとのみにし、ラッパの音が鳴り渡っても、立ちどまることがない。これはラッパの鳴るごとにハアハアと言い、遠くから戦いをかぎつけ、隊長の大声およびときの声を聞き知る』（ヨブ三九・一九～二五）」

「けれども、あなたや私のような歩兵は、決して敵に出会いたいなどと願わないようにしましょう。ほかの人が打ち負かされたと聞いても、自分ならもっとうまくやれるかのように誇らないようにしましょう。自分の男らしさを思って、いい気になるのもやめましょう。そういう者は、試されると、たいてい最悪の目にあうからです。先ほど話したペテロがその証人です。彼は大口をたたきました。そうです、たたいたのです。むなしい心にそそのかされるまま、ほかの誰よりもうまくやり、主のためにしっかり立つと言いました。けれども、あの悪党どもにあれほど打ち負かされ、追い詰められた者がほかにいたでしょうか」

「ですから、王の大路でこのような強盗があったと聞いたら、私たちのするべきことが二つあります」

「第一に、武具を身に着けて出かけ、必ず盾を持って行くことです。レビヤタンにあれほど激しく打ちかかった者がレビヤタンを屈服させられなかったのは、盾がなかったからです。実際、盾がなければ、あの者は私たちを少しも恐れません。ですから、心得のある人がこう言っています。『その上に、信仰のたてを手に取りなさい。それをもって、悪しき者の放つ火の矢を消すことができるであろう』（エペソ六・一六）」

「第二に、王に護衛を願い求めるのもよいことです。いや、王ご自身がいっしょに行ってくださるように願うのです。王がともにいてくださったので、ダビデは死の陰の谷にいたときも喜ぶことができました。モーセは、神なしに一歩でも進むより、その場で死ぬほうを選ぼうとしました（出エジプト三三・一五）」

「ああ、兄弟よ、王がいっしょに行ってくださりさえすれば、私たちを囲んで立ち構えるちよろずの民を、どうして恐れる必要があるでしょうか（詩篇三・五～八、二七・一～三）。けれども、王がいなければ、高ぶる助け手たちも、殺された者の中に伏し倒れるのです（イザヤ一〇・四）」

「私はと言えば、これまでにも戦いを経験してきました。それでも、最も善いお方のいつくしみによって、ご覧のとおり生きています。けれども、自分の男らしさを誇ることなど何もできません。もうこんな攻撃に出会わずにすめば、うれしいのですが。とはいえ、私たちはまだすべての危険を越えたわけではないと思います。それでも、獅子も熊もまだ私を食い尽くしてはいません。ですから、次の割礼なきペリシテびとからも、神は私たちを救い出してくださると望んでいます」

それからクリスチャンは歌った。

「かわいそうな小信よ！　盗賊どもの手にかかったのか
奪われたのか。これを覚えよ。信じて

さらに信仰を得る者は、そのとき勝利する
一万人を相手にしても。さもなくば三人にも勝てまい」

（二十五）へつらい者

こうして二人は進んで行き、〈無知〉はそのあとからついて来た。やがて二人は、ある場所にさしかかった。そこでは、別の道が二人の道に入り込んでいた。その道も、二人の行くべき道と同じようにまっすぐ延びているように見えた。どちらの道もまっすぐに見えたので、二人はどちらを行けばよいかわからなかった。そこで二人は立ち止まって考えた。二人が道のことを思案していると、肌の黒い男がやって来た。男はとても白い衣をまとっていた。そして、なぜそこに立っているのかと二人に尋ねた。二人は、天の都へ行くところですが、どちらの道を行けばよいかわからないのです、と答えた。すると男は言った。

「私について来なさい。私もそこへ行くところなのです」

そこで二人は、今しがた大路に入り込んで来たその道を、男について行った。その道は少しずつ曲がっていった。そして二人を、行きたいと願っていた都から、どんどん遠ざけていった。まもなく、二人は都に背を向けて進んでいた。それでも二人は男について行った。けれども、やがて、二人が気づかないうちに、男は二人を網の囲みの中へ導き入れた。二人は網にすっかり絡まって、どうしてよいかわからなくなった。そのとき、黒い男の背中から白い衣が落ちた。それで二人は、自分たちがどこにいるのかを知った。二人はしばらくのあいだ、そこに倒れたまま泣き叫んでいた。自分たちでは抜け出せなかったからである。

するとクリスチャンは連れに言った。

「今になって、自分の誤りがわかりました。羊飼いたちは、〈へつらい者〉に気をつけるようにと言ったではありませんか。知者の言葉のとおりのことを、私たちは今日、身をもって知りました。『その隣り人にへつらう者は、彼の足の前に網を張る』（箴言二九・五）」

希望「羊飼いたちは、道筋を記した書きつけもくれました。道をもっと確かに見つけられるようにです。それなのに、私たちはそれを読むことも忘れていました。そして、不法な者の道を避けることもしませんでした。この点では、ダビデのほうが私たちより賢かったのです。彼はこう言っています。『人のおこないの事をいえば、あなたのくちびるの言葉によって、わたしは不法な者の道を避けました』（詩篇一七・四）」

こうして二人は、網の中で嘆き悲しみながら倒れていた。とうとう二人は、一人の輝く者がこちらへやって来るのを見つけた。その者は、細い縄で作ったむちを手にしていた。輝く者は二人のいるところまで来ると、どこから来たのか、そこで何をしているのか、と尋ねた。二人は、自分たちはシオンへ向かう哀れな巡礼者です、と答えた。そして、こう言った。

「白い衣を着た黒い男に、道から連れ出されてしまったのです。その男が、自分もそこへ行くのだから、ついて来なさいと言ったのです」

すると、むちを持った者は言った。

「それはへつらい者です。にせ使徒で、光の天使に擬装していたのです（箴言二九・五、ダニエル一一・三二、第二コリント一一・一三～一四）」

そして網を裂き、二人を外に出してやった。それから二人に言った。

「私について来なさい。あなたがたを、もう一度道に戻しましょう」

こうして輝く者は、二人がへつらい者について行こうとして離れた道へ、二人を連れ戻した。それから二人に尋ねた。

「ゆうべはどこに泊まりましたか」

二人は、〈喜びの山々〉の羊飼いたちのところです、と答えた。すると輝く者は、羊飼いたちから道筋を記した書きつけをもらわなかったか、と尋ねた。二人は、もらいました、と答えた。すると輝く者は言った。

「それなら、どちらへ行くか迷って立ち止まったとき、書きつけを取り出して読まなかったのですか」

二人は、読みませんでした、と答えた。なぜか、と輝く者は尋ねた。二人は、忘れていたのです、と言った。さらに輝く者は、羊飼いたちがへつらい者に気を

つけるようにと言わなかったか、と尋ねた。二人は答えた。

「言われました。でも、あの言葉巧みな人がそうだとは、思いもしなかったのです（ローマ一六・一八）」

それから私が夢の中で見ていると、輝く者は二人に伏すように命じた。二人がそうすると、輝く者は二人を激しく懲らしめた。二人の歩むべき良い道を教えるためである（申命記二五・二）。懲らしめながら、輝く者は言った。

「すべてわたしの愛している者を、わたしはしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって悔い改めなさい」（第二歴代六・二六～二七、黙示録三・一九）

それが済むと、輝く者は二人に、道を進んで行くように命じた。また、羊飼いたちのほかの指示にもよく気をつけるようにと言った。二人は、輝く者の数々の親切に感謝した。そして、正しい道を静かに歩んで行きながら、こう歌った。

「来たれ、この道を歩む者よ
見よ、道を踏み外した巡礼者のなりゆきを。
彼らは絡みつく網に捕らえられた
良い忠告をうかつにも忘れたために。
たしかに彼らは救い出された。けれども見よ
そのうえ、むち打たれもしたのだ。これを戒めとせよ」

（二十六）無神論者

しばらくすると、二人は遠くに一人の男がいるのに気づいた。男はひとりきりで、大路をそっとこちらへ歩いて来るところだった。するとクリスチャンは連れに言った。

「向こうに、シオンに背を向けた人がいます。私たちのほうへやって来ます」

希望「見えます。今度は用心しましょう。あの人も〈へつらい者〉だといけませんから」

男はだんだん近づいて来て、とうとう二人のところまでやって来た。男の名は〈無神論者〉といった。無神論者は二人に、どこへ行くのかと尋ねた。

クリスチャン「シオンの山へ行くところです」

すると無神論者は大笑いした。

クリスチャン「何を笑っているのですか」

無神論者「お前たちがあんまりものを知らないのを見て、笑っているのさ。こんなにうんざりする旅をわざわざ引き受けて、しかも骨折り損のくたびれもうけになりそうなんだからな」

クリスチャン「どうしてです。私たちが迎え入れてもらえないとでも思うのですか」

無神論者「迎え入れてもらえる、だと！　お前たちが夢見ているような場所など、この世界のどこにもありはしない」

クリスチャン「でも、来たるべき世にはあります」

無神論者「俺も故郷にいたころ、お前たちが今言っているようなことを聞いた。それを聞いて、見に出かけたのさ。それから二十年、この都を探してきた。だが、旅立った最初の日と同じで、何ひとつ見つからない（エレミヤ二二・一二、伝道の書一〇・一五）」

クリスチャン「私たちは二人とも、そういう場所が見つかると聞きましたし、信じてもいます」

無神論者「俺だって、故郷にいたころに信じていなかったら、こんなに遠くまで探しに来はしなかった。だが、何も見つからない。そんな場所があるのなら、見つかっていたはずだ。俺はお前たちよりも遠くまで探しに行ったのだからな。だから俺は引き返す。そして、あのころ捨てたもので、また元気を取り戻すとするよ。今にして思えば、ありもしないものを望んで捨ててしまったのだからな」

そこでクリスチャンは、連れの〈希望〉に言った。

「この人の言ったことは本当でしょうか」

希望「気をつけてください。この人はへつらい者の一人です。前にも、ああいう連中の言うことに耳を貸して、どんな目にあったか思い出してください。シオンの山がないですって！　私たちは〈喜びの山々〉から、都の門を見たではありませんか。それに、私たちは今、信仰によって歩むはずではありませんか。先へ進みましょう。むちを持った人に、また追いつかれるといけませんから（第二コリント五・七）。本当なら、この教えは、あなたが私に教えてくださるべきものでした。それを今、私があなたの耳にささやきましょう。『わが子よ、知識の言葉をはなれて人を迷わせる教訓を聞くことをやめよ』（箴言一九・二七）。兄弟よ、あの人の言うことを聞くのはやめましょう。そして、信仰に立って、いのちを得る者となりましょう（ヘブル一〇・三九）」

クリスチャン「兄弟よ、私があんなことを尋ねたのは、私たちの信じていることが真実かどうか、自分で疑ったからではありません。あなたを試して、あなたの正直な心が結ぶ実を、引き出してみるためだったのです。あの人については、この世の神に思いをくらまされているのだとわかっています。私たちは真理を信じているのですから、先へ進みましょう。すべての偽りは真理から出るものではないのです（第一ヨハネ二・二一）」

希望「今こそ私は、神の栄光にあずかる希望をもって喜んでいます」

こうして二人は男から離れた。男は二人をあざ笑いながら、自分の道を去って行った。

（二十七）魔法の地

私が夢の中で見ていると、二人はさらに進んで、ある土地にやって来た。その土地の空気は、よそから来た者を自然と眠くさせるのだった。ここで〈希望〉は、ひどく頭がぼんやりしてきて、眠くてたまらなくなった。そこで希望はクリスチャンに言った。

「もう眠くて、目を開けていられないほどです。ここで横になって、ひと眠りしましょう」

クリスチャン「とんでもない。眠ったら、もう二度と目が覚めないかもしれません」

希望「どうしてですか、兄弟よ。働く者の眠りは快いものです。ひと眠りすれば、元気になれるでしょう」

クリスチャン「羊飼いの一人が、〈魔法の地〉に気をつけるようにと言ったのを覚えていませんか。あれは、眠らないように気をつけなさいという意味だったのです。ですから、『ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして慎んでいよう』（第一テサロニケ五・六）」

希望「私が間違っていました。もし一人でここに来ていたら、眠り込んで、死ぬ危険にさらされていたでしょう。『ふたりはひとりにまさる』と知者が言ったのは本当ですね。これまで、あなたと連れ立って来られたのは、私にとって神のあわれみでした。あなたはその労苦によって、良い報いを得られるでしょう（伝道の書四・九）」

クリスチャン「それでは、ここで眠くならないように、良い話をしましょう」

希望「ええ、喜んで」

クリスチャン「どこから始めましょうか」

希望「神が私たちに働きかけ始められたところから始めましょう。でも、よろしければ、あなたから始めてください」

クリスチャン「まず、この歌を歌ってお聞かせしましょう」

「聖徒らが眠気をもよおしたら、ここへ来て
この二人の巡礼者の語らいを聞くがよい。
そうだ、なんとしても二人に学ぶがよい
眠たげにまどろむ目を、こうして開いておくすべを。
聖徒の交わりは、うまく保たれるならば
地獄があらがおうとも、彼らを目覚めさせておく」

それからクリスチャンは話し始めた。

「ひとつ質問させてください。今しているようなことを、そもそもどうして始めようと思ったのですか」

希望「つまり、私がどうして初めに自分の魂の益を求めるようになったか、ということですか」

クリスチャン「ええ、そういう意味です」

希望「私は長いあいだ、私たちの町の市で見せられ、売られている物を楽しんでいました。今にして思えば、あのまま楽しみ続けていたら、私は滅びと破壊とに沈んでいたでしょう」

クリスチャン「それはどんな物でしたか」

希望「この世のあらゆる宝と富です。それに、放蕩、浮かれ騒ぎ、深酒、ののしり、うそ、みだらな行い、安息日を破ることなど、魂を滅ぼすようなことを何でも大いに楽しんでいました。けれども、神のことを聞いて思いめぐらすうちに、ついにわかったのです。こうしたものの終極は死であり（ローマ六・二一～二三）、こうしたことのために、神の怒りは不従順の子らに下るのです（エペソ五・六）。神のことは、実はあなたから聞きました。それに、愛する〈忠実〉さんからも聞きました。忠実さんは、信仰と正しい生き方のゆえに、〈虚栄の市〉で殺された人です」

クリスチャン「それで、すぐにその罪の自覚に捕らえられたのですか」

希望「いいえ。罪の悪さも、罪を犯したあとに来る滅びも、すぐには知ろうとしませんでした。みことばによって初めて心が揺さぶられたとき、私はその光に目を閉じようとしたのです」

クリスチャン「でも、祝福に満ちた神の御霊が初めて働きかけてくださったのに、どうしてそんなふうに応じたのですか」

希望「わけはいくつかありました。第一に、それが私に対する神のみわざだと知らなかったのです。神が罪人を回心させるとき、まず罪に目覚めさせることから始められるとは、思ってもみませんでした。第二に、罪はまだ私の肉にとってとても甘く、手放したくなかったのです。第三に、昔の仲間とどう別れたらいいかわかりませんでした。仲間といることも、仲間のすることも、私にはたまらなく好ましかったのです。第四に、罪を自覚させられている時間は、とても苦しく、心が震えあがるような時間でした。私はそれに耐えられませんでした。心に思い出すことさえ、耐えられなかったのです」

クリスチャン「それでは、ときにはその苦しみから逃れられたということですか」

希望「ええ、確かに。けれども、また思い出してしまうのです。そうなると、前と同じくらい、いや、前よりもひどい状態になりました」

クリスチャン「では、何があなたの罪をまた思い出させたのですか」

希望「いろいろなことです。たとえば、

一、通りで善い人に出会ったとき
二、誰かが聖書を読むのを聞いたとき
三、頭が痛みだしたとき
四、近所の人が病気だと聞いたとき
五、誰かが死んで、弔いの鐘が鳴るのを聞いたとき
六、自分が死ぬことを考えたとき
七、ほかの人が急に死んだと聞いたとき
八、けれども何よりも、自分がまもなくさばきを受けなければならないと考えたときです」

クリスチャン「そうしたことで罪の責めが襲ってきたとき、それをたやすく振り払えたことはありましたか」

希望「いいえ、とんでもない。そういうときには、罪の責めはいっそうしっかりと私の良心をつかんだのです。それに、心では罪を嫌っていたのに、罪に戻ろうと少しでも考えただけで、苦しみは二倍になりました」

クリスチャン「それで、どうしたのですか」

希望「生活を改めるように努めなければならないと思いました。そうしなければ、きっと滅びてしまうと思ったのです」

クリスチャン「それで、改めるように努めたのですか」

希望「はい。自分の罪から逃げただけでなく、罪深い仲間からも離れました。そして、宗教のつとめに励みました。祈ること、聖書を読むこと、罪のために泣くこと、隣人に真実を語ることなどです。ほかにもいろいろなことをしましたが、多すぎてここでは話しきれません」

クリスチャン「それで、もう大丈夫だと思ったのですか」

希望「ええ、しばらくのあいだは。けれども、しまいにはまた苦しみが押し寄せてきました。どれほど生活を改めても、おかまいなしにのしかかってきたのです」

クリスチャン「もう生活を改めていたのに、どうしてそんなことになったのですか」

希望「そうなったのには、いくつかのわけがありました。特に、次のようなみことばです。『われわれの正しい行いは、ことごとく汚れた衣のようである』（イザヤ六四・六）。『律法の行いによっては、だれひとり義とされることがない』（ガラテヤ二・一六）。『命じられたことを皆してしまったとき、自分たちはふつつかな僕だと言いなさい』（ルカ一七・一〇）。ほかにも、これに似たみことばがたくさんありました。そこから私は、こう考えるようになりました。私の正しい行いがみな汚れた衣のようで、律法の行いによってはだれも義とされないとしたら、どうでしょう。すべてをしてもなお、ふつつかな僕にすぎないとしたら、どうでしょう。律法によって天国に行こうと考えるのは、愚かなことでしかありません。さらに、こうも考えました。ある人が店で百ポンドの借金をしたとしま

す。そのあとは、買う物の代金をすべて払うとしましょう。それでも、古い借金が帳簿から消されずに残っていれば、店の主人はそれを取り立てるために訴えることができます。借金を払うまで、その人を牢に入れることもできるのです」

クリスチャン「なるほど。それを、自分にどう当てはめたのですか」

希望「心の中で、こう考えたのです。『私は罪によって、神の帳簿に大きな借りを作ってしまった。今さら生活を改めても、その勘定を払いきれはしない』。ですから、今どれほど行いを改めていても、やはり考えずにはいられませんでした。『それでは、前に犯した罪のせいで招いてしまった滅びから、どうしたら解き放たれるのだろうか』と」

クリスチャン「とてもよい当てはめ方です。どうぞ続けてください」

希望「行いを改めてから、ずっと私を悩ませていることが、もうひとつあります。今私がしている最善のことをよく調べてみても、やはり罪が見えるのです。新しい罪が、私の最善の行いに混じり込んでいるのです。前は、自分のことも自分のつとめのことも、思い上がって考えていました。けれども今は、こう結論するほかありません。たとえ以前の生活に落ち度がなかったとしても、私はひとつのつとめのうちにも、地獄に送られるのに十分な罪を犯しているのです」

クリスチャン「それで、どうしたのですか」

希望「どうしたかですって！　どうしたらいいかわかりませんでした。それで、忠実さんに胸の内を打ち明けたのです。忠実さんとは親しい間柄でしたから。すると忠実さんは、こう言いました。罪を一度も犯したことのない人の義を得ないかぎり、私自身の義も、世界中のすべての義も、私を救うことはできない、と」

クリスチャン「忠実さんの言うことは本当だと思いましたか」

希望「行いを改めたことに満足して得意になっていたころに、そう言われていたら、せっかく言ってくれた忠実さんを、愚か者呼ばわりしていたでしょう。けれども今は、自分の弱さがわかります。最善の行いにも罪がまとわりついているのが見えます。ですから、忠実さんと同じ考えにならざるをえなかったのです」

クリスチャン「でも、忠実さんが初めてそう言ったとき、罪を一度も犯したことがないと言えるような人が、本当に見つかると思いましたか」

希望「正直に言うと、初めはその言葉が奇妙に聞こえました。けれども、もう少し話をし、忠実さんと一緒に過ごすうちに、すっかり確信したのです」

クリスチャン「それで、その人が誰なのか、どうしたらその人によって義とされるのかを、忠実さんに尋ねたのですか」

希望「はい。それは、いと高き方の右に座しておられる主イエスだ、と忠実さんは言いました。そして、こう言いました。『あなたはこの方によって義とされなければなりません。この方が肉体をとって生きておられた日々に、ご自分でなさったこと、また木にかけられて苦しまれたことに、より頼むのです』。私はさらに、その方の義が、どうしてほかの者を神の前で義とするほどの力を持つのかと尋ねました。すると忠実さんは答えました。その方は力ある神であって、そのなさったことも、その死も、ご自分のためではなく、私のためだったのです。私がその方を信じるなら、その方のなさったことと、その値打ちとが、私のものとみなされるのです、と（ヘブル一〇章、ローマ六章、コロサイ一章、第一ペテロ一章）」

クリスチャン「それで、どうしたのですか」

希望「私は、信じることに異を唱えました。その方は私を救おうとは思っておられないだろう、と思ったのです」

クリスチャン「すると、忠実さんは何と言いましたか」

希望「その方のところへ行って、確かめてみなさい、と忠実さんは言いました。私は、それは思い上がりです、と言いました。すると忠実さんは、そうではない、あなたは来るように招かれているのだから、と言いました（マタイ一一・二八）。それから、私がためらわずに行けるように励まそうと、イエスが書き記された書物を一冊くれました。そして、その書物は一点一画まで、天地よりも堅く立っているのだと言いました（マタイ二四・三五）。そこで私は、その方のところへ行ったら何をすればよいのかと尋ねました。すると忠実さんは、ひざまずいて、心を尽くし、魂を尽くして、御子を示してくださるよう父に願い求めなさい、と言いました（詩篇九五・六、ダニエル六・一〇、エレミヤ二九・一二～一三）。私はさらに、どのようにその方に願いをささげればよいのかと尋ねました。すると忠実さんは言いました。『行きなさい。そうすれば、その方があわれ

みの座に着いておられるのがわかるでしょう。その方は、来る者に罪のゆるしを与えるために、一年中そこに座っておられるのです』。私は、行っても何と言えばよいのかわかりません、と言いました。すると忠実さんは、次のような意味のことを言いなさいと教えてくれました。『神様、罪人の私をあわれんでください。私にイエス・キリストを知らせ、信じさせてください。その方の義がなかったなら、また私がその義を信じていないなら、私はまったく捨てられてしまうのだとわかります。主よ、あなたはあわれみ深い神であり、御子イエス・キリストを世の救い主と定められたと聞きました。そのうえ、私のような哀れな罪人にも、喜んで御子を与えてくださると聞きました。私はまことに罪人です。主よ、ですから、この機会をとらえて、御子イエス・キリストによって私の魂を救い、あなたの恵みを大いにあらわしてください。アーメン』（出エジプト二五・二二、レビ記一六・二、民数記七・八九、ヘブル四・一六）」

クリスチャン「それで、言われたとおりにしたのですか」

希望「はい。何度も、何度も、何度も」

クリスチャン「それで、父は御子をあなたに示してくださいましたか」

希望「一度目には示してくださいませんでした。二度目も、三度目も、四度目も、五度目も。いいえ、六度目にもです」

クリスチャン「それで、どうしたのですか」

希望「どうしたか、ですか。どうしたらいいか、わからなかったのです」

クリスチャン「祈るのをやめようとは思わなかったのですか」

希望「思いました。百回どころか、その倍も思いました」

クリスチャン「では、どうしてやめなかったのですか」

希望「前に言われたことは本当だと信じていたからです。つまり、このキリストの義がなければ、全世界も私を救うことはできない、ということです。ですから、私は心の中で考えました。『やめてしまえば、私は死ぬ。どうせ死ぬのなら、恵みの御座の前で死ぬほうがいい』。それと同時に、このみことばが心に浮かびました。『もしおそければ待っておれ。それは必ず臨む。滞りはしない』（ハバクク二・三）。それで私は、父が御子を示してくださるまで、祈り続けたのです」

クリスチャン「それで、御子はどのようにあなたに示されたのですか」

希望「この肉の目で見たのではありません。心の目で見たのです（エペソ一・一八～一九）。それはこういうことでした。ある日、私はとても悲しんでいました。生涯でいちばん悲しかったと思います。その悲しみは、自分の罪がどれほど大きく、どれほど卑しいかを、新たに思い知らされたためでした。私はもう、地獄と、自分の魂の永遠の滅びのほかには、何も待ち受けていないと思っていました。そのとき突然、主イエス・キリストが天から私を見下ろして、こう言われるのが見えたように思いました。『主イエス・キリストを信じなさい。そうしたら、あなたは救われます』（使徒一六・三〇～三一）。

私は『主よ、私は大きな、本当に大きな罪人です』と申し上げました。すると主は『わたしの恵みはあなたに対して十分である』と答えられました（第二コリント一二・九）。私は『でも主よ、信じるとはどういうことですか』と尋ねました。すると、『わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決してかわくことがない』というみことばから、わかったのです。信じることと来ることとは、同じなのです。来る者、つまり、心と思いを尽くしてキリストによる救いを追い求める者こそ、本当にキリストを信じているのです（ヨハネ六・三五）。私は目に涙を浮かべて、さらに尋ねました。『でも主よ、私のような大きな罪人が、本当にあなたに受け入れられ、あなたに救っていただけるのでしょうか』。すると主がこう言われるのが聞こえました。『わたしに来る者を決して拒みはしない』（ヨハネ六・三七）。私は言いました。『でも主よ、私の信仰を正しくあなたに置くには、あなたのもとに行くとき、あなたのことをどのように考えればよいのでしょうか』。すると主は言われました。『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきて下さった』（第一テモテ一・一五）。この方は、すべて信じる者に義を得させるために、律法の終わりとなられました（ローマ一〇・四）。この方は私たちの罪のために死に、私たちが義とされるためによみがえられました（ローマ四・二五）。この方は私たちを愛し、ご自分の血によって私たちを罪から洗いきよめてくださいました（黙示録一・五）。この方は、神と私たちとの間の仲保者です（第一テモテ二・五）。この方は、いつも生きていて、私たちのためにとりなしておられます（ヘブル七・二四～二五）。これらすべてか

ら、私は悟りました。義はこの方ご自身のうちに求めなければなりません。罪のつぐないは、この方の血によって求めなければなりません。この方が父の律法に従ってなさったことも、律法の刑罰に身をゆだねられたことも、ご自分のためではありませんでした。それを自分の救いとして受け入れ、感謝する者のためだったのです。そのとき、私の心は喜びに満ち、目は涙でいっぱいになりました。そして、イエス・キリストの御名と、その民と、その道への愛が、心からあふれ出したのです」

クリスチャン「それはまさに、キリストがあなたの魂に示されたのですね。でも、それがあなたの心にどんな影響を与えたのか、詳しく聞かせてください」

希望「それによって、全世界はどれほど義を積んでいても、罪に定められた状態にあるのだとわかりました。また、父なる神は正しい方でありながら、来る罪人を正しく義とすることがおできになるのだとわかりました。私は、以前の生活の卑しさをひどく恥じました。そして、自分がいかに何も知らなかったかを思い知らされて、うろたえました。それまで、イエス・キリストの美しさをこれほどまでに示してくれる思いが、心に浮かんだことは一度もなかったからです。私は聖なる生活を愛するようになりました。そして、主イエスの御名の誉れと栄光のために、何かをしたいと切に願うようになりました。そうです、たとえこの体に何千リットルもの血があったとしても、主イエスのために、それをすべて流すことができると思いました」

（二十八）無知との再会

私が夢の中で見ていると、〈希望〉が後ろを振り返った。すると、二人が置いてきた〈無知〉が、あとからついて来るのが見えた。希望はクリスチャンに言った。

「ご覧なさい。あの若者は、あんなに後ろのほうをのろのろ歩いています」

クリスチャン「ええ、ええ、見えます。あの人は、私たちと一緒にいたくないのです」

希望「でも、ここまで私たちと足並みをそろえて来ても、あの人の損にはならなかったでしょうに」

クリスチャン「そのとおりです。でも、あの人はきっと、そうは思っていないのでしょう」

希望「私もそう思います。それでも、あの人を待ってあげましょう」

二人はそのとおりにした。

それからクリスチャンは無知に言った。

「さあ、おいでなさい。どうしてそんなに後ろにいるのですか」

無知「私は一人で歩くのが好きなんですよ。連れと歩くよりも、ずっとね。もっとも、その連れが気に入れば別ですが」

するとクリスチャンは、希望に小声で言った。

「あの人は私たちと一緒にいたくないのだと、言ったでしょう」

それでも、クリスチャンは続けて言った。

「とにかく、さあ、このさびしい所で、話をしながら時を過ごしましょう」

それから無知に向かって、こう言った。

「さあ、ご機嫌はいかがですか。あなたの魂と神との間は、今どうなっていますか」

無知「うまくいっていると思いますよ。私はいつも、良い思いでいっぱいなんです。歩いていると、そういう思いが心に浮かんで、私を慰めてくれるのですよ」

クリスチャン「どんな良い思いですか。どうか聞かせてください」

無知「何って、神と天国のことを思うのですよ」

クリスチャン「悪魔たちも、地獄に落ちた魂たちも、そうしていますよ」

無知「でも私は、神と天国のことを思って、それを慕い求めているのですよ」

クリスチャン「決してそこへ行けそうもない多くの人々も、そうしています。『なまけ者の心は、願い求めても、何も得ない』とあります（箴言一三・四）」

無知「でも私は、神と天国のことを思って、そのためにすべてを捨てているのですよ」

クリスチャン「それは疑わしいですね。すべてを捨てるのは、とても難しいことです。多くの人が思っているよりも、ずっと難しいのです。それにしても、あなたが神と天国のためにすべてを捨てたと、どうして、また何によって確信しているのですか」

無知「私の心がそう言うのです」

クリスチャン「知者は言っています。『自分の心を頼む者は愚かである』（箴言二八・二六）」

無知「それは悪い心のことでしょう。私の心は良い心ですよ」

クリスチャン「でも、それをどうやって証明するのですか」

無知「私の心は、天国の望みで私を慰めてくれるのです」

クリスチャン「それは、心が欺いているからかもしれません。人の心は、まだ望むだけの根拠のないものを望ませて、その人を慰めることがあるのです」

無知「でも、私の心と生活は一致しています。ですから、私の望みには十分な根拠があるのですよ」

クリスチャン「あなたの心と生活が一致していると、誰があなたに言ったのですか」

無知「私の心がそう言うのです」

クリスチャン「それは『私が盗人かどうか、相棒に聞いてくれ』と言うようなものです。あなたの心がそう言う、ですって！　このことについて神のみことばが証言しないかぎり、ほかの証言には何の値打ちもありません」

無知「でも、良い思いを持つ心は、良い心ではありませんか。神の戒めにかなった生活は、良い生活ではありませんか」

クリスチャン「そうです。良い思いを持つ心は良い心ですし、神の戒めにかなった生活は良い生活です。けれども、本当にそれを持っていることと、ただ持っていると思っていることとは、まったく別なのです」

無知「では、どういうものを良い思いと言い、神の戒めにかなった生活と言うのですか」

クリスチャン「良い思いには、いろいろな種類があります。私たち自身についての思い、神についての思い、キリストについての思い、そのほかのことについての思いです」

無知「私たち自身についての良い思いとは、どういうものですか」

クリスチャン「神のみことばと一致する思いです」

無知「私たち自身についての思いは、どういうときに神のみことばと一致するのですか」

クリスチャン「みことばが私たちに下すのと同じさばきを、私たちが自分自身に下すときです。説明しましょう。神のみことばは、生まれながらの状態にある人々について、『義人はいない。善を行う者はいない』と言っています（ローマ三章）。また、『人が心に思いはかることは、すべていつも悪い事ばかりである』とも言っています（創世記六・五）。さらに、『人が心に思い図ることは、幼い時から悪い』とも言っています（創世記八・二一）。そこで、私たちがそのことを身にしみて感じ、自分自身をこのように考えるとき、私たちの思いは良い思いなのです。神のみことばにかなっているからです」

無知「私の心がそんなに悪いなんて、決して信じませんよ」

クリスチャン「それなら、あなたは生涯に一度も、自分自身について良い思いを持ったことがないのです。でも、続けさせてください。みことばは、私たちの心にさばきを下すように、私たちの道にもさばきを下します。心と道についての私たちの思いが、その両方についてみことばが下すさばきと一致するとき、その思いはどちらも良い思いなのです。みことばと一致しているからです」

無知「どういう意味か、はっきり言ってください」

クリスチャン「つまり、こういうことです。神のみことばは、人の道は曲がった道で、良い道ではなく、よこしまな道だと言っています（詩篇一二五・五、箴言二・一五）。人は生まれながら良い道からそれていて、その道を知らないとも言っています（ローマ三章）。そこで、人が自分の道についてこのように考えるとき、つまり、身にしみて感じ、心からへりくだってこのように考えるとき、その人は自分の道について良い思いを持っているのです。その人の思いが、今や神のみことばのさばきと一致しているからです」

無知「神についての良い思いとは、どういうものですか」

クリスチャン「私たち自身について言ったのと同じです。神についての私たちの思いが、みことばが神について言っていることと一致するときです。つまり、神のご存在とご性質について、みことばが教えているとおりに考えるときです。そのことについては、今は詳しく話せません。けれども、私たちとの関わりで神について言えば、こうです。神は、私たちが自分自身を知るよりもよく私たちを知っておられる、と考えるとき、私たちは神について正しい思いを持っています。私たちが自分のうちに少しも罪を見いだせないときにも、またそのような所でも、神は私たちのうちに罪を見ることがおできになる、と考えるときもそうです。神は私たちの心の奥底の思いを知っておられ、私たちの心は、その深みに至るまで、いつも神の目の前に開かれている、と考えるときもそうです。また、私たちの義はみな、神の御前で悪臭を放っている、と考えるときもそうです。ですから神は、私たちが何かを頼みにして御前に立つことを、決してお許しになりません。たとえそれが、私たちの最善の行いであってもです」

無知「私が、神には私が見る以上のものは見えないと思うほどの愚か者だとでも思うのですか。自分の最善の行いを頼みにして、神に近づくような者だとでも思うのですか」

クリスチャン「では、このことについて、あなたはどう考えているのですか」

無知「手短に言えば、義とされるためには、キリストを信じなければならないと考えていますよ」

クリスチャン「なんですって！　自分にキリストが必要だとわかってもいないのに、キリストを信じなければならないと考えるのですか。生まれつきの罪も、実際に犯す罪も、あなたには見えていません。それどころか、自分自身と自分のしていることについて、そんな考えを持っています。その考えがはっきり示しています。あなたは、神の前で義とされるのにキリストご自身の義が必要だと、一度もわかったことのない人なのです。それなのに、どうして『私はキリストを信じている』と言えるのですか」

無知「それでも、私はちゃんと信じていますよ」

クリスチャン「どのように信じているのですか」

無知「キリストは罪人のために死なれた、と信じています。そして、神がご自分の律法に私が従うのを恵みによって受け入れてくださるので、私はのろいから解かれ、神の前で義とされる、と信じているのですよ。言いかえれば、こうです。キリストはご自分の功績によって、私の宗教上のつとめを父に受け入れられるものにしてくださる。そうして私は義とされるのです」

クリスチャン「あなたのその信仰の告白に、答えさせてください。

一、あなたが信じているのは、空想の信仰です。このような信仰は、みことばのどこにも書かれていないからです。

二、あなたが信じているのは、偽りの信仰です。義とされることを、キリストご自身の義から取り去って、あなた自身の義に当てはめているからです。

三、この信仰は、キリストを、あなたという人を義とする方ではなく、あなたの行いを義とする方にしています。そして、あなたの行いのゆえに、あなたという人を義とする方にしています。これは偽りです。

四、ですから、この信仰は人を欺くものです。全能の神の日に、あなたを御怒りの下に置き去りにするような信仰です。本当に人を義とする信仰は、律法によって自分の状態を感じ取っている魂を、キリストの義へと逃れさせ、そこに避け所を求めさせます。このキリストの義は、あなたが義とされるように、あなたの従順を神に受け入れさせる恵みの行為ではありません。それは、律法が私たちに求めていることを、私たちのために行い、また苦しみを受けてくださった、キリストご自身の律法への従順なのです。本当の信仰が受け入れるのは、この義です。魂はこの義の衣のすそに包まれ、この義によって、神の前に汚れのない者として差し出されます。こうして魂は受け入れられ、罪に定められることから解き放たれるのです」

無知「なんですって！　キリストが私たち抜きで、ご自身でなさったことに頼れと言うのですか。そんな考えでは、私たちの欲望の手綱がゆるんでしまいます。好き勝手に生きてもかまわないことになりますよ。信じさえすれば、キリストご自身の義によってすべてから義とされるのなら、どう生きようとかまわないではありませんか」

クリスチャン「無知、それがあなたの名前です。そして、名前のとおりの人です。今のあなたの答えが、まさに私の言うことを証明しています。あなたは、人を義とする義が何であるかを知りません。その義を信じることによって、神の重い御怒りから自分の魂を守るにはどうすればよいかも、同じように知りません。それに、キリストのこの義を信じる救いの信仰が、本当はどんな実を結ぶのかも知らないのです。その信仰は、心をへりくだらせて、キリストにある神のほうへ引き寄せます。そして、神の御名と、みことばと、道と、神の民とを愛させるのです。あなたが知りもしないで思い描いているようなものではありません」

希望「天からキリストを示していただいたことがあるかどうか、あの人に聞いてみてください」

無知「なんですって！　あなたは啓示とやらをありがたがる人なんですね。あなたも、ほかのみなさんも、そのことについて言っていることは、混乱した頭から出てきたものにすぎませんよ。私は本気でそう思っています」

希望「いいですか、あなた。キリストは神のうちに隠されていて、肉の生まれながらの理解では、とらえることができません。ですから、父なる神がキリストを示してくださらないかぎり、誰も救いに至るようにキリストを知ることはできないのです」

無知「それはあなたの信仰で、私の信仰ではありません。でも私の信仰も、あなたの信仰に劣らず良いものだと思っていますよ。あなたほど、頭の中に妙な考

えをたくさん持ってはいませんけれどね」

クリスチャン「ひと言言わせてください。このことを、そんなに軽々しく話すべきではありません。私の良い連れが言ったのと同じように、私もはっきり言います。父が示してくださらなければ、誰もイエス・キリストを知ることはできません（マタイ一一・二七）。それだけではありません。魂がキリストをつかむ信仰も、それが正しい信仰であるなら、神の力強い活動によって働く絶大な力で、生み出されなければならないのです。哀れな無知さん、あなたは、その信仰の働きを知らないのですね（第一コリント一二・三、エペソ一・一八～一九）。ですから、目を覚ましなさい。自分のみじめさを見て、主イエスのもとへ逃れなさい。そうすれば、主の義によって、あなたは罪に定められることから救い出されます。その義は神の義です。主ご自身が神だからです」

無知「あなたがたは歩くのが速すぎて、私はついていけません。どうぞ先に行ってください。私はしばらく後ろから行きますよ」

すると二人は言った。

「さて無知よ、まだ愚かなままでいるのか
十たびも与えられた良い勧めを軽んじて。
なおもそれを拒むなら、やがて
そうしたことの災いを思い知るだろう。
人よ、間に合ううちに思い出せ。へりくだれ、恐れるな。
良い勧めは、よく受け入れれば救う。だから聞け。
だが、なおもそれを軽んじるなら
損をするのは自分自身だ、無知よ、請け合おう」

それからクリスチャンは、連れにこう語りかけた。

クリスチャン「さあ、兄弟よ、あなたと私とは、また二人だけで歩かなければならないようです」

こうして私が夢の中で見ていると、二人は足早に先へ進み、無知はそのあとから足を引きずってついて来た。そのときクリスチャンは連れに言った。

「私はこの哀れな人が、とても気の毒です。最後にはきっと、ひどいことになるでしょう」

希望「ああ、私たちの町には、あの人と同じような状態の人がたくさんいます。家族ぐるみで、いや、通りぐるみでいるのです。しかも、巡礼者の中にもいるのです。私たちのところにさえ、そんなに大勢いるのですから、あの人が生まれた所には、いったいどれほどいることでしょうか」

クリスチャン「本当に、みことばには『神は彼らの目をくらまし、心をかたくなになさった』などとあります。それはそうと、今は二人だけですから聞きますが、ああいう人たちのことを、どう思いますか。あの人たちは、罪を自覚することが一度もないのでしょうか。そして、そのために、自分の状態が危ないと恐れることもないのでしょうか」

希望「いいえ、その質問には、あなたご自身が答えてください。あなたのほうが年上なのですから」

クリスチャン「では言いましょう。私の考えでは、ときには罪を自覚することもあるでしょう。けれども、あの人たちは生まれつきものを知らないので、そうした自覚が自分のためになるのだとわかりません。ですから、必死になってその自覚を押し殺そうとします。そして思い上がって、自分の心の道を行きながら、自分にへつらい続けるのです」

希望「あなたの言うとおりだと、私も信じます。恐れは人のためになることが多いのです。巡礼を始めるときに、人を正しく歩ませるものでもあります」

クリスチャン「それが正しい恐れであるなら、疑いなくそうです。みことばも『主を恐れることは知恵のはじめである』と言っているのですから（箴言一・七、九・一〇、ヨブ二八・二八、詩篇一一一・一〇）」

希望「正しい恐れを、あなたならどのように説明しますか」

クリスチャン「本当の恐れ、正しい恐れは、三つのことによって見分けられます。

一、その起こりによってです。正しい恐れは、救いに至る罪の自覚から生まれます。

二、それは魂を駆り立て、救いを求めてキリストにしっかりとすがらせます。

三、それは魂のうちに、神と、みことばと、神の道とを深く敬う心を生み、保ち続けます。そして魂をやわらかに保ち、右にも左にもそこからそれるのを恐れさ

せます。神をはずかしめ、魂の平安をこわし、御霊を悲しませ、敵にそしらせるようなことに向かうのを、恐れさせるのです」

希望「よく言ってくださいました。本当にそのとおりだと思います。ところで、私たちはもう〈魔法の地〉をほとんど通り過ぎたのでしょうか」

クリスチャン「どうしてですか。この話に飽きたのですか」

希望「いいえ、決してそうではありません。ただ、自分たちがどこにいるのか知りたいのです」

クリスチャン「この地を行くのは、あと二マイルもありません。でも、話を元に戻しましょう。ものを知らない人たちは、自分を恐れさせるような罪の自覚が、自分のためになるのだとわかりません。ですから、それを押し殺そうとするのです」

希望「どのようにして押し殺そうとするのですか」

クリスチャン「第一に、彼らはそうした恐れが悪魔によって生み出されたものだと思います。本当は神によって生み出されたものなのにです。そう思うので、自分を打ち倒そうとするものとして、恐れに逆らいます。第二に、彼らはまた、そうした恐れが自分の信仰をだめにすると思います。ところが哀れなことに、彼らには信仰などまったくないのです。ですから、恐れに対して心をかたくなにします。第三に、彼らは、自分は恐れるべきではないと思い込みます。ですから、恐れをものともせずに、思い上がって自信を強めていきます。第四に、彼らは、そうした恐れが、自分たちの哀れな古い自己流の聖さを取り去ろうとするのを見ます。ですから、全力で恐れに逆らうのです」

希望「私にも、そういうことに少し覚えがあります。自分のことがわかるまでは、私もそうでしたから」

（二十九）一時しのぎの話

クリスチャン「さて、私たちの隣人の〈無知〉さんは、今はひとりにしておきましょう。そして、ほかの有益な問題に取りかかりましょう」

希望「喜んで。でも、やはりあなたから始めてください」

クリスチャン「では、聞きますが、十年ほど前、あなたの地方に〈一時しのぎ〉という人がいたのを知りませんか。その頃は、信仰に熱心な人でしたが」

希望「知っているかですって！　ええ、知っています。〈正直の町〉から二マイルほど離れた〈恵みなしの町〉に住んでいました。〈逆戻り〉という人の隣に住んでいたのです」

クリスチャン「そうです。逆戻りとひとつ屋根の下に住んでいたのです。さて、あの人は一度、強く目を覚まされたことがありました。そのときには、自分の罪と、罪の支払う報酬とが、いくらか見えていたのだと思います」

希望「私もそう思います。私の家はあの人のところから三マイルと離れていなかったので、あの人はよく私のところへ来ました。それも、ひどく涙を流しながらです。本当にあの人が気の毒でしたし、あの人に望みがまったくないとも思っていませんでした。けれども、おわかりのように、『主よ、主よ』と叫ぶ者が、みな天国にはいるのではないのです」

クリスチャン「あの人は一度、私に言いました。今の私たちのように、巡礼に出ようと決心した、と。ところが、急に〈自己救済〉という人と知り合いになりました。それからは、私とは疎遠になってしまったのです」

希望「さて、あの人の話をしているのですから、あの人やそういうほかの人たちが、急に信仰から離れてしまう理由を、少し考えてみましょう」

クリスチャン「それはとても有益かもしれません。でも、今度はあなたから始めてください」

希望「では言いましょう。私の考えでは、それには四つの理由があります。

一、そういう人たちは、良心は目覚めさせられても、心は変えられていません。ですから、罪の責めの力が薄れていくと、彼らを信仰に駆り立てていたものがなくなります。そこで、生まれつきのままに、また元の道に戻ってしまうのです。ちょうど、食べた物にあたった犬のようです。気分が悪いあいだは、犬は食べた物をすっかり吐き出します。犬に心があると言えるならの話ですが、犬は好き好んで吐くのではありません。ただ胃が苦しいから吐くのです。けれども、気分が治って胃が楽になると、犬は向きを変えて、それをすっかりなめてしまいます。犬の欲は、吐いた物から少しも離れていないからです。こうして、『犬は自分の吐いた物に帰る』と書いてあるとおりになるのです（第二ペテロ二・二二）。つまり、こういうことです。彼らが天国を熱く求めるのは、ただ地獄の苦しみを感じて恐れるからにすぎません。ですから、滅びを感じて恐れる気持ちが冷めていくにつれて、天国と救いを求める思いも冷めていくのです。こうして、罪の責めと恐れがなくなると、天国と幸いを求める思いも消えてしまい、彼らはまた元の道に戻るのです。

二、もう一つの理由は、彼らが奴隷のような恐れに支配されていることです。今言っているのは、人に対する恐れのことです。『人を恐れると、わなに陥る』からです（箴言二九・二五）。ですから、地獄の炎が耳もとで燃えているあいだは、天国を熱く求めているように見えても、その恐ろしさが少しおさまると、賢くふるまうのがよい、と考え直すのです。何のためかもわからないのに、すべてを失う危険を冒すことはない。少なくとも、避けようのない、しかも無用な苦労を背負い込むことはない、と。こうして、彼らはまたこの世と調子を合わせるのです。

三、信仰につきまとう恥もまた、彼らの行く手に置かれたつまずきの石です。彼らは高慢で横柄です。その目には、信仰が卑しく、さげすむべきものに映ります。ですから、地獄とやがて来る御怒りを感じなくなると、また以前の道に戻っ

てしまうのです。

四、罪の責めを感じることや、恐ろしいことを思いめぐらすことは、彼らにとって耐えがたいのです。彼らは、みじめな目にあう前に、自分のみじめさを見たくないのです。もっとも、最初にそれを見たとき、その光景を喜んで受け入れていたなら、正しい者が走りこんで救を得る所へ、彼らも逃げ込めたかもしれません。けれども、先ほどもほのめかしたように、彼らは罪の責めや恐ろしさを思うことさえ避けます。ですから、神の恐ろしさと御怒りに目覚めさせられた思いを、いったん振り払ってしまうと、喜んで心をかたくなにします。そして、ますます心をかたくなにするような道を選ぶのです」

クリスチャン「あなたの言うことは、かなり核心に迫っています。結局のところ、すべての根は、彼らの心と意志が変えられていないことにあるのです。ですから、彼らは裁判官の前に立つ犯罪人のようなものにすぎません。犯罪人は震えおののき、心の底から悔い改めているように見えます。けれども、その根にあるのは、絞首刑の縄への恐れなのです。犯した罪を憎んでいるのではありません。それは明らかです。この男を自由の身にしてやれば、また盗みをはたらき、悪党のままでいるでしょうから。もし心が変えられていたなら、そうはならないはずです」

希望「私は、彼らが信仰から離れていく理由をお話ししました。今度はあなたが、どのように離れていくのかを教えてください」

クリスチャン「喜んでお話ししましょう。

一、彼らは、神のこと、死のこと、やがて来るさばきのことを思い出さないように、できるかぎり思いをそらします。

二、それから、人目につかないところでのつとめを、少しずつやめていきます。密室の祈り、欲を抑えること、目を覚ましていること、罪を悲しむことなどです。

三、それから、生き生きとした熱心な信者たちとの交わりを避けるようになります。

四、そのあとで、公のつとめに冷淡になります。みことばを聞くこと、読むこと、信仰についての語り合いなどです。

五、それから、神を敬う人たちの何人かについて、俗に言うあら探しを始めます。それも悪魔のようなやり方でです。その人たちに見つけたいくつかの弱さを口実にして、信仰を投げ捨てるための、もっともらしい理由を手に入れたいのです。

六、それから、肉に従う、ふしだらで、みだらな人たちにくっつき、彼らと付き合うようになります。

七、それから、ひそかに肉的でみだらな話にふけるようになります。そして、立派だと思われている人にそういうところを見つけると、喜びます。その人を手本にして、もっと大胆にそうできるからです。

八、このあと、小さな罪を公然ともてあそぶようになります。

九、そして、かたくなになって、ありのままの姿を現すのです。こうして、彼らはまたみじめさの淵へと投げ出されます。恵みの奇跡がそれを防がないかぎり、彼らは自分自身の欺きの中で、永遠に滅びるのです」

（三十）ベウラの国

私が夢の中で見ていると、巡礼者たちはこのころには〈魔法の地〉を抜けて、〈ベウラの国〉に入っていた。その国の空気はとても甘く、心地よかった。道はまっすぐその国を通っていたので、二人はしばらくそこで心を休めた。実に、ここでは絶えず鳥のさえずりが聞こえた。毎日、花が地にあらわれるのが見え、山ばとの声がその地に聞こえた（イザヤ六二・四、雅歌二・一〇～一二）。この国では、太陽は夜も昼も照っていた。つまり、ここはもう死の陰の谷を越えたところで、巨人〈絶望〉の手も届かなかった。ここからは〈疑いの城〉を見ることさえできなかった。その代わり、ここからは目指す都が見えた。また、ここでは都の住人の何人かが二人を出迎えた。この地は天国の境にあったので、輝く者たちがよく歩いていたのである。この地ではまた、花嫁と花婿の契りが新たにされた。実に、ここでは『花婿が花嫁を喜ぶように』、彼らの神は彼らを喜ばれたのである（イザヤ六二・五）。ここでは穀物にもぶどう酒にも事欠かなかった。巡礼の旅のあいだずっと求めてきたものに、この地で豊かに出会ったからである（イザヤ六二・八）。ここで二人は、都の中から大きな声が言うのを聞いた。『シオンの娘に言え、見よ、あなたの救は来る。見よ、その報いは主と共にある』。ここでは、その国の住人がみな、二人を『聖なる民、主にあがなわれた者、尋ね求められる者』などと呼んだ（イザヤ六二・一一～一二）。

この地を歩いていくと、目指す御国から遠く離れたところにいたときよりも、喜びが多くなった。都に近づくにつれて、都の姿はいっそうはっきりと見えてきた。都は真珠と宝石で建てられ、通りは金で敷きつめられていた。都そのものの栄光と、そこに照り返す日の光のために、クリスチャンは慕わしさのあまり病気になった。〈希望〉も同じ病に一、二度襲われた。そこで二人は、その病のためにしばらく伏せり、苦しさのあまり叫んだ。

「もしわが愛する者を見たなら、わたしが愛のために病みわずらっていると、彼に告げてください」

けれども、二人は少し力づけられ、病にもいくらか耐えられるようになったので、また道を歩きだした。そして、ますます都に近づいていった。そこには果樹園やぶどう畑や庭園があり、その門は大路に向かって開いていた。二人がそのあたりまで来ると、見よ、庭師が道に立っていた。巡礼者たちは庭師に言った。

「この見事なぶどう畑や庭園は、どなたのものですか」

庭師は答えた。

「王のものです。王ご自身が楽しまれるために、また巡礼者たちが心を休めるために、ここに植えられているのです」

そして庭師は二人をぶどう畑に連れて入り、おいしい実を食べて元気を取り戻すようにと言った（申命記二三・二四）。また、王が好んで歩かれる道や、好んで過ごされるあずまやも見せてくれた。二人はそこにとどまって眠った。

私が夢の中で見ていると、このとき二人は、旅のどのときよりも、眠りながらよく話した。私がそのことを不思議に思っていると、庭師が私にまで言った。

「なぜこのことを不思議に思うのですか。これは、このぶどう畑の実の性質なのです。この実は『なめらかに流れ下って、眠っている者のくちびるに語らせる』のです」

（三十一）川を渡って天の都へ

私が見ていると、二人は目を覚まし、都へ上っていく支度をした。けれども、前にも言ったように、都に照り返す日の光はあまりにも輝かしかった。都は純金でできていたのである。それで二人は、まだ顔おおいなしに都を見ることができなかった。そのために作られた器具を通して見るほかなかったのである。さらに見ていくと、金のように輝く衣を着た人が二人、彼らを出迎えた。その顔も光のように輝いていた（黙示録二一・一八、第二コリント三・一八）。

その人たちは巡礼者たちに、どこから来たのかと尋ねた。巡礼者たちは答えた。その人たちはまた、どこに泊まったのか、道中でどんな困難や危険に、どんな慰めや楽しみに出会ったのかと尋ねた。巡礼者たちはそれにも答えた。すると、出迎えた人たちは言った。

「あなたがたが出会う困難は、あと二つだけです。それを越えれば、都に入れます」

そこでクリスチャンとその連れは、一緒に行ってくれるようにと、その人たちに頼んだ。その人たちは、行きましょうと答えた。けれども、こう言い添えた。

「ただし、そこに着けるかどうかは、あなたがた自身の信仰にかかっています」

私が夢の中で見ていると、彼らは一緒に進み、やがて門の見えるところまで来た。

さらに見ていると、彼らと門とのあいだには川があった。けれども、渡る橋はなく、川はとても深かった。巡礼者たちはこの川を見て、すっかり途方に暮れた。けれども、一緒に来た人たちは言った。

「この川を渡って行かなければ、門にはたどり着けません」

そこで巡礼者たちは、門へ行くほかの道はないのかと尋ねた。その人たちは答えた。

「あります。けれども、世の初めから、その道を通ることをゆるされたのは、エノクとエリヤの二人だけです。終わりのラッパが鳴るまで、ほかにゆるされる者はありません（第一コリント一五・五一～五二）」

すると巡礼者たちは気落ちし始めた。とりわけクリスチャンがそうだった。二人はあちらこちらを見回したが、川を避けて通れる道はどこにも見つからなかった。そこで二人は、水の深さはどこも同じなのかと尋ねた。その人たちは、そうではないと答えた。けれども、そのことでは二人を助けることはできなかった。その人たちはこう言ったのである。

「この国の王をどれほど信じるかによって、川は深くも浅くもなるのです」

それから二人は水に向かい、中へ入っていった。するとクリスチャンが沈み始めた。彼は良い友〈希望〉に向かって叫んだ。

「私は深い水に沈んでいきます。大波が頭の上を越えていきます。主の波がことごとく私の上を越えていきます。セラ」

すると、もう一人が言った。

「元気を出してください、兄弟よ。足が底に着きました。しっかりした底です」

するとクリスチャンが言った。

「ああ、友よ、死の綱が私を取り巻いています。私は乳と蜜の流れる地を見ることはないでしょう」

そう言うと、大きな暗闇と恐れがクリスチャンを襲い、彼は前が見えなくなった。また、ここで彼はほとんど正気を失った。巡礼の旅の途中で受けた、あの快い慰めの数々を、何一つ思い出すことも、筋道立てて語ることもできなかった。それでも、彼の口にすることはみな、心の恐れをあらわしていた。この川で死んでしまい、門に入れてもらえないのではないかと、心の底から恐れていたのである。そばに立っていた人たちが気づいたように、彼はまた、自分の犯した罪のこ

とでひどく思い悩んでいた。巡礼者になる前の罪も、なってからの罪もである。さらに、地獄の妖精や悪霊の幻にも悩まされているようだった。ときどき、そのようなことを口にしたからである。

そのため、ここで希望は、兄弟の頭を水の上に出しておくのにたいへん苦労した。実に、クリスチャンはときどきすっかり沈んでしまった。そしてしばらくすると、半死半生でまた浮かび上がってきた。希望はまた、こう言って彼を慰めようとした。

「兄弟よ、門が見えます。私たちを迎えようと、人々がそばに立っています」

けれども、クリスチャンはこう答えるのだった。

「あなたです。あの人たちが待っているのは、あなたです。あなたは、私が知り合ってからずっと、希望に満ちていましたから」

希望はクリスチャンに言った。

「あなただってそうでした」

クリスチャンは言った。

「ああ、兄弟よ、もし私が正しい者なら、主は今こそ立ち上がって、私を助けてくださるはずです。けれども、主は私の罪のゆえに、私をわなに陥れ、見捨ててしまわれたのです」

すると希望が言った。

「兄弟よ、あなたは悪しき者について言われているみことばを、すっかり忘れてしまったのですね。『彼らは死ぬときにも苦しみがなく、その身はすこやかで、ほかの人々のように悩むことがなく、ほかの人々のように打たれることはない』（詩篇七三・四～五）。あなたがこの水の中で味わっている苦しみや悩みは、神があなたを見捨てられたしるしではありません。あなたを試すために送られたものです。これまで神から受けた恵みを思い起こすかどうか、苦しみの中でも神により頼んで生きるかどうかを、試しておられるのです」

それから私が夢の中で見ていると、クリスチャンはしばらく物思いに沈んでいた。そこへ希望が、さらにこう言い添えた。

「元気を出してください。イエス・キリストがあなたをいやしてくださるのです」

するとクリスチャンが大声で叫んだ。

「ああ、またあの方が見えます。あの方は私にこう言っておられます。『あなたが水の中を過ぎるとき、わたしはあなたと共におる。川の中を過ぎるとき、水はあなたの上にあふれることがない』（イザヤ四三・二）」

それで二人とも勇気を取り戻した。それからは、敵は石のように静まり返り、二人が渡り終えるまで何もしなかった。クリスチャンはすぐに足の立つところを見つけた。そこから先、川はずっと浅かった。こうして二人は川を渡りきった。

さて、川の向こう岸で、巡礼者たちはあの二人の輝く者にまた会った。輝く者たちはそこで二人を待っていたのである。そこで、二人が川から上がると、輝く者たちはあいさつして言った。

「私たちは仕える霊であって、救を受け継ぐべき人々に奉仕するため、つかわされた者です」

こうして彼らは門のほうへ進んでいった。

ここで心にとめておいてほしいのは、都が大きな山の上に建っていたことである。けれども、巡礼者たちは楽々とその山を登っていった。あの輝く者たちが両腕を取って、上へと導いてくれたからである。また、二人は死ぬべき身の衣を、川の中に置いてきていた。それを着たまま川に入ったのに、出てきたときには着ていなかったのである。都の土台は雲よりも高いところにあった。それでも二人は、とても身軽に、すばやく登っていった。こうして二人は、道々楽しく語り合いながら、大空を通って上っていった。無事に川を越えたこと、またこれほど栄光ある連れが付き添ってくれていることに、心慰められていたのである。

さあ、さあ、見よ、聖なる巡礼者たちが乗りゆくさまを。

雲は彼らの車、天使は彼らの導き手。

ここで誰が、その方のためにあらゆる危険を冒さずにいようか

この世を終えたご自分の民に、こうして備えてくださる方のために。

輝く者たちと交わした話は、その場所の栄光についてだった。輝く者たちは、その美しさと栄光は言葉では言いあらわせないと語った。

「そこには『シオンの山、天にあるエルサレム、無数の天使の祝会、全うされた義人の霊』があります（ヘブル一二・二二～二四）。あなたがたは今、神のパ

ラダイスへ向かっているのです。そこでいのちの木を見て、決してしぼむことのないその実を食べるでしょう。そこに着けば白い衣を与えられ、毎日王と共に歩み、語り合うのです。それも永遠に、いつまでもです（黙示録二・七、三・四、二一・四～五）。そこでは、下の地上で見たようなものは、もう見ることはありません。すなわち、悲しみ、病、苦しみ、死です。『先のものが、すでに過ぎ去ったからである』。あなたがたは今、アブラハム、イサク、ヤコブのもとへ、預言者たちのもとへ行くのです。彼らは、来るべき災の前に、神が取り去られた人々です。そして今は『その床に休み、それぞれ正直に歩んで』いるのです（イザヤ五七・一～二、六五・一七）」

そこで巡礼者たちは尋ねた。

「聖なる所で、私たちは何をするのですか」

輝く者たちは答えた。

「そこであなたがたは、すべての労苦の慰めを受け、すべての悲しみに代えて喜びを得ます。自分のまいたもの、すなわち道中、王のためにささげた祈り、流した涙、耐えた苦しみの実を刈り取るのです（ガラテヤ六・七）。その所では金の冠をかぶり、聖なる方をいつも仰ぎ見ることができます。『そのままことの御姿を見る』からです（第一ヨハネ三・二）。そこではまた、賛美と喜びの叫びと感謝とをもって、絶えずその方に仕えます。この世でも、肉の弱さのためにひどく苦労しながら、その方に仕えたいと願ってきたのでした。そこでは、あなたがたの目は見ることを喜び、耳は力ある方の快い声を聞くことを喜ぶでしょう。先にそこへ行った友人たちとも、また共に楽しむことができます。あとから聖なる所に来る人々を、一人残らず喜んで迎えることもできます。そこではまた、栄光と威厳とを身にまといます。そして、栄光の王と共に出かけるにふさわしい装いを与えられます。王がラッパの響きとともに、風の翼に乗るようにして雲のうちに来られるとき、あなたがたも王と共に来るのです。王がさばきの座に着かれるとき、あなたがたもそのかたわらに座ります。実に、王が不法を行うすべての者に判決を下されるとき、それが天使であれ人であれ、あなたがたもそのさばきに加わるのです。彼らは王の敵であり、あなたがたの敵でもあったからです（第一テサロニケ四・一三～一六、ユダ一四、ダニエル七・九～一〇、第一コリント六・二～三）。また、王が再び都へ帰られるとき、あなたがたもラッパの響きとともに帰り、いつまでも王と共にいるのです」

さて、彼らがこうして門に近づいていくと、見よ、天の軍勢の一団が出迎えに来た。あの二人の輝く者は、その一団に言った。

「この人たちは、世にいたときに私たちの主を愛し、主の聖なる御名のためにすべてを捨てた人々です。主は私たちをつかわして、この人たちを迎えに行かせられました。私たちは、この人たちが願い求めてきた旅の終わり近くまで、付き添って来ました。中に入って、喜びをもってあがない主の御顔を仰ぐことができるようにです」

すると天の軍勢は大声で叫んで言った。

「小羊の婚宴に招かれた者は、さいわいである」（黙示録一九・九）

このときにはまた、王のラッパ手が幾人も出迎えに来た。彼らは白く輝く衣を着ていた。そして美しく高らかな響きで、天そのものをこだまさせた。ラッパ手たちは、世から来たクリスチャンとその連れを、幾千幾万の歓迎の言葉で迎えた。喜びの叫びとラッパの響きとをもって、そうしたのである。

それが終わると、ラッパ手たちは二人を四方から取り囲んだ。ある者は前を、ある者は後ろを、ある者は右を、ある者は左を進んだ。天の高みを通るあいだ、二人を守るかのようであった。そして進みながら、美しい調べを高らかに鳴らし続けた。それを見ることのできた人には、天そのものが二人を迎えに降りてきたかのように見えた。こうして彼らは一緒に歩いていった。歩きながら、ラッパ手たちは喜ばしい音を響かせ、その音楽にまなざしや身ぶりを交えた。そうして、クリスチャンとその兄弟に、何度も伝えたのである。二人を仲間に迎えるのがどれほどうれしいか、どれほど喜んで出迎えに来たかを。こうして二人は、天に着く前から、いわば天にいるようなものだった。天使たちの姿を見、その美しい調べを聞いて、すっかりその中に包まれていたからである。ここではまた、都そのものが見えていた。都じゅうの鐘が鳴り響いて、自分たちを迎えているように聞こえた。けれども、何にもまして、このような仲間と共にそこに住むこと。それも世々限りなく住むこと。それを思うと、二人の心は熱い喜びに満ちた。ああ、

その栄光ある喜びを、どんな舌が、どんな筆が言いあらわせるだろうか！　こうして二人は門の前に着いた。

さて、二人が門の前に来ると、その上には金の文字でこう書かれていた。

『いのちの木にあずかる特権を与えられ、また門をとおって都にはいるために、その戒めを行う者たちは、さいわいである』（黙示録二二・一四）

それから私が夢の中で見ていると、輝く者たちは、門で呼ばわるようにと二人に言った。二人がそうすると、門の上から何人かがのぞいた。エノク、モーセ、エリヤなどであった。その人々に向かって、こう告げられた。

「この巡礼者たちは、この国の王を愛するゆえに、〈滅びの町〉からやって来たのです」

それから巡礼者たちは、初めに受け取っていた証書を、めいめい彼らに差し出した。証書は王のもとへ届けられた。王はそれを読むと、こう言われた。

「その人たちはどこにいるのか」

すると、こう答えがあった。

「門の外に立っています」

そこで王は命じて言われた。

「門を開いて、信仰を守る正しい国民を入れよ」（イザヤ二六・二）

私が夢の中で見ていると、この二人は門を入っていった。すると見よ、入ると同時に二人の姿は変わり、金のように輝く衣を着せられた。また、竪琴と冠を持って出迎え、それを二人に与える者たちもいた。竪琴は賛美するため、冠は誉れのしるしである。それから夢の中で聞いていると、都じゅうの鐘が喜びのあまりまた鳴り響いた。そして二人に向かって、こう言われた。

「主の喜びに入りなさい」

また、二人自身が大声で歌って、こう言うのが聞こえた。

「御座にいますかたと小羊とに、さんびと、ほまれと、栄光と、権力とが、世々限りなくあるように」（黙示録五・一三）

さて、二人を入れるために門が開かれたちょうどそのとき、私は二人のあとから中をのぞいた。すると見よ、都は太陽のように輝いていた。通りも金で敷きつめられていた。そこには大勢の人が歩いていた。頭には冠をかぶり、手にはしゅろの枝を持ち、賛美を歌うための金の竪琴を携えていた。翼のある者たちもいた。彼らは絶え間なく互いに呼びかわして言った。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、主」（黙示録四・八）

それから門は閉ざされた。それを見て、私は自分もあの人たちの中にいたらと願った。

（三十二）都の門から退けられる無知

さて、私はこうしたことをすべて見つめていた。そのとき振り返ってみると、〈無知〉が川岸までやって来るのが見えた。けれども、彼はすぐに川を渡ってしまった。あの二人が出会った困難の半分も味わわずに済んだのである。ちょうどそのとき、そこには〈空しい望み〉という渡し守がいた。その渡し守が舟で彼を渡してやったからである。それから無知も、先の二人と同じように、門まで行こうとして山を登っていった。ただし、彼は一人きりだった。誰一人出迎えて、わずかでも励ましてくれる者はいなかった。

門の前まで来ると、無知は門の上に書かれた文字を見上げた。それから門をたたき始めた。すぐにでも入れてもらえるものと思っていたのである。けれども、門の上からのぞいていた人たちが彼に尋ねた。

「あなたはどこから来たのですか。何を望んでいるのですか」

無知は答えた。

「私は王とご一緒に飲み食いしました。また、王は私たちの大通りで教えてくださいました」

そこで人々は、王のところへ持っていってお見せするから、証書を出すようにと彼に求めた。無知は懐を探ったが、証書は見つからなかった。すると人々は言った。

「証書を持っていないのですか」

無知はひと言も答えなかった。そこで人々は王に知らせた。けれども、王は無知に会いに降りて来ようとはされなかった。そして、クリスチャンと〈希望〉を都へ案内したあの二人の輝く者に命じられた。外へ出て無知を捕らえ、手足を縛って連れ去るように、と。輝く者たちは無知をかかえ上げ、空中を運んでいった。そして、私が丘の中腹に見たあの戸のところまで来ると、彼をその中に入れた。そのとき私は、地獄への道が〈滅びの町〉からだけでなく、天の門からさえも通じていることを知った。こうして私は目が覚めた。見よ、それは夢であった。

（三十三）結び

さて読者よ、私は自分の夢をあなたに語った。
解き明かせるものなら、私に解き明かしてほしい。
あるいはあなた自身に、あるいは隣人に。だが気をつけてほしい
解き違えることのないように。
それは益となるどころか、ただ自分を欺くばかりだ。
解き違えから、悪は生じる。
また気をつけてほしい、度を越して
私の夢のうわべをもてあそぶことのないように。
私の用いた象徴やたとえのせいで
笑い出したり、言い争ったりすることのないように。
それは子供や愚か者に任せておくがよい。だがあなたは
私の語ることの中身を見て取るがよい。
幕を引き開け、私のおおいの内をのぞき
比喩をめくってみるがよい。そして怠らずに
そこに捜し求めて、見いだしてほしい
誠実な心の助けとなるものを。
そこに私のかすを見つけたなら、ためらわず
投げ捨てるがよい。だが金は取っておいてほしい。
私の金が鉱石にくるまれていたら、どうだというのか。
芯があるからといって、りんごを捨てる者はいない。
けれども、すべてを空しいものとして捨てるなら
私はまた夢を見ることになるかもしれない。

天路歴程

2026年11月23日版
著者　ジョン・バニヤン
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/pilgrims-progress/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/pilgrims-progress
（十三）忠実の途中から最後までは、原文（The Pilgrim's Progress）からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC BY-SA 4.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。